

---

# 戴邦物語

騎馬裕一郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戴邦物語

### 【Zコード】

Z0241L

### 【作者名】

騎馬裕一郎

### 【あらすじ】

海中有三神山、名曰蓬萊、方丈、瀛州、仙人居之。ある日、千里は美しい芳園にいる夢を見る。その夢に毎晩現れる少女。彼女は静かに佇み千里を親しげに呼ぶ。そして、行方不明になつていった親友、翔を偶然見かけたことから千里は日本とは異なる別の世界があることを知る。そんな中、千里の住む町では、人が行方不明になる事件が頻発し、謎の凶獣が人々を襲う。人が墮ちるとは、人々が懼れる憧苑とは。そして美に憧れ、ある將軍との出会いにより彰国の争いに巻き込まれてゆく雛龍　子琳。我々の世界とは異なる、戴邦と

いつ古代中国のような異世界を舞台に、千里の壮大な戦いが始まる。

子琳回顧編 彰と成との国境間の緊張は過去の戦から徐々に苛烈さを増し始め、ついに成は東璃の平定に魏素という無名の将軍を任命し彰攻略にあたらせた。一方彰の守将瀑？は、王宮を牛耳る司馬氏との軋轢によって妨害を受けながらも、自らの理想の為 国政を正す為に国境を守りつつ子琳を使っての謀反を企てた。次第に子琳は両者の政争に巻き込まれていくも、虐殺で親を失った女の子瓊凜や武官の趙駿らとともにこの困難を乗り越えてゆく（予定）。  
不定期更新です。まとまり次第あげてゆきます。

## 東璃争乱

景安十七年、

彰王桂岱、東璃邦十余州を統べ、

其の威甚だしく、英声天を突かんが如し。

天下に号令し諸侯是に伏して、天下安寧せしむ。

贊の宵鳳、之を悪みて自ら鳳師を率いて彰を討たんとするも

玩州楚驥にて桂岱是を討ち、此に贊滅ぶ。

贊の西芯王倒れて後、凡そ五十余年に及ぶ争乱遂に結し万庶安樂す。

彰王桂岱、帝冠を戴きて名を東彰師君、昂竜と称し、元号を章初と為す。

是を以て、畿禁城太極殿に至り、龍廟の御前にて古龍尊に天下安寧の詔を奏し、功政を敷く。

昂竜、諸邦を徳を以て治る。

章初八年、

昂竜、殿中にて乱心し、侍従數多扼殺す。

諫臣あるも、此を磔刑に処し、一族皆絞首に処して宮門に晒す。近臣懼きて、皆閉口す。

迄に昂竜疾みて、懷郷の禽する所と為り、顛狂して墮つ。

乃ち諸侯叛きて、各々東璃邦の城府に籠りて抗ふ。

昂竜の仔、漢竜立つも、卒に諸侯を鎮めること能はず。

天下悉く乱れ、群雄興亡し、戦火竜が渦を巻くが如し。

貴賤老少皆嘆息し、墮つ者日に日に多し。

墮つ者、傍獣と為りて民を喰らい、民嘆きて更に傍獣殖ふる也。

東璃邦、以て再び乱世と為る、況や戴邦をや

月が綺麗な夜だった。

群青色を少し足したような黒々とした天には、いつもよりも少し大きく見える黄月と、その月を中心にして散りばめられた星々が微かな色を帶びてからからと輝き、

大地に佇むゴツゴツとした褐色の岩肌を静かに照らして、淡い影を作っている。

そして深夜の気持ちのよい冷たい風が彼の白い肌を優しく撫で、長めの後ろ手に結つた黒髪と山吹色に染め上げられた絹の装束を靡かせた。

その風が、彼がいる岩山の眼下に広がる木々の梢を揺らし、暗緑のさざ波を幾重にも起こして、葉の擦れる音を辺り一面に響かせている。

この場所から眺めるとまるで緑の海のようだ。

彼はここからの眺めをとても気に入っていた。

稜線が連なる山に囲まれた盆地に鬱蒼と広がる森のほぼ中央、そこに切り立った岩山が三つほど隆々と聳え、

その頂上からはどこかへと繋がる山道に、地平線まで敷き詰められた森と空との境、そらには小高い山の斜面にへばりつづけに造られた山城までを一望することができる。

この辺りに住む人は、この岩山を三豊山と呼んでいるが彼は知らない。

三豊山の石垣には樹齢五十年ほどの若い松が何本もがっしりと幹を伸ばし、

僅かにある平らな場所にはふつくりとした芝が所狭しと生い茂っている。

雲がない日にはそこに寝転がって、星と星を結んでいろいろなものを描いてみたり

山城の中に見える外灯の光の数を指折りして数えながら、あの街の中にはどのくらいの人が住んでいるのだろう、とか  
どんな生活をしているのだろうと考えるのが最近の楽しみになつていた。

この城の名を建恭けんきょうというがこれもまた彼は知らない。

街は山の麓から一重になつて中腹まで連なる城壁に堅く囲まれ、  
城壁と城壁の間からは大きな建物の煌びやかな屋根や尖塔の頭が飛び出しており、

その高低差を利用して内壁を隔てて一段の階層に分かれ、外壁には東西南に鉄の門扉を構えている。

そして商店や家屋が建ち並ぶ街路は綺麗に区画され、さながら一段重ねた碁盤のようであった。

上の階層には、政厅らしき豪壮な建物が立ち並び、じょうじょう城牆に旗幟きしを何本もはためかせて重々しい威厳を放っている。

比較的大きな街であることは彼にも理解できた。

いつもは、細い指を使って街灯の数を三百くらいまでは数えてみるのだが、その数の多さに途中で混乱してわからなくなり、ついには飽きて仰向けになつて星で絵を描くのが常であった。

だから今日こそは数え上げてやろうと意気込んでいたのだが、この場所に降り立つた時、その意気込みは握りこぶしと共に解けてしまつた。

幾つもの大きな火柱が凄まじい噴煙をあげて街を覆い青黒い空を紅に染め上げていたのだ。

少しばかり街から視線をずらせば、街へと続く山路には点々と松明と思われる光が列をなして右往左往している。彼がここに来た時はすでに街の半分以上が火焔に呑まれ、

燃える城を囲む影の群から沸き起る鬨の声や、鼓角の軍声が風の空を切る音を搔き消すほどに円下に響き渡っていた。

たくさん的人がいたのに。

彼はそう呟くとさびしげに煌々と炎上する街並みをじっと見下ろしていた。

すると、思いもよらない言葉が口から出た。

綺麗。

はつとして思わず出した言葉を呑みこもうとした。

そして、そんな言葉を発してしまった自分を少し恥じ、目を瞑つて首を横に振る。

暗黒の中に煌めく焰の群は、彼に美を感じさせるほど家屋を種火に綺麗に燃え盛っていた。煌々と、肅々と。

彼はあの街で起こっているだらう惨劇を想像し、こゝは感動ではなく悲哀を感じねばならないと何度も心に念を打ちつけて、再び瞼を開く。

だが、やはり彼の眼に映る光景は彼に悲しみではなく感動を心に呼び起こさせるのだった。

情景としての美しさと言つよりも、むしろ滅びの美と言つべきなのだろうか、なんとも形容し難い感情が彼の心を強く打ち、胸がいっぱいになりそうだった。そして涙が頬をつたう。

そんな自分に小さな苛立ちと驚きを覚えながら数えそびれた手で軽く鼻を摩り、ぼーっと感慨に浸つていると突然噴煙の矛先がこちらの方に変わり、突風が森全体を吹き抜けた。

先ほどまでの木々のざざ波は途端に荒れ狂う大波へと変貌し、彼は吹き飛ばされないよう足を踏みしめ、煙が目に入らないよう顔を長い袖で覆いどうにか街を見ようとした。彼はその街の最期を見てお

きたかつた。

突風は街の火柱を一層燃えあがらせ、ついに街の一一番大きな建物までもが炎上し始め瓦解した。

盛隆を極めると思われていた彰王朝が衰退し、各地で諸侯が自らの領分の拡大を狙つて争う戦乱の時代、このような光景は決して珍しいものではない。建恭もまた他国の侵略を受け戦火に巻き込まれたのであった。彼にもそれはわかつていた。だが分かつていながらも、どうしてか美しかつた。

長い突風が止み、顔を覆つていた腕を力なく落とす。強風で街の火はその火種を殆ど消費し尽くし微かなものとなつていた。そしてこの岩山の頂まで生き物の焼けたような臭いが届き、彼は思わず鼻をおあつてしまふ。焦げ臭く、血生臭い。一瞬にして醜悪な現実の慘さに引き戻され、彼の滅びゆく街に対する憧憬は薄れてしまつた、興が冷めたと言つてもいい。とにかく今までの感情の昂りは抑え込まれ、人並み以上の嗅覚をもつ彼は、すぐにでもこの場を離れたい気持ちが強くなつた。

そして小さな溜息をつき、この場所に訪れるることはもうないだろう、と最後の一瞥をくれて彼が踵きびすを返そうとしたとき、一瞬うなじに針先が刺さるような刺激を覚えた。

刺激の原因を確かめようと首に手を伸ばすが、触れる前に手は意思に反してピタリと止まり突然の痺れが身体を縛り付け、同時に手足の感覚が遠くなつた。

彼は街の方角を向いたまま直立不動となり、わずかに動く目を瞬かせる。

一体自分の身に何が起こっているのか状況が掴めない。動搖が呼吸を荒くし、思い通りに動こうとしない脚に意識を集中させるにも手間取つた。

すると、後ろから聞いたことのない男の声がした。

「やつた、効いた！」

続いて何人かのどよめきにも似た声があがる。彼はさらに狼狽し、ここへ来たことを酷く後悔した。

「捕えたぞ！」

襟を掴まれて地面に引き倒され、そのまま仰向けにされた。そして頸には月の影を端に写したるほどにギラギラとした短刀が突き付けられ、完全に動きを封じられてしまった。

彼はもつと後悔する。さつきとは違う涙が目に溜まり頬を零れた。そして、針先のような痛みがこの痺れを引き起こしたのだと混乱した頭の中でなんとか悟り、解を得る。

### 吹矢の毒。

麻痺薬を仕込んだ毒矢を首に撃ち込まれただろう。しかし、この風の中で当てるとは恐ろしい命中力である。彼は少し感心してしまった。

さらに彼を麻痺させるほどの毒となれば、そこらの毒では役不足である。となると、彼に対して用意されたことは明白であった。すうじゅう 雛龍である彼を。

何をされたかがわかつても、手足が思うように動かせない彼にはすでにどうしようもなく、恐る恐る天を見やると、六人の赤黒い甲冑を着込んだ男達がまるで彼を狩った獲物の取り分を相談しているかのように見下ろし会話している。

顔は光源である円を背にしているためよくはわからない。内一人が隣の長髪の男に言つ。

「本当にこんなガキが雛龍なのか？俺達にビビって泣いちまつてゐぞ」

その長髪の男は赤い羽根をあしらつた兜<sup>かぶと</sup>を脱<sup>ぬぐ</sup>ぎ、片膝<sup>かたひざ</sup>をついて彼の顔を覗き込んだ。

「確かに雛龍だ。この紋様<sup>しおりがな</sup>の装束<sup>きぎゆつ</sup>と、左中指にある？塊<sup>は</sup>が填められた指輪<sup>しゆりん</sup>、そして右腕<sup>うで</sup>の銀<sup>ぎん</sup>の臂環<sup>ひかん</sup>、まさしく伝承<sup>でんしょう</sup>にある通りだ」

？塊<sup>は</sup>とは赤い珠<sup>たま</sup>、臂環<sup>ひかん</sup>は腕輪<sup>うでわ</sup>のことである。月光<sup>げいこう</sup>がその男の顔を半分照らした。肩まで届く黒髪<sup>くろかみ</sup>に鋭い鷹<sup>たか</sup>のよつな眼<sup>まなこ</sup>、整つた鬚鬚<sup>じしゆ</sup>、比較的若く見えたが今の彼にはそんなことはどうでもよく、一刻も早くこの危機的な状況<sup>じょうけい</sup>を開ける情報<sup>じょうほう</sup>が欲しかった。

彼の頸<sup>くび</sup>に刀を突き付けている男が弱氣な声で長髪の男に言つ。

「瀑<sup>ばく</sup>?、やはり不味いのではないか。いくら国のためとはいえ仙獸<sup>せんじゆ</sup>である雛龍<sup>ひづる</sup>を利用するというの?」

どうやらこの瀑<sup>ばく</sup>?という男がこの六人の長らしい。瀑<sup>ばく</sup>?は怒氣<sup>いき</sup>をこもらせてい言つ、

「建恭も陥落した。彼奴<sup>かれつれ</sup>らの城民<sup>じょうみん</sup>に対する凌辱<sup>りやうにふ</sup>を見ただろ?。最早我々に残された時間は少ない、手段など選んではいられないのだ」  
瀑<sup>ばく</sup>?が目を離している隙に強張つた頸<sup>くび</sup>を傾け全員を見渡すと瀑<sup>ばく</sup>?を含めた三人の甲冑<sup>こうしゆ</sup>は所々破損して血のようなものが付着し、それぞれの顔は月光で陰影<sup>いんえい</sup>が現れるほどに痩けていた。

しかし、と瀑<sup>ばく</sup>?の後ろで腕<sup>うで</sup>を組み顎鬚<sup>あごひげ</sup>を蓄えた大男<sup>おとな</sup>が快活な声を出して笑つた。

「まさか本当に雛龍<sup>ひづる</sup>がこの地に降邦<sup>りようぱう</sup>しているとは思いもよらなかつたぞ。俺達は悪運が強いようだ。まったく、一月森を探し回つた甲斐<sup>かい</sup>があつたというものだ」

「ああ、この地を離れる前に捕えることができよかつた。匡鉄<sup>きょうてつ</sup>、大手柄<sup>だいしやう</sup>だ」

どうやらこの者達は以前から彼を狙つていたようで、あの街に何らかの関わりを持つものようだ。

「瀑<sup>ばく</sup>?は彼に向き直り胸の前で手を組み合わせて拱手<sup>こじゅ</sup>した。

「事態は急を要す故に、正礼は御赦免下され。神祖の御子みこ  
のしんそような無礼、本来ならば赦されるものではないことは重々に承知  
している。だが今の我々にはあなたの力がどうしても必要なのだ」

どこか高圧的な声と態度に彼はお願いされているのにも関わらず、怖気づいてしまった。無礼も何も彼にとってこの男達は単なる野蛮な人間である。力を貸すどころかこの場から逃げたい一心であり、頼まれごとなど請け負うはずもなく必死に目を逸らそうとした。

答えない彼に対し瀑？はさらに、

「……雛龍ならば、あの毒程度なら声ぐらこは出せるはずだ。そうだな、名は何と申されるか。私は彰國第三軍將帥じょうくわい、瀑ぱく? と申す。これらの方は私の配下ひがいと私と志を等しくする者達だ」

優しさの裏に押し迫るような気迫を孕む声は、狼狽した彼に強迫観念を植え付けるのに十分な威力を有していた。そして沈黙が続く。瀑？は無理に笑んだような表情を全く崩さずに彼の返答を静かに待つてゐるようだった。

睨み合つてどれくらいの時間が経つだらうか。恐らく少しつと  
二門、ふうざつ、うだ

彼にはとてもその張り詰めた間を耐えられそうになく、ついに折れてしまつた。

「……子琳」

と、精いつぱいの力を振り絞つて答えた。  
瀑？はそれを聞いてわずかに口角を押し上げ微笑をつくり、再び拱

「あいわかつた。では一先ず、我々と共に高鮮じょうせんまで来てもらつがよ

ろしいな

高鮮とはここから一番近い城塞のある地名であるが、彼  
子琳は知る由もない。

そんな所へ行きたくない」と首を横に振るうにも、瀑？の冷たい目がそれを制した。

子琳は彼等の甲冑に染みついた血の臭いが怖かつた。そしてこれから何をさせられるのかという不安から手足が痙攣したように震える。さつきまで安全な場所で傍観者でいた自分が、一転して頸元に刃先迫る被害者になってしまふ事にある種の無常を感じたことだろう。

頸元に揺らめく切れ味の良さそうな短刀。斬られれば痛いはずだ。自分を利用して用が済めば殺すだろうか。ここで拒めば殺すだろうか。あの冷徹な笑みは何か裏があるのか。

などと、あらゆる不安が走馬灯のように頭を巡る傍らで、ある一つの事実に気付く。手足に感覚が戻り始めたのだ。元々龍は、毒というものにある程度の耐性がついている。その生物を超越した肉体は、毒を体内で無毒化してしまうからだと言われているが定かではない。龍自身すらよくは知らないのだから人の知る限りではないだろう。

動かなかつた指を彼等に氣付かれぬように屈伸し、次の行動への精度を確かめた。

いける。

脱出への希望が湧く。だがその為には彼等の隙が必要となつたが、いずれも歴戦の熟練者と見え一向に隙を見せる様子がないどころか、要らぬ行動をとれば女子供でも容赦なく殺してしまいそうな、そんな殺氣に漂つっていた。それは彼等の追い詰められたような表情からも窺い知ることができる。

子琳は思うように動かない身体で隙など作りようもなく、ただ外界からの奇跡を願うしかなかつた。

「瀑？はすつゝと立ち上がり脇の男に、  
「よし、長居は無用だ。発つぞ、離龍を縛れ」  
と、さつきの笑みなどなかつたかのように命じ、  
そしてそのまま導かれるように突出した崖の先端に向かつて、眼下  
に広がる建恭の惨憺たる光景を見下ろした。  
軍声は止み城外には勝利の歓呼がこだましている。

突然、瀑？は息を大きく吸い、どこからそんな大声が出せるのか  
といふぐらゐの大きな怒声で叫んだ。

「見ていろ！成の畜生ども！建恭の民の無念はこの瀑？が必ず晴ら  
す！この屈辱、決して忘れはしないぞ！建恭の民よ、これが誓いの  
印だ！」

声は憎悪に染まり、暗黒の山間に何度も響く。そして、短刀で髪を  
切ると、それを紐で括り城邑へ向かつて放つた。髪は風に乗つて森  
へと落ちてゆく。

あっけにとられた子琳がほかの男達の顔を目をよく凝らして見ると、  
大人げなく泣きながらこれに頷いていた。

ある者は唇を噛み千切らんばかりに歯を食いしばり口元から涙と血  
を垂らしている。

その時、子琳はその泣いている男達を見て、心にふつと判別し難い  
感情が沸き起こつた。状況はよくは呑み込めないが、彼らは今必死  
に抗おうとしている。憎しみに燃えている。滅びようとしている。  
ただそれだけなのに、全く関係のない者たちなのにどうしてこんな  
に心が揺れ動くのだらう。

だが、腕を後ろに回され縛られそうになつて、はつと我に帰つた。  
こんな奴らに关心など寄せていてはいけない、早くなんとかしなけ  
れば脱出が困難になつてしまつ。

その時、崖の近くにいた男達の一人が崖下を指さし声を荒らげて叫んだ。

「成軍が森に入ってきたぞ！」

男達が一斉にその指さす方向を見ると、城から少し離れた場所から、暗黒の森の中に揺らめく松明の群がこの岩山へ蛇のように列をなし向かってきているではないか。おそらく千はくだらない大人数である。予想外のことであったのか男達は見るからに動搖し、慌ただしく立ち上がりてこの事態にどう対処するのかを半ば怒声混じりに話し合い、ついには激しい口論となつた。

聞くと、こんなに早く敵が動くとは思っていなかつたようで、そしてなぜ自分たちの場所が知られたのかわからず、誰かがこの中に内通者がいるのではないかと言つた。しかし、瀑？がそれないと咤咤する。

次第に男達の意識はこの小さな子供から岩山の下に迫りくる松明へと移り、子琳に突き付けられていた短刀はすでにその刃先を見失い空を揺らめいていた。

子琳はこの機を見逃さなかつた。隙を見計らつて縄が縛りかかつた腕を振りほどき前に右肩から倒れこむと、感触の薄い左腕を必死に動かし填めた指輪の珠を汗ばんだ額につけた。縛ろうとしていた男を除き、男達は議論に熱中してその動きへの認識が一瞬遅れる。男達の心の中でわずかに子供と油断していたことが災いを招いた。この少年はただの子供ではない、龍なのである。だがその行動を視界の端に捉えた瀑？だけが、何が起ころうとしているのかを瞬時に悟る。最悪の事態が起ころうとしていることを。

先に叫んだのは瀑？　それは瀑？の将帥としての本能が最善の行動を直感的に導き出し、舌を弾いたのだろう。大喝の如き一声。目を閉じろ！！

それは命令であった。

そしてほぼ同時に子琳が恐怖でワナワナと震えてうまく出ない声を必死に絞り出して、地面に吐き捨てるように術句を唱える。

「汝、憧苑しょうえんを求むるか。汝、天啓に応えるか。龍の名の下に於いて其の真理を問わん。  
微懾招来ぎよけいしょうらい！」

言い終わるや否や、子琳の周りの地面に青く太い光線が現れ円となり、内側に四字の象形文字が浮かび上がった。そして円を中心に空気が巻き込まれ渦を起こし、円から漏れる青い光線が束となつて螺旋状に子琳の身体を柔らかく包みこんでゆく。

まばゆく、かつ温もりに満ちたその光は岩山の頂を青く染め、街の高所で紅く燃え猛る炎と対照的な色合いを醸し出し、光が混じりあう天空に淡い赤紫を浮かび上がらせた。

次の瞬間、子琳の周囲にいた男達は温い湯に浸かっているかのような感触を覚える。心地の良い温もりが、甲冑と皮膚を突きぬけ心にまで染み渡るようにじんわりと包み込み、どこからか立ち込めた百花の艶やかな薫りが彼等の心の緊迫を優しく解きほぐす。

瀑？の言う通り彼等は目を閉じていた。瀑？の田ごろの統率のかげとも言つべきか。彼等は周囲を視認できないものの、自分達の周りが一瞬にして今までとは違う空間に変わったということはなんとなくわかった。いや、変わったというより自分の精神がその空間を五感ではないもので知覚しているような感覚に陥り始めたというべきだろう。

青白いような光が辺りを取り巻いている。次第に互いの声は遠くなり、個々人の気配すらついにはなくなつた。まるで一人がぼつんと知らない場所で無防備に立つているような感覚だ。聞こえるのは小川のせせらぎと、聞いたこともないような美声で鳴く歌鳥の囁り。

孤独感、焦燥感は微塵も感じない、むしろ充足感で心身ともに高揚していた。

何度も目を開けて眼前に広がる情景を見たい衝動に駆られはしたものの、武人である彼等は必死に歯を食い縛つて耐えた。見れば、取り返しのつかないことになりそうな気がした。

数十秒の永遠とも思える誘惑の時が過ぎ、周りの音が段々と青い光に混じつて離れてゆく。そして離れゆく音に反して近づいてくる雜音、最初はなんなか瀑？を含め誰も分からなかつたが、次第に雜音が人間の唸り声のようなものに変わつた時、瀑？は軽く舌打ちをする。その奇声はさつきまで隣にいた仲間の悲鳴にも似た絶叫だった。

立ち込める花の香りが風に搔き消されて、皆が恐る恐る目を開けると、さつきまでそこにいた仲間の一人が屈みこんで身体を震わせ悲鳴をあげていた。

「黄起！」

「待て！」

近寄ろうとする他の者を瀑？は制す。そして、

「孔淵、早く雛龍の身動きを封じろ！雛龍は墮とした人間を操ることができる！」

その言葉は、子琳に短刀を突き付けていた男に向けられていた。孔淵と呼ばれるその者は即座に事態を把握し子琳の結つた黒髪を掴んで無理やり引き起こした。

僕を……助けてっ！

うずくまる男の絶叫はうなり声へと変わり、頭部からは黒い角が頭皮を突き破つてその尖端を露わにしていた。この時点で、黄起と呼ばれていた男は四肢で地面に立ち、一本の角と五つの尾を生やして、破り捨てた服の隙間から赤黒い体毛が皮膚を覆っていた。耳まで裂

けた口元からは血で赤濡れた牙がはみ出している。最早この生き物を人間というには些か無理があつた。

「 ?<sup>そう</sup>だ！」

と、誰かが叫ぶ。?とは豹に似た、一角と五本の尾もつ獸である。かつて人間だつたものは雄叫びをあげると、筋肉が委縮し限界まで膨らんだ後ろ脚で芝の地面を蹴りあげ、甲冑をつけたまま一直線に子琳を押さえようとする男の方へと突進し、その頸に鋭い牙をたてて食らいついた。

抗う術なく、孔淵は口と頸から血を噴き出し声にもならぬ声をあげて、どうと後ろに押し倒される。

鮮やかに噴出した血液は側にいた子琳の白い肌と装束を真つ赤に染め、黒髪を濡らした。初めて見る他人の血に子琳は酷く狼狽うろたえる。が、悲鳴をあげようにも声は喉もとで停止し言葉にならなかつた。そして血独特の鉄のような臭いが彼の思考と理性を減摩し、すぐさま孔淵の頸を齧かじる獸に他の男達を襲うよつ心の中で命じた。

もう自分の助かることしか考えることができず、息を乱し結われた髪を振りほどいてただこの惨劇が早々に終わることを切に願つた。元はと言えば彼等が無理やり自分を捕えようとしたからこうなつたのだ、非は相手にある。自分は間違つていない。そうだ彼等が悪いんだ。そう心に言い聞かせるのに精いっぱい、瀑?<sup>そう</sup>がすでに脇から剣を抜いていることなど見えていなかつた。

そして?が腰を抜かして動けない男に飛びかかるよつとした瞬間横から飛び出した瀑?の剣が一閃の半円を宙に描く。その一閃でかつての人間は空中で頭から真つ二つになり、残骸が地面に散乱した。ついに子琳の脱出の手段はここに断たれた。

全身を使って呼吸をし、空氣を吸おうとするが上手く吸えない。しかも腰が抜けて膝を立たせようにもうまいかず、まだ感覚の確かでない腕で地面を這つて逃げようとした。

彼等の仲間を間接的にも殺したのだから、どんな仕打ちが待つているのかは想像に難くない。

殺される。

逃げなければ殺されてしまう。どうにか、どうにかして。

一方、瀑？は血の滴る剣を持ったまま立ち尽くし、痙攣した残骸を見るわけでも頸から血を流して事切れている者を見るわけでもなく、ただ視点が定かでない目で俯いていた。

匡鉄きょうてつはそんな瀑？ばくあを後日に剣を勢いよく引き抜き、怒髮天じはつてんの形相を露わにして叫ぶ。

「小童、よくも黄起と孔淵を！ハつ裂きにしてくれるわ！」

匡鉄がたじろぐ子琳に向かつて飛びかかるうとした矢先、またしても瀑？がそれを制した。今度はより恐ろしく冷たい眼で。

匡鉄はその威圧に気圧され、やがて深い溜息を吐くと空くうに浮いてやり場のない剣を遣る瀬無くおろした。

子琳はその間にも血で濡れた髪をかき上げ、肩まで肌蹴た装束もそのままに必死に這つてどうにか子供一人通れそうな石窟に身体を放り込もうとする。

しかし、瀑？の血に塗れた剣先がその眼前を遮つた。血の滴る間の刃に自分の恐怖でひきつった顔が映る。今まで見たこともないような強張つた表情をしていた。

瀑？は怯えて前方の一点を見たまま硬直する子供の目線まで腰を落

とした。否応なく田が合づ。瀑？の顔は怒りを必死に押さえているようであった。眉間に寄つた皺がさつきよりも深くなり増えている。

「子琳……非は我々にあるとはいえ、再びこのような行いをすれば神祖の御子でも私は斬らねばならぬ。そのような事を私にさせないでいただきたい」

子琳は頷くしかなかつた。心臓の鼓動は嗚咽のような呼吸と同調し、今までにないくらい早く打つていて。どうすることもできなくなつた時、人いや、言葉をもつ生き物ならば、ただ情に訴え謝ることをする。彼はそつだつた。

「『めんなさい』…『めんなさい』…

子琳は謝つた。謝つて済むものならと、瀑？の顔を直視せずひたすら助命を請うた。涙と鼻水と血でべとべとになつた顔を動かし、泣きじやくつて言葉の体を成していよいよ声で謝つた。だが最期まで頭を下げなかつたのは離龍としての残された僅かな自尊心によるものだらう。

瀑？はその様子を見て少し困つたような顔をし、小さな溜息を一つ吐くと血濡れていらないほつの手を子琳の頭に優しく乗せた。

「我々が手荒過ぎた。こちらこそすまない。だが今の我々にはこのよつな手段しかなかつたのだ、申し訳ない」

謝罪の言葉を聞き、自分を殺すことではないということがわかつた瞬間、ふつと緊張が解け、安堵からさつきより増してぽろぽろと涙が止めどなく溢れた。そして、必死にしゃつくりみたいな呼吸を平常に戻そうとして鼻水を拭い、瀑？の顔を涙で震む田で一警した。涙で曇げた顔には、さつきまでの威圧感はなかつた。だがまだ何か厳しいものを感じさせる。

「ほつ……僕を……どう、どうするんですか……」

やつと呼吸を整えて喋れたのがそれだけだった。そう、まだ聞いていなかつた。これから何をさせられるのか、なぜ雛龍を使うのか、と。

「瀑？！来るぞ！」

匡鉄が急かすように岩山の下を見て叫ぶ。松明の群は今にも三豊山の麓に迫りそうな勢いでやらやうと近づいている。もう一刻の猶予も許されない状況、取り囮まれれば脱出は非常に困難になるだろうことは明白である。

「すぐに終わる。韓泰は黄起こうきと孔淵こうえんの屍をその岩陰に隠し血痕には砂をかける。匡鉄は先に降りて馬を整えてくれ」

匡鉄が渋く頷き繩梯子を勢いよく降りてゆくのを確認すると、瀑？は向き直り息を正して、建恭の街を田を細めて見やつて言った。

「……見ての通り、彰はこの体たらくだ。他国の侵入を許すほどに国の威信は衰え、度重なる戦による徵兵と輜重しじゆうの徵發で彰の民は疲れ果てている。徵發で冬の食糧すら満足に貽えない者がほとんどだ。政に絶望し、墮ちる者も口に口に増えていると聞く。戸籍を捨て他国に逃亡する者も多い。だが今の彰王、顯竜王は登極間もないのが國も民も顧みず、毎晩後宮に入り浸り酒色に更け登庁もほとんどしていない」

子琳は、とりあえず頷く。瀑？は少し急ぐよつと続ける。

「挙句に、王に寵愛を受ける奸臣が王宮にのさばり、自らの私腹を肥えさせるためだけの専横を行つてゐる。要するに、彰はこのままではこの建恭のような惨劇が国中に広がることになりかねんだ。かつて天下を手中におさめたこの国がそうなるのはあまりに不憫で耐えがたい。だから私は決意した。宮中に跋扈する魑魅魍魎と諸悪の根源を取り除き、新たな王を据え再びこの東璃に彰の名を轟かせ

ると

よくはわからないが、自分を使って影をよくしようと思つてゐる」とがなんとなくわかつた。だが、龍を人間の揉め事に利用するなどあまり聞いたことがない。

「しかし、今の我々では反乱を起こしたところで鎮圧されるだけだろう。……悔しいが我々は非力なのだ、だからどうか」

そなたの力を貸してほしい　　と瀑？が頭を垂れようとした時、

突然地上を青い閃光が一瞬照らし、巨大な轟音と共に天空から青い円筒状の光が麓の森に落ちた。

青天の霹靂、一瞬の稲光。光は地上にぶつかると四方八方に拡散し、森の四半を呑んだ。その間も青い円筒はその円周を維持したまま天空から伸びている。

瀑？と側にいた男は啞然としてその異常な光景を見ていた。そして側の男が、空へ問うように叫ぶ。

「こんな場所に徴兆<sup>きょうしゅう</sup>が落ちるとは……一建恭の民の願望が招いたか……！」

紫色の雲の割れ目から青白い光が地上に降り注いでいる光景は、男達だけではなく子琳の心すら奪つた。

民の願望が招いた、確かにそれもあるかもしね。しかし、子琳の見解は違つた。

予兆　　そう、これから起つることを暗示してゐるのだと思えてならない。誰が？いや、誰でもない。しかし、示してゐるこの場所から何かが、光の幕を開けて始まるつとしているのだと思った。いや、むしろ信じ込もうとした。

何の省みもなくするつと言葉が口を出る。涙で濡れた眼はひたす

綺麗。

らその情景を取り込もうとし、彼の意識に反して瞼を開け続けた。

感情は昂り、喜びで心は満ち溢れ、枯渴を知らない涙腺からは涙が湯水の如く湧き上がる。瀑？らも同じであつた。悦びで胸が張り裂けそうになりながら涙が無意識に溢れる。

「美しい……」

瀑？は咳ぐ。さきほどまでの憎悪の中にまだこんな感動を起こせる感情が残っているとは思つてもみなかつた。

森からは悲鳴と歡喜の雄叫びが合唱し、共鳴し、交響した。阿鼻叫喚は光に包まれ、遂にはピタリと失せる。

子琳は次第に消失してゆく意識にすら気付かず、目を見開いたまま座し、そのままぐらりと頭を揺らすと前のめりに倒れ氣を失つた。最後に眼に映つたものは、光から飛び立つ数匹の羽の生えた生き物。

そして、子琳は微かに笑んだ。

綺麗

『?』(後書き)

> 16452 — 1042 <

綺麗な場所だ。

体中がぽかぽかと温かい。

ふと、どうして自分がこんな所にいるのかと疑問に思おうとする。しかし、すぐにそれは頭からふわりと融解し消えていった。

夢であれ現実であれ、ここはきっと知っている場所だ。そう、なぜならとても懐かしい気持ちがするから。

しかし、不鮮明な記憶を巡らしてもこんな風景見たことがあるとは思えない。少なくとも、この風景が現実に存在するとは到底思えなかつた。それほど浮世離れした風景だったのである。

ここはどこだらう。

辺りに意識を集中してみると、朧<sup>おぼろ</sup>な風景の枠線が鮮明になってきた。地平線まで続く地面にはパレットをそのまま置いたかのような色とりどりの花が隙間などないようにその花弁を見せびらかし、高山にありそうな白い雲霧<sup>うんむ</sup>の塊りが、風に乗って地上を揺らいでいる。そして発色が鮮やかな青の翅<sup>はね</sup>をもつ手のひらほどの大きさをした蝶が、何匹もゆらゆらと花園の上を思うがままにはためき、ときに花弁に止まつては花の内側に溜まる甘蜜を吸つっていた。

そして、視界に入ったあるものを見て少し違和感を覚える。花の中に点々と間隔をあけて根を張る、大樹。それらは太い根が大蛇のように地面でうねり、どれも濃い緑をした葉を存分に繁らせている。だが、不思議なことにその大樹の空<sup>うる</sup>から水が滾々（こんこん）と湧き出て、根の下の空間に小さな池を作っていた。

池から溢れ出た水は小さな川となり、やがて他の大樹からの水とも合わざり川となつて花の間をさらさらどこかへ流れゆく。それを見て、いよいよここが現実ではないなと思った。しかし、それもすぐに溶け出してゆく。なぜかすんなり受け入れてしまふのだった。

ふと、蝶の中に一匹、紫色の翅をもつ蝶がいるのに気付く。その

まるで誘つようく優雅に羽ばたく蝶をぼんやりと田で追つてゆくと、何もない平坦な花畠の間に隠れた石畳の小道が、向こうでこんもりと盛り上がっている丘までうねうねと敷かれているのを見つけた。丘の上には小さな森ができており、梢の間から尖った建物らしき屋根の先端がとび出している。

蝶は、そのまま高度をあげてゆく。天には地平線に沿つて茜色の夕空がじんわりと真っ青な空に染み出し、その淡い色をした紫の境界を見たこともないような青い鳥が編隊を組んで遠くの空へ飛んでいった。

さらにもばらに散らばる綿雲が陽の光を取り込み、淡い明暗を浮かび上がらせ神々しい莊嚴さを醸し出している。

蝶は、自分の気に入つた花でも見つけたのだろうか、ゆっくりと下降し雄しへの垂れさがる黄色の花にとりついた。穏やかな風が吹いて、蝶と一緒に花の頭くびが大きく揺れる。

風は、吹く度に風向きを変え、様々な花の香りを運ぶ。今の風は、甘いミントのような香りだ。

とりあえず、あの丘の建物のほうへ行こうと思ひ、花を搔き分け石の小道に乗つた。そして、乗つたところで自分が純白の衣を纏い裸足であることに気付く。が、これもまたなぜかすんなり受け入れた。

小学校の廊下のような幅の小道を歩き始め、少し経たところでいつの間にか歩幅は広がり、歩みも早くなる。身体があそこに行きたがつてゐる。無論、心もだ。そうやって自分の行動を客観的に見てしまつてゐる自分が少し可笑しかつた。

近づくにつれて懐かしさで胸が詰まりそうになる。見たこともない景色なのに、何故なのだろう。それを知りたいという好奇心も歩みの速さに拍車をかけた。

そして、いつしか丘の下に辿り着く。白石の階段がなだらかな傾斜で坂に敷かれ、階段の脇の溝には上から水が流れしており、水の弾ける音がとても心地よい。

一つ呼吸を整え、丘の上田指し一步一步、段を登つてゆく。その一段の度に心が昂つてゐるようだつた。丘の上に着くと小さな門があつた。中国にありそうな装飾の門には扁額へんがくがかけられ、「華池」とある。気にせず頭を少し下げて門をくぐると中には庭園が広がり、その中央に花畠に生える樹とは少し違つた大樹が大きめの園池の周りを取り囲んで、これまた空から水を流し池に注いでいた。池の真上には天を覆い隠さんばかりにその手を伸ばす枝に若葉が茂り、その葉の隙間から空の光がやわらかく差し込んで、水底に乱反射して仄かに明るくし幻想的な雰囲気をより一層引き立ててゐる。

その池の真ん中には、美しい朱の塗装が施された東屋あずまやが孤島を土台に建つており、門から向かつて右の岸から石の橋が渡されこの孤島へと繋がつていた。池の水は驚くほど澄み、水底にはみ出す大樹の根が複雑に絡み合つてゐるのがはつきりと見てとれる。

その根の間を紅色べにいろをした鯉のよな池魚ちぎょが住処にし、紫の甲羅さねをもつ亀が手足を器用に動かし水底を這う。池の側まで近寄り、この愛嬌のある生き物達の動きをぼんやりと眺めていた。

大樹から湧く清水の流れる音と、枝にとまりさえす鳥の美しい鳴き声は昂つた心を平穏にし、現実のことを忘却させ、もはやここに住人であるような錯覚と帰りたくないという願望を心にわき起こす。

永遠にここにいられればいいのに、と時間も忘れこの素晴らしい環境にゆつたり浸つていると、ふと耳に自然音とは違うものが入つた。最初は気にせずにいたが、だんだんとはつきりと聞こえてくる。その音がなんなのか、蕩けとろそうな頭は少し間を置いて理解する。

人の声。わかつた瞬間垂れていた頭をあげ、辺りを見回した。すると、さつきまで誰もいなかつたはずの東屋に人影があるのに気が付く。人がいるということの驚きと、ここがどこなのか教えてほしいという欲求が混じり合つた気持ちで、その人影を注視した。

人影は女の子だつた。線が細くほつそりとし、自分と同じような衣を纏つて肩まで伸びた黒髪が風にふわりと靡いてゐる。横を向いているので顔はよくわからないが、静かに佇む姿はとても佳麗で、心

惹かれるものだった。

千里……。

自分の名を呼んでいる。この声色は女性だ、あの女の子だろうか。しかし彼女はこれからを向いていない。空を見つめるようにただ一点だけを静かに、寂しそうに見ている。

千里……」。

何かを自分に言つてこようがうつまく聞き取れない。とにかくこちらの方を向いてもらおうと手を振つた。しかし一向に気付く気配がない。仕方なく声を出そうとした時、突然辺りが急激に暗くなりた。空は照明を落としたかのように暗くなり、星すらない全くの闇になってしまった。女の子の気配も消えた。流水の音も、鳥の声も消えた。

途端、地面の感覚がなくなつた。一瞬にしてさつきまで足元に茂つていた草木と土が消えたのだ。そのままビリすることができず闇へと転落してゆく。闇の中へ……闇の底へ……。落ちてゆく刹那、この濃厚な闇の中に、さきほど紫の蝶が小さな光を発しながらひらひらと舞つているのが見えた。

でももう手の届かないところにいる。手を伸ばしても、光に触れることすらできない。

意識は遠くなつてゆく。だんだんと、闇に溶けてゆく。

## 兎を抜けて 『?』(後書き)

お疲れ様でした。  
もしかしたらわからない言葉があつたかもしけないので、簡単に解説します。

### 扁額

門の上に飾る看板のよつなもの。建物の名前や、地名をこれに記す。

木の幹に空いた窪み。鳥などがこの穴に入つて巣を作つたりする。

### 空うろ

庭園などに設けられた、休憩用の建物。写真を見るとわかりやすい

### 東屋

題の兎は、あとと読みます。

落ちてゆく感覚がなくなり、温もりの感触が身体を包みこんだ。重たくべた付いた瞼を静かにあけると、ぼやけた視界に広がるのは見慣れた場所、自分の部屋だ。温もりの正体は自分の布団。気付くまでもなくここは現実だと悟り、同時にあの情景は夢幻ゆめぼうしだったと思い知られ、深い喪失感に心をぎゅっと締めつけられた。まだ花の残り香があるような気がして布団にもぐりこむ。しかし、何の甘い香りもしない。

紺色のカーテンからは朝の陽が差し込んで、まだ新しい小さな壁掛け時計を照らしている。針は光に浮かび、ちょうど七時を指していた。しばらくじっとしていたが、やがて小さな溜息をつき田をこすりながらカーテンを開けた。瞼に焼きついたあの情景が窓の向こうにも広がっているのではないかという期待を抱いていたが、外にあるのは隣の家の薄汚れた壁と室外機だけだった。ここでまたわざとらしい溜息をつきながら、窓を開ける。新鮮な空気が部屋に入ってくる。しかし、夢のものとは全く非なるものだつた。

階下からの朝食の匂いが部屋に入ってきて空腹感を呼び起こした、そして今日が登校日であることを千里に思い出させる。

制服に着替えて、学校へいく支度をいそと始めた。制服のネクタイを締め、鞄に教科書を詰めると、半開きの引き出しに服が無造作にかけられたタンスに飾つてある口に焼けた写真を見た。昔に遊園地で撮つた家族の写真、笑顔で映るこの四人のうち、もう一人はこの世にいない。

「母さん……いつてくるよ」

いるはずの人がないガランとしたリビングには、年の割に少し老けてしまった父がテーブルに座つて静かに朝食を食べていた。三つ空いた椅子のうち家族で決めた自分の席に座る。

「ご飯と、味噌汁と、ありあわせのおかず。父の料理は以前よりうまくなつたが、まだ母の腕には及ばない。しかし、毎日休むことなく朝食もさらには学校への弁当も作ってくれる父には感謝していた。その父が今日は無言で朝食をとっている。新聞を読みながらいつもは食べているのに、それを脇に置いて黙々と箸を動かしている。何か嫌なことでもあったのかと、少し変に思いながら箸をとり、まずご飯に手をつけようと茶碗を手にしたとき、父がぱしゃりと箸を置いた。しんとした空気が食卓に流れる。

「……どうしたの？ 父さん」

父は渋るような面持ちのまま俯き、やがて小さな決意をしたかのように切り出した。

「千里……、もう母さんが亡くなつて五年だ。そろそろ、新しい家族をもつてもいいと思うんだ」

何事かと、田を見開いて父を見つめる。眼鏡を軽く押し上げ咳くよう言つう父は、どこかいつもと違う雰囲気を纏っていた。

「なんなの？ 藪から棒に」

「お前ももう十六だ、母親の助けもいるようになるだら」

「……父さん、それってどういうこと？」

突然の話に、千里は持ちかけた碗を手から落としそうになつた。母は五年前、癌で家族を残しこの世を去つた。そのあとしばらく父と妹と三人だったが、その妹も二年前に交通事故で死んでしまつた。それから今まで、父と二人だけでこの広くなつた家に住んできたのだ。それから今日まで、そんな話は一回も出たことはなかつた。できるだけ、その部分には触れないように生活してきたのだ。父は深い溜息をつく。

「千里……、父さんもな、ずっと一人身でいるわけにもいかないんだ。今、会社で籍を入れようかと思っている女性がいる。父さんより八つ年下で、子供がいてもいいそうだ」

父は今三八だったはずだ。それより八つ年下ということは相手は三十歳、母さんは三十歳で死んだ。何か体中に不自然な違和感が走る。

持った箸は無意識な手からこぼれ落ち、食卓に転がった。

「そんなの……聞いてないよ！」

バンと立ち上がり父をにらみつける。父は田をわずかに逸らした。

「千里……一座りなさい！」

「母さんがいるのに……、なんでそんなの勝手に決めるんだよ！」

「母さんはもういない！」

「……っ！」

父はまた溜息をついた。

「……いいか、千里。お前に話さなかつたのはすまないと思つてい  
る。お前が怒るのも無理はない。……でもな、父さんはその女性を  
愛しているんだ。その女性と新しい家庭を築いていきたいと切実に  
思つている」

今更新しい繼母なんて思つてもみなかつた。いや、自分を産んだ  
母に取つて代わる母なんていない、例え手の届かないところへ行つ  
てしまつたとしても、他の人間にその場所に居座られるのに強い拒  
絶感があつた。母さんは母さんだ、絶対無一の存在。なのに、父は  
他人をこの家族の中に勝手に組み込むのか。急に父が遠い存在にな  
つたような気がした。

それで、言いにくいんだが　　と、父は目を落とした。

「実はな、その女性との間で……子供ができたんだ」

耳を疑つた。全身から血の気がひき、背筋の温度が一気に下がつた  
かと思うと、すぐに熱い血が蘇つて全身を巡る。死んだ母さんと妹  
にこのことをなんと釈明すればいいのだろうかと、動搖して真っ白  
になつた頭で必死に考え始める。時が止まつたのではないかという  
ような沈黙をリビングの時計は無常に針音とともに押し進ませる。  
そして、父は手を組んで、再び眼鏡を押しあげた。

「……妊娠四ヶ月だそうだ」

この日の前にいる人間を侮蔑の目で見始めた自分がいた。父は家族  
を裏切つた。そして怒りで脚ががくがくと揺れだす。それと同時に  
ある不安が憤怒の心を覆つた。自分の居場所がなくなるのではない

か  
。

「……どうなるの？僕はどうなるの？」

裏切りへの怒りから声が震えた。本当に人は怒りに満ちると身体が震えるのだ。食卓に並べられた食事が急に不味いものに思えた。こんな自分勝手な人間の作った飯なんて、食べられるわけがない。

「もちろん、一緒にこの家に住めばいい。お前はこの家の住人だ、なんの遠慮をすることはないさ。新しい継母を本当の母さんだと思えばいい。大丈夫、あの女性は優しい人だ。お前を本当の子供として接してくれるよ」

そうじゃないと言いたかった。母を奪われ、妹を奪われ、父まで奪われるのか。と深い失望感が怒りの坩堝に注がれる。できるならここまでよかつたのに。これ以上奪われるのなら、父と一人だけよかつた。

「今日、その女性が家にくるんだ。会ってくれないか？たぶんお前もわかつてくれるはずだ」

何をと叫ぼうとしたが、急に体中の力が抜けていった。大きく息を吐き、頭を垂れる。味噌汁の湯気が悲痛で歪む顔に当たった。鼻の頭が激情でつんとしてきた。その湯気のなかでの夢での情景がふつと思い出された。

あまりに違すぎる、現実と夢幻との格差。ギャップあのままあの夢の中にいられればよかつたのに。醒めなければよかつたのに。なんなのだろうここは。

途端、机を握り拳で叩くと、そのまま半開きの鞄をもって駆け出した。呼び止める父の声も聞かず、玄関の戸を強引にあけて、走り出す。涙で、青天の下に広がる視界は曇り空のじとく淀んでいた。最悪な朝だった。

## 兎を抜けて 『?』

学校の授業中もずっと、無造作にノートが広げられた机を見つめたままうわの空だった。

朝から胸がどきどきして苦しい。妙な圧迫感が体を締め付けているような感じだ。

黒板に書かれている文字も田でなぞって眺めているだけで、認識なんてとてもじゃないができる状態ではなかつた。ひどく精神じいんが重た。陽光差し込む教室では中年の古典の先生が、教卓の前でポケットに片手を突つ込み漢文の書き下し文を少し眠たそうに読み上げていた。しかし、先生の太い声も千里の耳に入つてはすうつと通り抜けていつて、ほとんど聞こえてはいない状態だつた。

「……どうして……」

俯きながら隣の人間に聞こえないよう声を籠らせ、吐くように呟く。父は、一体何を考えているのだろうか。彼にとつて母は代りがきくような存在だつたのだろうか。あんな優しかった母に代りなんてきくものか。しかも、その女との間で子供まで作つてになると、母や妹だけでなく今いる自分まで裏切つたということだ。自分勝手に、欲望のままに、家族のことなんて何も考えずに。大人のくせに、いつも我慢しようと叱るくせに。子供なんて生まれたら自分は必ず蚊帳の外になるだろう。家に居ながら、一人だけ居候のようになる。そのうちまるで自分が家族とは他人のようになるのだ。そんなこと、絶対に嫌だ。母さん達と過ごした家を他の奴にとられるわけにはいかない。どうしよう、どうしてやう。行き過ぎた使命感のような感情が跳躍力となり、まだそつとは決まっていない未来に対して憶測で怒つていい自分にはその時気がついてはいなかつた。

机に広げられた真っ白なノートに、口からでた鬱憤がもくもくと降り積もる。ふと、凝視していた白いノートにあの夢の風景がぼん

やりと浮かんだ。肩で驚き、顔を「じご」と擦つて強く瞼を閉じ再び眺める。今度は湖に浮かぶ園亭あさまやがうつすらと浮かび上がり湖面に蝶が舞う様子が見える。どうやら、今朝からの激情で精神的に疲れてしまつたようだと頭を抱え、まだ新しい紙の香りがするノートの上に腕を枕にして突つ伏す。だが少し期待していた花の甘い香りはどこにもしなかつた。首を横に動かし、腕の隙間から窓の外を覗いた。三階までその枝をぐんと伸ばす桜の木が陽の光を浴び濃い緑を呈して風に揺らめいている。あの園池の周りの樹の葉も光に当たつて濃い緑だった。

そういえば、あの女の子……。

今朝の夢に出てきた女の子。顔こそはちゃんと見えなかつたが、一体彼女はあそこで何をしていたのだろう。自分の夢の中なのだからそんなことを問うてもおかしなことだが、今の千里にはとても不思議で、興味があつた。だがその好奇心の源泉は現実から田を背けたい衝動からなのかもしれない。

とかく、あの女の子はあの美しい世界の住人なのである。あの世界の住人でいられる彼女に憧憬とうけいを抱いた。

天女だろうか、はたまた天使か女神か。までよ、ふつうの女の子だつてこともある。だとしたらなんであんなところにいるのだろう。どこを見つめているのか、そして何故自分の名を呼んだのだろう。あの花園は彼女の庭園にわか。空想は空想を構築し、妄想が頭の中で次々と夢の世界を築き上げていった。空想は段々と理想となり都合のよい美しいものへとその実体を鮮明にしてゆく。想像している間は心が自然と落ち付いていた。

「瀧本君」

名前を呼ばれてびくつと首を戻した。

「は、はい」

驚いて声が少し裏返り、静かな教室の小さな笑いを招く。

「気分でも悪いのか。保健室いくか」

先生はうつ伏せになつて自分を寝ていると勘違いし半ば冗談のつ

もりで言つたのだろうが、事実、気分は最低であることは間違いでなかつた。妙な恥ずかしさと今朝からの怒りも相まつてきつぱりと即答する。

「はい、いきます」

先生は少し驚いた様子だつた。反抗しているととられても、もうどうでもよかつた。鞄をもつてすつと立ち上がり、とことこと教室から出てゆく。ざわめく教室の中で、静かにしなさいといつう先生の声が静かな廊下に響いた。

クラスでは目立たないほう、というのが自口の見解だ。母さんが死ぬまではクラスでもだいたい三番目に明るく活発であつたことを覚えている。運動もできだし、毎日外に遊びに出て日が沈むまでみんなとわいわいやつて、母さんに叱られていた。しかし、突然の母親の死は、自分を深く黒い殻の中へと追い落とすものであつた。しばらくは氣丈に振舞つてはいたが、段々と母親がいないことの弊害や他への妬みが自らも気づかぬうちに降り積もつていったのだろう、他人と関わることがとても億劫になりはじめていた。そして、妹の事故死。かつての活発な少年は、どこかへと消えてしまつた。目立たない方とは言つたが、友達もそれなりにいるし、付き合いもある。しかし、自分の中で何か薄っぺらいもののように感じていたのだった。

保健室へは行かず、そのまま靴を履き替え学校を出た。とてもじやないが、学校にあのまま居たい気分ではなかつたし、この怒りと悲しみで歪んでいる顔を他人に見せるのにも抵抗があつた。といつても、女が来るという家に帰るわけにもいかず、初夏に入ろうかという青天の下に広がる広大な街をただ宛てもなく歩き始めるしかなかつた。だがこの行動が、後の自分の運命を大きく変えることなど今は知る由もない。

日光がじんわりと肌に照りつくのとは対照に街を流れる風は爽やかな涼しさを街路に供給し、割と過ごしやすい気候であつたので街をふらふらと歩きまわるのはさほど苦ではなかつた。戦火を逃れたこの街はまだ古い街並みを所々残しており、少し歩くだけでも迷つてしまいそうな小路が幾つもあつた。古民家のある街路とは別に、近くの山の中腹ほどには数年前から開発が行われている新興住宅地が立ち並び、いわば新旧交わる独特的の雰囲気を作り上げていた。それはかつての市長が新故融合の街ということで計画していたらしい。その住宅地の一角に千里は住んでいる。街には高い建物はほとんどないし、交通の便もよく住宅地からは街が一望できるのですぐに土地は完売したと聞いた。学校はその新興住宅地の中に建てられており、築三年ほどしか経っていないまだ新築の臭いのする新校舎である。

千里はその住宅地を抜け、古い街路のほうへと歩いていった。目的地などない。強いて言えば、落ちつけるような場所に行きたかった。青い空に白い雲、木々の新緑に溝を流れる小川、まだ正午に至つてはおらず街を歩くのは年配の人か宅配便のおじさんだけ。その中を制服を着て歩くのは普通なら人目をばかりたいのだが、なぜかその時は開放的で気分がよかつた。

街の奥に入つてゆくにつれて次第に昔忘れて錆ついた冒険心が研磨されてゆく。好奇心の命じるままにわざと迷路のような小路に入つていこうとした。時間はある、この先に何があるか確かめてやろう、という気持ちでわざと複雑そうな路へと意気高く進んでゆく。確かに幼い頃は、この辺りの路地で鬼ごっこをしていたのを覚えている。あまりに路が複雑なため、何人かは途中ではぐれていまい結局鬼ごっこを中断してみんなで迷った子の捜索隊を結成して遊んでいた。だが、そのうち鬼ごっこにも飽きてこの辺りには滅多に来なくなってしまった。

歩きながら過去の自分を路になぞつてしまいじみと思い出した。あ

の頃は無邪気だった。母がいたから無邪氣でいられた。温かく守ってくれるものがないければ子供は無邪氣でいられないのかもしない。と、一人で深い感慨に耽つていると、楽しかった思い出の端にある事件があつたのをふと思い出した。瑣末なことではないはずだが、何故か今まですっかり忘れていた。小学生のとき、親友がここで行方不明になつた。行方不明とは言つても不思議なことだらけで、小学校では彼は神隠しにあつたのではと実しやかに囁かれていた。その理由の一つに、彼の履いていた靴が行方不明になつた二日後に彼の家の玄関に綺麗に揃えて置いてあつたということが挙げられる。それだけではないのだが、それを聞いて当時は背中がぞくつとした。それから鬼ごっこはあまりしなくなつたのかもしれない。

そうこう思い出していると、彼と最期にあつた場所に行きついた。標識も何もない民家の塀が囲む丁字路、ここで彼を見失つた。この先には行つたことがない、でも今は時間もあるし、仮に行方不明になつても心配する者なんてほとんどいないだろうと自嘲気味に思う。小さく頷き覚悟を決めて丁字路を彼が進んでいった右に曲がった。ここから先は完全な未知なる路。

少し行つた狭い通路の脇には猫が気持ちよさそうに日向ぼっこをし、放置されている物干しそおには雀が羽を休めていて、かつて誰かが神隠しにあつたような暗い感じは全くしない。左右は民家なのだから人がいるのは当たり前だ、怖いはずはない。しかし、歩き回つた所為なのか背筋に汗が一筋流れる。

一方通行の路地を右に曲がり、左に曲がりしたところで、少し開けた道に出た。そこは住宅地のある山を古民家群を挟んで反対側の山のふもとを横切る道であった。こちらは全く開発が及んでおらず、古い民家が街で最も多く残る場所である。かつては街道であつたらしく、その面影がどこかしこに見受けられたが人影はほとんどなかつた。山の裾であるため街道の脇には田園風景が広がり、道には木々の枝葉が屋根のように覆つてまばらな影を落としている。

こんな場所があつたなんて。と、冒険の結果が得られたことに一

心の満足をした。中心街の喧騒から離れ、とても穏やかな雰囲気であるからか、千里の荒れた心に深く感銘を与えた。

そして、冒険に浸り意気揚々と進んでゆく。すると、街道に沿う小川を隔てた山の中に朽ちて苔むした鳥居が見えた。神社だろうかと、中が見える位置までゆくと鳥居の奥には十段ほどのでこぼこした石段があり、その先には、鍛びたジヤングルジムとブランコが遊びにくる子供を待つていてるかのように静かに佇んでいる。無意識に、小川に渡された小さな石橋を渡り鳥居をくぐった。まるで何かに鬼がれるかのようだった。

## 兎を抜けて 『?』

神社は山の斜面の窪んだ場所に建てられ、注連縄しめなわが捲かれた巨大な杉とともに本殿の裏からは神社を囲む高木の雑木林が急な崖に沿つて天を覆うように枝葉を繁らせているため境内全体がぼんやりと薄暗くなつており、神を祭るに相応しい鎮守の森といえる神秘的な空間を作りだしていた。

青いペンキが所々禿げたブランコに腰かけて、辺りをぼーっと眺めた。竹林の葉の隙間から日光が差しこみ少し大きな手水舎ちょうすやに溜まる水をきらきらと光らせ、境内に響き渡るくらいに可愛らしい声の野鳥が甲高く鳴き合っていた。この場所がどこか夢で見た風景と通じるような気がして、なんとなく嬉しくなり静かに目を瞑り夢の風景を頭の中で重ね合わせる。風が頬を優しく撫で、空間に穏やかな時間が流れる。誰も来るものはいない。俯いてブランコの下のすり減った地面を視点定まらぬ目で見つめた。そして大きく溜まりに溜まつた息を吐く。朝から張り詰めていたものがゆっくりと解れてゆくような感じがした。

だがその時間もつかの間、突然石段をぱたぱたと上る足音が林のざわめきに混じつて聞こえた。誰かが来る。階段を上りながら息を切らせる声は男の子のものだ。ここに遊びにきたのだろうかと考えると同時に、こんなところ見られたくないなどという小心な心配を抱いてちらりとその姿を見た。

投げかけた眼の動作はそのまま停止する。

それと同時に力チリと思考が止まつた。はあはあと汗を拭いながら石畳を小走りに駆ける少年の顔に千里は見覚えがあつた。やがて止まつた思考はすぐこの状況の把握のため急激に働きだす。

そして見覚えがある記憶の行方を「ひちや」になつた頭から探し当てた。

行方不明になつた……

途端、頭の中に一緒に遊んでいた頃の忘れかけていた記憶が一気にフラッシュバックする。

一緒に鬼ごっこをして遊んだ、一緒にゲームをしていた、学校でいつも一緒にいた、そしてふざけて先生に怒られて一緒に泣いた、あの

「翔」  
の

よく呼んでいた名前まで思い出して、ブランコに腰かけたまま田の前を駆けてゆく少年を眼を動かさず首で追つた。

しかし、ありえない。もしこの少年が翔だとしたら自分と同じくらいの背丈であるはずなのに、翔と思われる少年は神隠しにあつた当時の身長と顔つきのままだつた。しかも、細かな刺繡かさやしが施された山吹色の装束を纏つて右腕に腕輪をし、頭に髪を留める簪かんざしをつける。今の日本でこんな格好をするとしたら祭事ぐらいだろうが、今田の辺りでお祭りなどはなかつたはずであり、装束も日本にあるようなものとは少し違つていた。どちらかと言えば中国にありそうな衣装である。どちらにせよ、この少年がかつての親友と瓜二つであることに間違いはなかつた。

少年はこちらを見ずに、本殿の裏へと駆けていつて見えなくなつた。千里はしばらく茫然としていた。眼の前でありえないことが起つたのだ。かつて一緒に遊んでいた親友が、そのまま彼の時間だけが止まっているような出で立ちで現れた。だが、他人のそら似である可能性も拭えない。急激に加速した思考は、その処理能力を超えたようで一気にこんがらがつてまた停止してしまつた。

しばらく前を見たまま自失していると、差し込む光に照らされつき少年が通つた石置の上に何かがきらりと光つているものがあるのに気がついた。

ふらふらと腰をあげ、拾い上げて見てみると血がべつとりついた指

輪であった。細かな銀の龍の彫刻が施され赤色の珠が填められる。さつきまではなかつたということはあの少年の持ち物である可能性が高い。さらに、石畳の上の常緑樹の落ち葉に血が点々と続いた。血のせいで填めていた指輪が一つのまにか抜け落ちたようである。

「大変だ、怪我をしているかもしれない」

鞄をそのままに、血の跡を追つた。血は本殿の裏の雑木林に続いていた。

「おーい！怪我してるのか」

呼びかけてみたが向こうで小さく草木を搔き分ける音が聞こえるだけで返答はない。仕方なく、入つて行つたと思われる細く傾斜が急な小道を上り少年の後を追つた。

眺めのよい場所にある小さな墓石の前を過ぎ、誰かの小さな畠を通り抜け、ぶくぶくと空気が湧き上がる沼の側を通り少年を必死に追つた。何故か追いかけているうちに、少年の安否を心配するよりもこの機会を逃さんがために追いかけているような気がしてきた。あれはきっと翔だ、という気持ちが次第に心の躍動を大きくしてゆく。

やがて、五分かかって周りに桃の花が咲き乱れる小さな滝壺の前についた。何故季節外れの桃の花が咲いているのか、という疑問は息をせいぜいと切らす千里の頭に浮かぶはずもない。甘い花の香りがする。夢でも同じような香りを嗅いでいたような気がした。

血の跡は、入ってきた神社を見下ろすような場所にある滝壺の脇にぼうぼうと繁つている草木でできた小穴の前で途切れていった。枝葉がまるでそこに道を作っているかのように円筒状になつて奥の方へとつづいている。高揚していた千里は咳を一つして喉を整えて意を決し、指輪を握った手をついて穴に入り込んだ。まるで長いこと忘れていた童心に還つたような心地で、迷いなくどんどん奥深くへと入つてゆく。

人一人やつと通れる小さな穴の先には光が見える。一体この先には

何があるのだろうか、という逸る好奇心で少年のことなど忘れそうになつてゐる自分を顧みずひたすら進んでゆくと、中間あたりで穴の中の温度が少し上がつた。不思議に思いながらも、解を導き出せそうにないので、気にせず進む。

ついに長い穴を抜けた。しかし、

出口に広がるものに淡い期待を抱いていた千里が、兎<sup>あな</sup>を抜けて最初にみたもの、それは

地面に無数に散らばる人骨だった。

やつと抜け出た穴の先は、木々に囲まれたなだらかな傾斜のある広場のような空間。刺すような太陽の光に思わず目を細めて掌で光を遮る。

細めた眼で何があるのか見ると、まず扇形のように切り開かれた広場の中には微風に揺らめく桃の木が可憐にその優美な花を咲かせているのが目に付いた。空は穴に入る前より青く、どこか高く感じ、風は生温い。千里は穴の先に新しい未開拓の世界を想像していた。と言つても、あくまで現実的な想像のうちであり、現実離れしたものは想定の外であった。心のどこかでは望んでいても、現実を思い知らされてきた千里はどこかでそんなものを否定していたのだ。だが想定外のものがそこには横たわっていたのである。桃の木の周りに散乱する白いもの、

#### 人の骨。

開けた広場には倒木が何本もその巨体を横たえ、その隙間から新たな命を宿している。その傍らで土でくすんだ骨が、半分土に埋もれてその白い部分を草が生えた地面に晒していた。そして、肋骨と思われる骨が指のよう突出して埋もれた地面に突き立つており、その尖端にどこかで見たような蝶が止まって翅を休めている。一匹ではない、何匹もいる。なんとも異様な光景である。骨は傍から見て十人以上はぐだらない数であった。

ふつうに生活していれば見ることはないこの大量の人骨を見て千里は言葉を失う。一体この街で何が起こっているのだろうかと、案外冷静な思考ができる自分に少し驚くも、すぐに警察に連絡しようとする手で携帯電話を探つた。しかし無かつた。鞄に置いてしまったようだ。

戻ろうかと少し躊躇うが、こっちから山を下りて警察を呼んだ方が早いと判断し、少し高い場所にある穴から枯れ木のツタを頼りに自

分の身長ほどの段差を降りる。すると、広場の先の少し遠くの方で  
がさりと音がした。動きのある音から察するにどうやら少年はその  
まま山を下りているようである。

「翔！」

思わず名前を大声で呼ぶが、返答なく茂みを搔き分ける音は遠くな  
つてゆく。無視されているのかはたまた聞こえていないのか。とに  
もかくにも、急いで山を下りてどこか民家を探さなくては。

千里は、膝についた土埃を軽く掃い、小走りで広場を抜けた。途中  
頭蓋骨のようなものを思い切り踏んだ気がしたが、何も考えないよ  
うにして走った。考えたら走れなくなってしまいそうだったからだ。  
だがその一踏みで高揚感は一気に体から汗とともに蒸発してしまっ  
た。

整備されていない林を何回か滑つて転びつつも、先で枝葉を搔き  
分ける音を頼りに山を下りてゆく。途中、鬱蒼とした葉の隙間から  
籠が見えたが民家らしきものは見えず、ただ不規則な形をした田園  
が盆地の川に沿つて広がっているだけだった。こんな田舎のような  
場所が街にあつたなんて、と不安定な足元に注意を払いながら思う。  
やがて、山の雑木林を抜けて、黄土の道らしきものが敷かれた道路  
に出た。舗装されていないようで、大きな砂利や雑草がびっしりと  
あり、誰も整備していないようであった。辺りを見回しても人つ子  
一人、民家の一軒、人の気配がするものが一つもなく閑散とし、た  
だ見たこともないような巨大な切り立った岩山が真正面にのっぺり  
とその稜線を青空にせり出して白い雲を引っかけ垂れ幕のように塞  
いでいる。母さんがいたころ色んな場所へ旅行をしたことがあるが、  
こんなでかくて切り立った山を千里は見たことがなかった。少なく  
とも日本ではありそうにない。しうがなく、人気のある場所まで  
いこうと道みたいな道をやや小走りに歩いた。遮るものがないほど  
開けた風景にも関わらず前をいつていたはずの少年の姿はなく、千  
里の脳裏に瑣末な不安が過る。そもそも、あれが翔という確証はな

いのである。人違ひ、いや、でも例えそうだろうが怪我をしている。さらに追いかける過程で大量の人骨まで見つけてしまった。単なる思い込みでは引くに引けない状況になってしまったのである。

どれくらい歩いたどうか、道を辿つてゆけば民家に行きつくだろうと予想していたが、全くそんな気配はない。道沿いにある田圃も、畝の形が不均一で植えられた稻も小さくまばらであり、土も乾燥してひび割れていた。そしてさらに一十分ほど、小高い丘を越えたところでそれまで小走りにしていた足をとめる。今日はおかしなものを見る日のようなだ。

「……城？」

か細い道の先には、大きな山の斜面に土色の壁で囲まれた巨大な建造物があつた。しかし、遠目に見てもその城と思われる建造物は朽ち果て、瓦礫の山と中身を失つた城牆のみが寂しくそれを囲んでいた。その城牆もところどころ破壊され、守る能力はなさそうである。

「どうして……」

潰れたレジャー施設にしては、あまりに規模がでかく、人が観光するような場所はない。駐車場も見当たらないし、近代らしきものはどこにも見えなかつた。城としても日本にあるようなものではない。じゃああの朽ちた城は一体何なのか。

確かめるため　いや、あつてほしくないという思いで半ば走つているような歩きをして、城の近くまでいくことにした。途中の道には鎧びた槍や、折れた剣、鎌のついていない矢などが散乱していた。なにがなんだかわからず、ただその道を駆け抜けた。走りの速度に比例して、頭が徐々に混乱してゆく。小道は大きな道と合流し、落ちているものの量も増えてきた。道の脇にたまる骨、木製の何かよくわからない玩具、銅製の盾。千里はだんだん眉間が熱くなるのを感じた。軽い走りはついに全力疾走となり、目からはなぜか涙がこぼれ、息が苦しくなる。なにがなんだかわからない。城のようなも

のに近づくにつれ、その壁の大きさはとてつもなく大きいものだとわかつた。

そしてついに、開け放たれ散々に朽ちきった城門の前に着く。壁はところどころ剥がれ落ち、黒ずんだ液体のようなものが吹きつけられた壁の跡が生々しく模様を描いているかのようだ。

せいぜいと肩で息をし、やがて首を持ち上げて、辺りを見まわした。すると、見覚えのあるものがある。漢字だ。それが書かれた城門の上に傾いて掛けている扁額を見た。

「……建……恭？」

外から破られたと思われる鉄の門扉の隙間から黒焦げに焼け落ちた家屋と瓦礫と化した楼閣が見えた。

急に脚の力が抜け、その場に崩れ落ちる。そして、悟る。ここは日本ではない、と。

一体何がどうなっているのか。問える人もおらず、ただただ空回りする自問を頭の中で繰り返し、状況を整理しようとするが、途中でおかしな違和感が詰まつてまた自問は振り出しに戻ってしまう。しばらくして、まだ熱が残る頭をゆっくり稼働させて眼の前の現状をあるがままに呑み込もうとした。これはおそらく城である、しかもいつだつたかテレビで見た中国の城に似ている。中国では街を城壁で囲んで外敵から街を守るのだ。では、なぜこんな場所に城が？いや、自分のほうがなぜこんな場所にいるのか、と言った方が辻褄が合う。翔に似た少年を追いかけて、草穴を抜けた。それはもしかしたら違う世界へ繋がる穴なのかもしれない。馬鹿な、そんなことがあるはずがない。と、砂利のついた手で顔を覆う。

しかし、そうとしか考えられない。慌てていたので意識しなかつたが穴を抜けてからの風景は全く今までのそれと異なり、日本の自然風景のものとは明らかに違っていた。地形であったり、生えている植物であつたり。夢か、あの夢の続きか。だが、皮膚から伝わる太陽の光熱と外気の感触は現実そのものであった。

しばらく座り込んだまま、ぼうつと心ここにあらずな夢心地で目の前の建造物を眺めていた。そしてやがて、頭をひと搔きすると、ゆっくり腰をあげてふらふらと金具が外れかけた門扉のほうへと歩きだす。抜けてきた穴に戻ることも少し考えたが、まだ日も高い。

冒険はまだ続いている、一体あの中に何があるのかということを確かめることにした。この楽観的な考えは、千里の元來の性によるものようだ。ところどころなだれた城壁の下には深い壕ほが掘り巡らされ、木製の尖った杭が溝にいくつも植えこまれており、その隙間に無数の白骨と朽ちた甲冑が散乱していた。千里は下となるべく見ないように壕に渡された木橋を渡り、10mほどの長い門道をくぐ

つた。

千里は再び言葉を失った。火事だらうか、整備されていたと思われる街路に沿つた家屋はほとんどが黒く焼け焦げて半壊または全壊し、炭になつた家の柱がまるで墓標のようにいくつも立ち並んでさながら墓場の様相を呈していた。木造の建物は焼け落ち、石造りの建物は周道に瓦礫を晒し、焼け残つた比較的大きな建物だけが焼け野原となつた城内で目立つていた。

隙間から多種多様な雑草がぐんと生えた、主要道と思われる石畳を千里はとぼとぼと歩く。夢の情景とはあまりにかけ離れた殺風景な風景は、千里にある種の無常感を植え付け、異邦に一人佇む自分がひどく孤独に思えた。破裂し地面の盛り上がつた十字路を4つほど抜けたところで矩形に伸びた広場に出る。城のほぼ中央にあると思われるその大きな広場からは、四方にある城門が見え、市でもあつたのか焼け残つた屋台がいくつか無造作に並んでいた。そして、千里はおぞましいものを見る。広場のほぼ真ん中に黒ずんだ山があつた。近くまでいってみないとわからなかつたがそれは、何百もの人骨であつた。脇には頭蓋骨だけがいくつも山になつてあり、想像したくないことがここで行われていたことを思わせる。

そしてようやく思い知らされる。

### 戦争。

戦争があつたのだ、ここで。そして、行われた　虐殺が。何百人の人の首が落とされ、その屍体がここで焼かれた。想像と同時に吐き気がこみ上げ、ここから逃げだしたくなつた。

戾ろうと顔を背けたその時、一定のリズムを刻む鉄の音が千里の耳に入る。そして、この軽快なリズムは馬の蹄の音だと瞬時に理解した。段々とこちらへ近づいているようである。

冷や汗が体から一気に滲み出る。咄嗟に、どこか隠れれる場所がないかを見回し、すぐに広場に面した崩れかけの商店のような堂の

影に飛び込んで、今いた場所の様子を窺つた。もしこんな場所で誰かに見つかれば有無を言わざず殺されるかもしれないという恐怖感があつた。

少しして、広場に白い馬が入り込んできた。それを自らの足のように御すは、甲冑を着込んだまだ幼さの残る女性だった。長い髪を後ろで結び、脇には煌びやかな剣を携えている。千里の喉がなつた。この遠目に見ても顔立ちのよさそうな女性は、馬を降りるとさつきの骨の山を寂しそうな面持ちで見つめ、そして無言のまま、崩れた家屋ばかりの周辺を見回した。千里と年は同じくらいか少し上だらうか、じつとその女性に魅入った。だが夢で見た少女とはどこか違う。

しばらく辺りを見回すと、ゆっくりこちらに向かつて歩いてきた。千里の心臓の鼓動がびんと早くなる。顔を伏せ、見つからぬにすると、が、どんどんこちらに近づいてくる。

逃げようか、それとも戦うか。相手は女だ、力づくなら　だが、相手は剣を持つている。もし失敗すれば擦り傷では済まないだろう。武器をもっているだけで人はこんなに脅威に映るものなのかと、改めて思つてしまつた。あと自分の隠れている場所まで数歩というところで、別の馬の音が聞こえてきた。女性は足を止め、その音の方に向を振り向いた。

騎乗し槍を片手に持つた屈強そうな男が四人広場に入つてきて、その男のうちの一人が女性を見つけると大声をあげて叫ぶ。だが、千里には何を言つているのかさっぱりわからない。日本語ではないことは確かであつた。女性は踵を返し、男達のほうへと歩きながら何か大声で叫んでいる。口論しているようだが、内容がさっぱり掴めない。ただなんとなくわかつたのは、女性のほうが男達よりも身分が高いのではないかということであつた。身に付けた装飾や、男の諭すような口ぶりは女性の高貴さをつかがわせる。

かれこれ数分話し合つたところで、千里の緊張の糸がぶつんと切れてしまったのか、変な体勢で隠れていたのがまずかったのか、乗つっていた不安定な木片が体重を支えきれず急に折れおもいつきり横にこけてしまい、男達から見える位置に体を晒してしまう。

これに気付かぬ男達ではなく、少し驚いた表情をするとすぐに隊長らしき男が脇に指示をして一騎こちらに向かつてきた。

もっと驚いたのは千里だった。すぐに体を起こし、声にもならぬ声で叫ぶと、瓦礫にぶつけた足の痛みも置いて、一目散に堂の崩れた壁から出て逃げようとした。

見つかれば殺されるかもしれないなかつた。恐怖と焦燥と激痛が全身を駆け巡つて吐きそうだつた。随分手入れがされていない庭院ていいんを抜け、邸宅を囲む薄い壁を越えて死に物狂いで走つて小さな通りに出ると、また見つからないように隠れながら走つた。どうやらこの城内は傾斜にあるためか階段や段差がかなりあり、至る所で坂になつていた。

遠くで男の叫ぶ声と、蹄の音がする。わけもわからずその音から遠ざかるように走つた。しかし、闇雲に走つた結果、道に不慣れな千里は努力虚しく四方壁に囮まれた行き止まりに当たつてしまつ。後ろからは蹄の音が迫つてきている。心臓が口から出そうなほど脈打ち、鞭打つて動かした足と腕がぶるぶると痙攣する。わけもわからぬ場所で、わけもわからず、わけもわからない人達に捕まるのかと、絶望で目の前の光景が黒ずんで沈む。

だが、霧中の闇の中を照らす灯のように、零れる涙を拭こうとする手を優しく掴む小さな手が千里を引っ張つた。温かなその手は、千里の土まみれの手をぎゅっと掴んで、瓦礫の僅かな隙間に引き入れる。人一人が抜けれるのがやつとの隙間を抜け、自分を導くものが何なのかを見たとき、千里は零れる涙と脚の痛みを忘れてしまつた。見覚えのある顔。

翔  
！

## 兎を抜けて 『?』

「じゃあ千ちやんはいつちね、僕はこいつのまつに逃げるから」

これがあの日、翔と最期に交わした会話だった。古民家の路地裏でみんなと鬼ごっこをしていたとき、あの丁字路で一人は別々の方向へ逃げることにした。手を振り一目散に走ってゆく一人。そして、翔はそのまま行方不明となり、あの滲刺<sup>はつじつ</sup>とした笑顔を見ることはもう叶わないと思っていた。

千里の腰ぐらいの高さの位置にある手を握って、崩れかけた家屋の間をまるで道順を知っているかのように止まることなく抜ける少年は、ただひたすらにぐいぐいと千里の腕を引っ張る。しかし、片方の腕からは鮮血がぽたぽたと滴り、来た路に点々と道標を落としていた。山吹色の衣をはためかせ、簪<sup>かんざし</sup>に施された小鈴が軽快な瓊音<sup>けいおん</sup>を鳴らし少年はこちらを振り向かずに走りながら言つ。

「あちらの人間だな。どうしてこちらにきた!?

そのそつけないような声色もかつての全く翔と同じであった。堪え切れなくなつた千里は思わず名を呼ぶ。

「翔、なあお前翔だよな!?

その瞬間、少年はピタリと止まってこちらを振り仰いだ。幼げな表情はどこか愛らしく、眼<sup>まなこ</sup>は澄み、透き通るような白い肌をしている。見目形は翔と同じなのだが、不思議と恐怖のよつな感情が千里の興奮した心にそつと影を落とす。少年はじつと千里の顔を見上げ、やがていつもと同じようなそつけない表情で言つ。

「千ちゃん……?」

「そうだよーどうしたんだよ、その格好!あのときから全然変わつてないじゃないか、どうして……」

北の少年は翔に間違いなれど、翔は田を落とし軽く俯くと髪をもしゃもしゃと搔いた。

「もしかして、あの穴を通りてきたのか？」

「うん、そしたらこんな場所に出ちゃって。翔、一体『北』は『北』なの？あの骨は？この焼け焦げた城は？」

わけのわからないことだらけの千里は捲し立てるかのようにいくつかの質問を翔にぶつけた。翔は困ったなという顔で、田を泳がせる。この行動は困ったときにする昔からの翔の癖であった。

「『北』は千ちやんの来るような世界じゃないんだ。僕の手違いで千ちやんがこちらに来てしまったようだね。すぐに元の世界へ帰れるようあの穴の場所まで送るよ」

全く問い合わせに対する解になつていない翔の言葉に千里はやきもきしきつた手をぎゅっと握りしめた。翔の掌は温かく、脚の痛みも繋いでいる間はなんだか和らいでいるような気がする。

「何があつたのか教えてくれたっていいじゃないか、心配したんだよ！？翔が行方不明になつてから、翔のお母さんと一緒に色々な場所探して……」

お母さんといづ言葉を聞いて翔はさうじ田を泳がせて、俯いてしまつた。

まだ屋根の残る堂の中で、割れた屋根木の隙間から田の光が差し込んで翔の身体を半分照らしている。馬の蹄の音は遠くでけたたましく響いていた。

「せつかく久しぶりに会えたのに……、何があつたかぐらい」

「……『北』は戴邦たいほうという寰宇かんつ、日本とは違う世界なんだ」

翔は小さく溜息をつき、またそつけない表情で言った。その口ぶりは子供のそれではなく、千里よりも幾つか年を経ているかのような語り口である。

「……たいほう？」

聞いたことがない名だ、どこかの国の名だらうか。

「そしてここが、戴四邦たいしほうのうち東にある璃邦りほう、その中の彰じょうといつ国こくが治めていた建恭けんきょうという地じだよ」

「ま、まつて。戴邦たいしほうつてなに？」ここは中国ちゆうなの？」「

翔はまた頭をもしゃもしゃと搔いて、困ったよつた面持ちで言つ。「ここから言えぱいいのかな……。搔い摘んで言つと、ここは仙人せんじんの世界せかいさ。かつては蓬萊と呼ばれ今は戴邦と呼ばれている。千ちゃんのここる世界とは一線を画した場所にあるんだ」

「……仙人せんじん？じゃ、じゃあどうして翔がここにここるんだよ。こんなところにいる必要はないって、早く一緒に帰かろう」「ここに？」

「ここって……一緒に住んでた街まちこそ」

「……」

「帰れない」

「どうして…？」

「僕にはやらなければならぬことがたくさんある。使命があるんだ」

「使命つて……」

その決意に満ちた喋りは、傍から見て、千里のぼうが子供のようここ映つてしまふほどであつた。

「怪我けがもしていゐじやないか、早く手当てあてをしなきや」

「大丈夫だいじゆう……こんなくらいで死にはしないよ。それより……」

翔は手を握り返して、辛そうに千里の目を見つめて言つた。

「千ちゃんの街、いやそれだけじやないいろんな場所で、もしかしたら大変なことが起こるかもしれない。僕があちらへ行つてなんとかやめさせようとしたんだけど、返り討ちに遭つちゃつて……」

「……一体誰だに？」

翔は寂しそうに目を瞑り、血の染み込んだ衣で汗をぬぐつた。

その刹那、翔は何かを察知したかのように瞬時に後ろを振り向くと、千里の腰を掴んでその場に引き倒す。千里は尻からどつと倒れこんだ。

「伏せるんだ！」

途端、千里が立っていた空間に一閃の矢が空を切る音を放ちながら通り抜け、堂の柱に深く突き刺さった。

「まずい、見つかった！」

蹄はまだ遠くで音がする。どうやら敵は馬を降りてこちらまで來たようだ。相手は堂の向こうの崩れかかった楼閣からこちらを狙つて射つたらしい。

「姿勢を低くして、あの扉から外へ出るんだ」

小さな指がさす先には、戸板が外れた小さな戸口があった。

「あいつらは一体何なんだよ！？」

恐怖で声が翻る。翔はまた頭を搔いてそつけなく言った。

「……彰国の兵士だよ」

## 兎を抜けて 『?』

天辺にあつた日はすでに西に傾きつつあり、その白光は朱の色を帯び始め丹青の背景を空に描いていた。黄昏とは言わないまでも、地上の影は伸び、濃さを増し始めている。

千里と翔の二人は、敵の矢を掻い潜りなんとか一層構造になつている城の上層まで抜け、破損した武器や破れた旗幟が散乱する城牆の上をひた走っていた。城牆はところどころ女牆じょしゃうが崩れ足場が悪く、少し油断すれば五階建てのビルのような高さから真っ逆さまに落ちる危険があるようなどころである。

足場に注意を払いながら一人は見つからないよう半分だけ焦げて瓦解した小さな箭樓せんろうの中に逃げ込み、ぺたりと座り込んで何度も大きく呼吸をした。城牆の下からは呼応し合つてゐるさつきの兵士の声が聞こえるが、翔は見つかるわけはないというような涼しい表情をしてゐる。まるで、鬼おにひつじで鬼から逃げ切つた子供のよつな達成感に満ちた顔だ。

千里は息をなんとか整え、さつきの話の続きをしようとも口を開けた。だが、翔がわずかに早く口を開く。

「千ちゃんが最初に見た白骨は、逃げる途中に殺された官吏や貴族達のものだよ」

さらりと言う翔は、疲労の色など見せずあつけらかんとしていた。  
「……翔、いい加減何が起こつてゐるのか説明してくれないか。これは夢なのか？」

翔は壁に空いた大きな穴から外を窺つている。千里は汗が滝の如く肌を濡らしているのに対し翔はとつとあれだけ走ったのに汗はひとつもかいてはいない。

「残念だけどこれは夢なんかじゃない、全部現実だよ。戴邦は今戦乱の真つただ中で、こんなことはいろんなところで起こつてゐるんだ。さすがに城邑じょうぎの人間を城じょうごと焼くなんてのは稀だけどね」

千里は首をもたげた。

「へえ……、でも馬にのつて『』を使って殺し合ひをやつてる場所が世界のどににあるっていうんだ。聞いたことがないよ」

翔は背中で小さく溜息をつく。

「……かつてはここも戦乱を嫌つて仙界に憧れ、現実から逃れたものたちの楽園になるはずだつたんだ。でも」

ふと、座り込む千里からは、太陽の眩しい日光が穴の前にたつ翔の輪郭を作つて光つてゐる様に見えた。その眩しい背中には寂しさがかすれて見えるような気がする。

「でも……？」

「いや、いいんだ。こんな話を千ちゃんにしてもしょうがないから」

「……」

翔が少し笑つた、いや光の輪郭がそう見えさせたのかもしれない。その笑顔は昔の翔そのままだつた、変わらず、翔だけの時間が止まつてゐるような。あれだけ親しかつたのに、とても遠いいや、大きな隔たりを感じざるを負えない。

「……翔、お前は何者なんだ。消えちやつた間に何になつちやつたんだよ！？」

翔はゆつくり振り向き、頭を搔きながら言つた。

「僕は天命を受けたんだ」

「てんめい？」

反応はそつけない。

「離龍すうりゆうになれつてね。いわば龍の離だよ」

「龍……？ 龍つて、ドラゴン？」

千里は、さすがにそんな解答がくるとは思つてもみなかつた。

「定義はあちらと異なる。要は高位の獣、神獣也。人の形を為しているけどね」

さつきから翔の言つてゐることは突飛なものばかりである。混乱した頭でゆつくりとこの尋常じやない大きさの疑問をゆつくり噛み砕

いて受け入れてゆくが、千里の頭の許容範囲はとうに超えていた。困ったように頭を搔きたいのはむしろこちらだ。だが、この状況を愉しんでいる自分がどこかにいるのであった。それが少し不思議で、気持ちが昂る。

その時、壁の下で声が絶叫にも似た悲鳴があがり、次に馬の嘶く声があがつた。悲痛に怯え助けを求める声であることはすぐにわかつた。翔はすぐに穴から下を覗く。千里もすぐに横穴から下を見て、息を呑んだ。

なんと人面の頭をもち、虎の身体をもつ獣がどこからかやってきて、子供のような無邪気な笑い声をあげながら、さつきの兵士を食り食つているではないか。脇には腹を抉られ、肋骨が剥き出しになつた馬が虫の息で横たわっている。もう一人いた若い騎兵はそれを見るや否や、金切り声をあげてどこかへ逃げて行つた。

「馬腹ばくか」

翔は冷静に言ひ。

「どうしてこの辺りに人が住んでいないのかわかつた。たぶんあれのせいだよ」

千里はあまりのことに声が打ち震えてうまく出せない。

「あ、あ、あれば……何」

この子供の度胸は一体どれほどのものなのだろうか、恐怖にひきつる千里に対し全く怯える様子なく静かに答える。

「馬腹ばくか」という人食いの獣だ。数年前の戦争中に微恍きょうこうがこの辺りに落ちて、その影響を受けた人間のなれの果てだよ。今もこの辺りに巣食つて、人間を食らつてゐるみたいだね」

「こ、ここはあんな化け物がいるのか!? どうして顔が人間なんだよ! ?」

翔は少し渋つたあと小さな首を横に振つた。

「よほど強い憧憬を抱かされたんだろう。人体の一部が残つてゐるところとはそういうことさ」

「……？」

なんのことやら全く解することができそうにない。ただ、一つの疑問が過つた。それは、

「あれは……人間なの？」

千里の問いに翔は一瞬なにやら寂しそうな表情を見せた。広い口元がきゅっと締まる。

「……そう、あれはただの人間だつた。崇高な理想に溺れた結果、畜生に堕ちたんだ」

「そ、そんな……」

この世界は異常だと声高く叫びたくなつた。なんの冗談かと翔を見るが、その顔は真面目そのものである。何の曇りもない澄んだ目は全く泳いではなく、ただ人間を貪る哀れな畜生に向けられていた。ケラケラと無邪気に笑う声の主は、辺りを見回しながら肉塊に顔を突っ込み内臓を喰らつている。

千里は堪え切れず、その場で吐いた。人が人を喰うなんて、それが目の前で起きている。燃やされた屍体、白骨、食われる人　こ<sub>二</sub>こは地獄だろうか。

「千ちゃん、まずい……！」

翔がいきなり身を伏せた。馬腹がこちらを見ているようだ。能面のような顔には伸びっぱなしの髭が生えそろい、筆先のような先端から血を滴らせている。

「見つかったかもしれない」

千里はおそるおそる、見つからないよう握り拳のような大きさの穴から下を覗いた。

見た瞬間、背筋に悪寒が走る、見なきやよかつたと後悔した。馬腹と言われるその異形の動物は、皺を顔全体に作つて満面の笑みでこちらのほうを見ながら、幼い子供の笑い声をあげていた。

ケラケラ、キャツキヤ。

「今の僕には手に負えないかもしれない」

だが弱音を吐きながらも、なぜか微笑を浮かべている。これは何かいたずらを考えている時の顔だ。

「千ちゃん、鬼ごっここの続きをしよう。まだ決着ついてなかつたよ  
ね」

## 兎を抜けて 『?』(後書き)

女牆：城壁に取り付けられた凹凸の窪み。間から攻撃する。

箭樓：城壁の上に建てられた建物。武具や弓矢を備蓄する。

## 兎を抜けて 《?》

翔はいきなり脇にある手頃な瓦礫をむんずと掴むと、こちらを仰ぐ馬腹めがけて思い切り投げた。弧を描いたそれは、もちろん馬腹に当たることなくかわされて地面に当たって砕け散る。

「翔、なにをつ……！？」

翔の腕からはまだ血が出ているようだが、痛みを堪えるような表情もせずにどんどん投げている。

「挑発だよ。や、千ちゃんも投げて」

「なんでわざわざ挑発なんかするんだよ！？まだ見つかったわけじやなかつたのにどうして相手に気付かれるよつなことなんか！？」

「いや、もう僕達は奴の獲物と認識されたよ。僕達が降りるまで奴はずつと待ち続ける。獲物が自分にとつて捕え易くなるまで執念深く待つんだ。馬腹はそういう習性なんだよ」

「そんな……」

確かに、下にいる馬腹は、すでに今まで貪つていていた獲物などなかつたかのように無視し、ただこちらの方を見つめて、不気味な笑みを浮かべている。

「そうなつたら僕らが不利だ。奴を挑発してここまで登らせて、そこで返り討ちにする」

千里は石を投げる翔の腕を掴んだ。細い腕は弱く脈打つている。

「龍だかなんだか知らないけれど、こんな怪我をしていてどうやつてあんな化け物と戦うんだ！ここにいれば少なくとも襲われないなら、もう少し落ちついて作戦を考えるべきだよ！」

翔は、また困ったように頭を搔いて千里の顔をじっと見た。

「千ちゃん……、実は君が帰れるのは口が昇っているうちなんだ

「……！？」

昔からうそうだ。翔は大切なことを後で言つたことが多かった。昔、

千里が学校を欠席している時に宿題が出ていたのだが、翔はそれを締め切り当日に思い出したように言つ。おかげで、千里が知つてしたものだと思つてゐる先生に怒られるということがしばしばあった。あのときから言つていたのに全然治つていないみたいだ。

「それを逃せば半月後になる。僕は奴の領域にわざわざ飛び込んで逃げ切るほどの力はもちあわせてないよ。千ちゃんがこちらに来てしまつたのは僕のせいだから、責任をとつてなんとか千ちゃんを元の世界に帰さなきやならない。のんびり奴がどつかへ行くのを待つている暇はないんだ」

千里は酷く狼狽える。半月もこんな恐ろしい場所にいられるわけがない。今日だけで何回死にそうになつたか、片手が埋まりそうだ。狼狽える千里の一方で翔は楽しそうに瓦礫を投げている。それをうまいこと避ける馬腹はだんだんと笑い声が薄れてきた。笑んだよう見える顔の皺は段々と眉間にまでここに寄り始めている。

「それにね、奴は怒りっぽいんだ。一発当たればたちまち

「……さ、作戦はあるの？」

わたわた震える声で千里は問うた。酷く自分が矮小に感じたが、何とかそれを考へないようにした。翔は脇を指さす。

「あっちのほうに箭樓やぐらがあるでしょ。その手前に大きな溝があるんだ」

確かに、崩れた壁の隙間から城牆の途中に大きな崩れた部分があるのが見える。その溝には、誰が架けたか細い木板が架けられていた。「あそこまで走つて溝を飛び越えて、僕がうまいことあの溝に奴を落とすよ」

なるほど、だから鬼おにっこか。しかし、その溝までここからだいたい200mほどある。追いつかれたらどうするのだろうか。

「魔法でも使うのか……？」

“龍”なのだから、何かしら特殊能力でもあるのだろう。だが翔は笑つて、

「龍つていつてもそんなだいそれたものは使えないよ。さ、投げて

と、一警を返す。不安を感じながらも仕方がないので、恐る恐る剣の破片のようなものを掴んで思い切り投げた。もちろん当たるわけないのだが、なんだか一人でいたずらをしているような気持ちになつた。

さすがの馬腹も一方向から来る攻撃にだんだんやきもきしてきたのか、明らかに表情が変わつてくる。

二人は片つ端から手当たり次第にものを投げつけた。翔は楽しそうだ。千里もなんだか可笑しくなつて、口元が緩む。

そしてついに、千里の投げた錆びた銅片が馬腹の骨張つた頭に直撃した。

「やつた」

当ててないのに翔がガツッポーズをきめる。そしていつの間にか自分が拳を高くあげて喜んでいた。

しかし、眼下ではあの化け物が子供が怒り狂つて叫ぶような雄叫びをあげてこちらを怨恨の目で睨んでいる。顔はみるみる紅潮し、ぼさぼさの毛は思い切り逆立つている。

突然、それを腰を引いて覗く千里の腕を翔は思い切りひいた。

「馬腹がくるよ……」

途端、馬腹は身を起こすと甲高い奇声をあげながら城壁の角にある小さな階段に向かつて飛ぶように駆けて行く。それを後目に千里と翔は箭楼から出て思い切り駆け出した。

城墙の上からはすでに遠くの山の稜線に触れそうな位置に日が降り始めているのが見えた。城下に広がる鬱蒼とした森には三つ、切り立つた山が聳え、紅緑の木々の梢に細長い影を落としている。その森を小さな川が一本横断し、山の麓の田畠に注いでいた。走りながら千里はそれを見て思う。

綺麗、と。

絶妙な配置でここから森の全体が隈なく見渡せ、微妙に濃さの違う

葉の緑が濃淡によつて別の風景を地上に描き出しているかのように千里には見えた。千里は反対の方を見た。燃えたと言つても、城の中はまだ建物なら多少残つている。豪華な装飾が施された屋根、色とりどりの邸宅、雑草が伸びきった庭園。この辺りはまだ朽ちたといつても比較的綺麗に残つているようだ。

自分のいた世界とは異なる世界、異なる風景、異なる風俗。人はそういうものに触れたとき強く心を揺り動かされる。それは何故？憧れだろうか、それとも見たこともないものに対する好奇心か。前後左右下に注意を向けて全力で走る千里に、そんな哲学めいたことを考える余裕はなかつたが、どこかで頭を過つていた。

そして、田の前を走るこの小さな少年にどこか憧れを感じている自分がいるような気がした。

「もつと早く……」

翔が手招きながら叫ぶ。予想外に馬腹の走行は速く、すでに先ほどまで一人がいた箭樓せんろうに辿り着いていた。さすが四本足で走る獣、崩れかけた足場など意に介さぬよつた足運びである。

二人は後ろ振り向く暇もなく必死で走り、なんとか溝のある場所まで到着した。溝の幅はだいたい5m、溝の底はそのまま山の側面に切りたつ急な崖となつてゐるため、落ちれば一溜まりもない。木板を渡ると、翔はすぐに足蹴で板を外し、簡単には渡れないようにした。

「千ちゃんはそこで伏せてて……」

馬腹はあつという間に溝の対岸に至つた。紅潮した顔の皺をくしゃくしゃ動かしながら、対岸でどうしてやろうかという風に左右に行つたり来たりしている。

どんな作戦があるのかと息を切らして見守つていると、どうも翔の様子がおかしい。慌てたように装束をぱたぱたと叩き、大きく余つた袖を一生懸命探つてゐる。

「十九ちゃんまよい！…」

「ど、どうしたんだよー？」「

翔は両手で頭を搔きながら慌てふためいて、  
「…

「…

「…

「…

「指輪だよー…どこに落としたんだ……どうしよう。あれがない  
と、また怒られちゃうよ。どうしよう」「  
あつからかんとしていた翔の顔がみるみる青ざめていった。  
指輪と聞いて千里はとっさにズボンのポケットを押さえた。まだ異  
物感が残っている。

「翔！…指輪つてもしかして…」

とっさにポケットから指輪を出して翔に示そうとしたとき 翔が  
千里のほうを振り向いたとき、馬腹は見計らったように前屈の姿勢  
から体躯を曲げ、瞬時に跳躍をしてあの幅広い溝を飛び越えた。

危ない！！

千里が叫ぶ間もなく馬腹は翔の背中に飛びかかり、鋭い爪を立て  
た。

「翔！…！」

だが翔は、僅かな苦痛の色を見せただけで、千里に向かつて叫ぶ。

「千ちゃん！…逃げる！…」

そして、けたけたと笑うこの異形の化け物が血で黒ずんだ牙を出し  
翔の頸に噛みつけとした。

もう駄目だっ

千里は腰を抜かして立てず、思わず目を瞑った。もう終わりだ、こ  
んな場所で死ぬなんて……。

だが、その刹那、馬腹の顔が歪み動きが止まった。そして次に何か  
が撓る音とともに、馬腹の顔を矢が貫通した。その隙をつき翔は思  
い切り馬腹の腹を蹴り上げる。子供の泣き叫ぶような声をあげなが

ら、馬腹は体勢を崩して溝から転落していった。

翔はがくりと崩れ落ちた。千里は何が起こったのかよくわからずただ呆然自失し、ふらふらとへたり込む。すると、翔は震える腕で肩を掴み、城牆の下を指さした。

「……誰かが馬腹に矢を射つたみたいだ。おかげで助かった……みたい」

千里は女牆から恐る恐る壁下を覗いた。すると影の中に誰かが、一人馬に乗っている。

「さっきの……」

あの広場で骸の山を悲しそうに見つめていた女性が、美しい毛並みの白馬に跨つて朱色の長弓を脇に抱えながらこちらを窺っている。しかしながらと凜々しい出で立ちだろうか。そして、女性は馬の手綱を握りながら山の方を指差し叫んでいる。だが千里には何を言つているかわからない。

翔はふらふらと立ちあがつて、千里の汚れたシャツの裾を軽く摘まんでひく。

「あの娘は逃げ道を教えてくれているみたいだよ……。ありがたく従おう」

謎の娘の指差す方に従い、崩れて坂になつた城牆を降りると、なだらかな斜面に木々が群生する森が壁に迫る勢いで広がつていた。城の真裏のようである。辺りは、さつきの陽当たる場所とは打つて変わって暗澹あんたんとし、森全体に薄い靄がかかつてゐるようであった。

「こつちだ」

翔は急くよう、千里の人差し指と中指を掴んで森の奥へと入つてゆこうとする。背には痛々しい引掻き傷が滲んだ赤い線を呈していた。千里はそれを見て心に同じような傷がふつと浮かぶ。どうしてこんなになつても顔色一つ変えず、ひたすらこの手を引こうとするのか。

「翔」

千里は堪え切れなかつた。

「何?」

ほんとうに素つ氣ない。

「傷」

翔は頸を回し袍はふを引っ張つて背中を見た。

「ああ、大丈夫だよ。少し痛むけど」

少しどころの傷ではないことは素人の千里でもわかる。血が袍を伝つて背から滴つてゐるのだ。

「腕も」

すると翔は左腕も見る。が、今度は微かに笑つてみせた。

「大丈夫だつて、どうしたんだよ」

千里は汗でひつついたポケットから指輪を出して翔に示した。

「これ、翔のだよね」

それを見せると翔は、みるみる顔を変え歓喜の声をあげて喜び、指輪をとつて元あつた指に填めた。わずかに指との間に隙間があり、

すっぽりと填まる。

「よかつた！これがなかつたら大変なことになつてたよ。まさか千ちゃんが持つてたなんて」

翔は指輪を夕陽にかざしてうれしそうに眺める。陽光を浴びて、真紅のような色を放つ指輪。翔はまるで、買つてもらつた玩具を手に入れたみたいにはにかんでいる。

「……」

「どうしたの？千ちゃん」

いつの間にか腕が震えていた。鼻が次第にツンとし始め、目に水が溜まる。

「どうして……どうしてそんなに強いんだよ……どうして子供でいられるんだよ……」

「……」

「自分も……戻りたいよ。あの頃に

「……」

今の現実に絶望していた。優しい母さんも兄思いの妹もいない。たつた一人残った家族である父さんは違う女と新たな家族になろうとしている。子供の自分はまさかこんな未来がすぐ近くに迫つているなど考えもしなかつた。当時は早く大人になりたいと思つてたが、こんな苦痛を背負つていかなければならないのなら子供のままのほうがいい。戻りたい。そう、無垢な、幸福なあの頃に。

「駄目だ！」

翔は声変わりもしていない小高い声で一喝した。

「憧れは敵に心に付け入る隙を与えてしまう

そのとき千里の何かがぶつんと切れた。拳を振るい、声を荒らげる。「敵ってなんだよ！？龍つてなんだよ！？天命つてなんだよ！？さつきから何を言つているかわからないよ！昔からそうだ！大事なこ

とをいつも言わない！全然何が起こっているのかわからないよ！」  
張り上げた声は、声変わりしたてで若干かすれ、静寂の森林に吸い込まれていった。しばらく閑寂が辺りを支配し、やがて翔が頭を搔いて俯くと呟くように言った。

「じめん

翔は、敵つて突出した木の根に腰かけて静かに喋り出した。陽は着実に傾いている。翔の袍は陽で紅色に染まっていた。

「深く知らないほうが千ちゃんの為だと思ったんだけど……」

と、前置きし、

「……さつき人が獣になったと言つたよね。実はそれが千ちゃんの世界で起こりうとしているらしい」と、目を落として言つた。

「……」

千里の顰めた表情は少し緩む。

「人は畜生になる。逆に言えば畜生は人だ。天が定め、それが理になつてている。そして龍は天から与えられた力で人を畜生へ堕とすことができるようになされた。何故かはわからない。そして、先日その力を使つて今千ちゃんの世界で人を畜生へと墮とそうとしている奴がいることが僕らは知つた。何の目的かは不明だけど。でも、それが本当に起こればあちらの世界は大変なことになる。だから僕はそれを知つて千ちゃんの世界、東瀛とうえいに行って事の真否を確かめに行つたんだけど、そこで敵に先手を打たれてこのザマだよ」「もしかして……」

翔は小さく頷く。

「そう、どうやら僕とは別の龍がこの件に一枚噛んでいるらしい。

偶然何人かの龍が行方不明になつてているし、どうやら人間の揉め事に使われているみたいなんだ」

翔は脚を組んで頬杖をした。

「龍つてのは、簡単に言えば人々の偶像物さ。故に、理想であり完全であり象徴である。だから龍は人の心に干渉することが可能なんだ」

千里は湿った鼻を拭い、少し首を傾げた。なんとなくはわかるが、話が急に難しくなった。

「だから、戻つたら気をつけて欲しいんだ。憧れは人の心に隙間を作り、そこに付け込む奴にそいつが望む理想を見せられれば、大抵の人間はそれに屈して獸になってしまふ。僕はこれから宮に戻つてことの次第を姉上に奏上しなくちゃならない」

「姉上？」

翔の頬杖がずり落ち、あたふた慌てだした。

「い、いや、今のは言っちゃダメなんだつた。ごめん忘れて」

千里は深く追求しようとはしなかつた。翔は目を細めて天を見上げると、すくと立ち上がり辺りを見回す。

「時間がない、歩きながら話そう」

山の中腹辺りになると、人が通るような道も失せ、獸道のような細い道しかなくなつてしまつた。千里は後ろを振り返つた。眼下には夕陽によつて巨大な影を帯びる建造物群が、空虚な闇を纏つて広大な盆地に畝だけが残る田園地帯に静かに佇んでいる。この都市は滅びたのだ。何千といたであろう都市の発展に勤しんできた城内の人間は殺され焼かれた。そう思つと、これは巨大な棺桶に見えないこともない。寂しさが千里のこころに影を残した。

翔は歩きながら話そうといながら、足場に注意するよつう以外何も言葉を発しなかつた。なので千里もそれに従つた。そして歩きながら千里は翔の背中を見ながら思つ。

「この幼い子供に一体どんな大きなものが背負わされているのだ  
うつ。

話を聞くところ、龍というものはこちらで言うところの仙人ではないだろうか。どういう仕組みでそんなものが決められているのか知らないが、改めて意識すると、様々な点において元いた世界とこちらは絶対的な隔絶が存在している。

異世界。

そう、自分は異世界に来てしまったのだ。そんなもの、存在するはずがないと思っていた。単なる空想だと思っていた。しかし、現に今、あちらには存在しない場所の土を踏みしめ、ありえない獣に命を狙われ、行方不明になつたはずの親友が、いなくなつた時のままの姿で前を走つている。

それで、十分だつた。あちらにないものがこっちにある。もしかしたら自分の本当の居場所もこちらにあるのではないだろうか。苦痛しかないあちらに自分の居場所などあるのだろうか。どちらが夢で、どちらが現なのだろうか。

そういうえば、今朝の夢

ふつと今朝見た夢の一部分が頭を過る。

「ここだ」

激しい水流の川の岸辺に差し掛かったとき、翔が向こうを指差した。細い指が差す先には桃の花が咲く木々の間に木造の祠のようなものがぽつんと置かれており、どこかで見たような青い蝶が何匹かひらひらと祠の周辺で舞つていた。

丸太を一本倒しただけの粗末な橋を渡り、翔の背丈ほどの祠の前に二人は並んだ。祠は誰かが手入れしているのか、きちんとお供え物があり、楕円形の石段の上に小さな皿があつて褐色の木の実が盛

つてあつた。翔は千里の顔をちらりと仰ぐと、祠に指輪を翳し、目を瞑り深く息を吐く。するとさつきまであたりをひらひら舞つた蝶が、翔のまわりに集まりだして、ついに背中の傷に群がりだした。千里は驚きながらも、その光景に見とれた。青い蝶は紅い夕陽を浴び、翅をあおぐ度に色が混ざつて青紫や赤紫に体色を変える。一時の淡い神々しさ。千里は無意識にその光景を頭に焼き付けていた。

やがて、背中の傷はいつのまに癒え、血も止まると蝶はまた辺りをふわふわと飛び始めた。

翔は何かを唱えると、祠の格子を開いて中を覗き、手を入れ中から蓋のようなものを取り出した。脇から見ると人一人が入れるような小さな穴が祠の中にぽかりと空いている。

「……おわかれだ、千ちゃん」

翔は千里の紅くなつた顔を笑顔で仰いだ。だが、見せかけの笑みであることは千里には痛いほどわかる。自分も少し笑んだが、果たして笑っていたかはわからない。また鼻が湿りだしてきて、溢れそうだ。

「……戻らなきやならないのかな」

「でも、千ちゃんのいなくちゃいけない世界は向こうだ。ここじゃない。待つている人がいるはずだよ」待つている人と聞いて小さくうつむく。

「実は母さんも、妹ももういないんだ」

翔はそれを聞いて眉を落とし困った顔をした。

「『めん……、知らなかつた。でもお父さんがいるんでしょ、なら帰らなきや』

「……でも父さんは、別の女を家に連れてきて、新しい家族を作ろうとしてる。女人は父さんの子供も身籠つてゐるんだ。だからこ

これから一緒にいたつて除け者にされるだけだよ。だからもう僕の帰る場所なんか……」

そうだ、もう自分の居場所なんてあそこに存在しないんだ。煙たがれる生活しか待っていられないんだ。それなら、いつそ。

そんな千里を見かねてか、翔は空をぼんやり見つめて、呟く。

「……あちらに行つたとき、本当はいけないんだけど自分の家を見たんだ」「…………」

翔は紅が青に染み渡りつつある空を仰いだ。そして鼻をすする。

「家、なかつたんだ」

そうだった。翔が行方不明になつてから一年ぐらいしたあと、翔の親は離婚したと風の噂で聞いた。そのあと、父だけがあの家に住んでいたが、いつのまにか蒸発してしまい、家は取り壊され今あの場所は駐車場だ。翔がそれを見た時何を思ったのかは、想像に難くない。

「帰れる場所があるだけ千ちゃんが羨ましいよ」「でもつ……！」

出そうとした言葉が喉の奥でつづかえた。

「なんだか最近だんだんあちらの世界での生活が夢だつたんじやないかつて思うようになつてきてね、家族の記憶もさ、なくなつてきてるんだ。自分の家を探すのにも手間取つちやつた」

「…………」

微かに笑う翔の顔は影を帯び、とても寂しそうだつた。どちらの苦労が大きいかなんてこの際比べたつてしまふがないことは千里でもなんとなくわかつていた。でも、翔はどこか一步先に行つている。自分とはかけ離れた境遇で、強くなつている。千里にはそれが非常に羨ましく、妬ましかつた。彼は確固とした居場所があるので。

「……また、会えるかな」

千里は尋ねる。翔はこつくりと頷く。

「天がそう望むのなら」

千里は体を曲げて穴に入った。石で固められた穴の奥の方は緩い傾斜の階段になつていて、

とても眉間に熱い。翔は穴に入る千里を心配そうにぞきながら声をかける。

「くれぐれもさつき言つたことを忘れないで。あちらの世界でのことは必ず僕らがなんとかするから」

「……わかった」

光が次第に届かなくなり途方もない闇が辺りを染め、土の湿つた臭いが充満している。

「鬼ごっこ、今度こそ決着つけよう」

「……うん」

名残惜しみながら手を振る翔に手を振り返しながら、ふと眼前を見た。まるでこれからのこと暗示するかのように、闇が先を塞いでいる。深淵と呼ぶに相応しい。本当に帰れるのか、帰つていいのか、両挟みの不安に苛まれる。残ればよかつたのではないか、という自問が千里の歩を遅くした。

階段を十段ほど降りたところで、千里の耳にどこかで聞いたことのある空を切つたような音が届いた。

「千ちやん！ いそい」

突然、翔の叫び声が空洞の洞内に木霊する。そして、何故か翔に渡した指輪が音を立てて千里の足もとまで転がってきた。暗闇の中でも薄暗い真紅の光を放つている。

それを見た途端千里の頭に嫌なものが過つた。指輪を拾い上げ、恐々と後ろを振り返る。

刹那、千里の思考が停止し、一気に激情が頭の中を席巻した。

穴の入口で頸に矢が刺さった翔が穴の縁にもたれて動かなくなつて

いる。手をだらんと落とし、穴の中に血を滴らせていた。

その異常な事態に言葉を失い狼狽する千里。だが、翔はまだ息があった。翔は小さな首をもたげ出せない声を必死に絞り出して穴に向かって叫ぶ。

「走るんだ！－！」

言葉になつていなかつたが、千里には確かにそう聞こえた。途端、無意識のままに千里は泣きながら闇の方へとつづ走る。振り返らなりょつに、ただ、走るんだといつ翔の声のままで。

気がつくと、辺りは真っ暗闇であった。目を開け、小さく咳きこみ、辺りを見回す。繁った木の葉の間から見慣れた街の夜景が見えた。

手には、真紅の珠が埋め込まれた指輪がしっかりと握られていた。

兎を抜けて 『?』(後書き)

これで「兎を抜けて」は終わりです。

不純物が鬱積している。心、身体、頭にどよどよと溜まつてゆく。鬱憤の晴らし所がなく、さらに不純物が降り積もつてゆく。やがてそれは、搔き取りにくいところで沈着し、固まつて底にこびりついてゆく。

その男は喧騒に溢れた街の中心地から、少し離れたところにある深夜のネオン街を、やや俯きながら足早に歩いていた。手には小さな紙袋をもち、よれよれのスースは畳んで脇にもつて、新調したネクタイは首元で不格好に緩んでいた。手元には大学の入学祝いに買ってもらつた腕時計の指針が0時を示している。

「くそ……どうして」

男はぶつぶつと文句を口にしながら、涙と鼻汁を顎からぽろぼろと滴らせていた。雲がかつた暗鬱あんうつとした空は街が発する膨大な光に照らされ、濁んで赤黒く、今の男の心情をそのまま現わしているかのようである。深夜のネオン街は意外と人の往来は激しく、人々は欲望の赴くままにネオンに染まつた店々へと入つてゆく。男は、それを横目で見て深く溜息を吐いた。そして、この世界げんじゆに深く、深く失望した。

三時間前、男は好意を抱いていた女性にふられてしまった。二十四年生きてきて初めて好きになつた女性。男はそれまで空想に浸る生活ばかりをしていたが、彼女を知つたことで初めて今まで無味だった人生がとても楽しくなつたような気がした。毎日彼女と一緒にいたらと考えるようになつた。時には、理想の自分を照らし合わせた。しかし、現実はそう彼に甘くはなかつた。三時間前、女性に直接会つて、生まれて初めて自分の心の内を伝えた。誰にも話したことのない恥の部分を初めて人に打ち明けたのである。だが女性は、他に好意を抱いてる男がいたのだ。男はその女性が好意を抱いてい

る男性を知っていた。とてもその男には及ばない、顔も、容姿も、経済力も。そして自分のつまらなさを改めて思い知らされたのである。そのことは男を深い深い嫉妬と、失望へと誘つてゆく。

ふと男は店先のショーケースに映る自分を見た。冴えない、地味。

そう彼女に言われた。言われてみれば確かにそうだ。今までそんなことは自分の矮小な自尊心のために考えないようにしていたのだが、人に言われたことで消そうにも頭の中で反響して搔き消すことはできなかつた。認めざる負えない自分自身がそこにはあつた。大きくプライドを抉られた男は、自失した状態で店の前に佇んでいた。

「邪魔なんだけど、どいてくんない」

化粧の濃い華奢な装飾品で身を固めた女が、男の後ろから毒づいた。いかにもなチンピラ風の若い男を連れて、店の入り口の前に立つ男が邪魔で気に入らないらしい。

「どけよ、氣色わりーんだよ」

チンピラ風の男は、氣力なさそうに俯く男を強引に突き飛ばした。男は脚に力が入っていないこともあり、そのまま右肩から倒れこんでしまつた。それを見て指差し笑う、通りがかりの男女。

男は肩を押さえ落ちた眼鏡を手探りで拾い急いで手元を見ると、男の腰の下には紙袋が無残にも潰れていた。彼女にプレゼントしようとした、駅前の有名菓子店のロールケーキ。しかしすでにその精巧に装飾されたそれはもとの形をなしていない。

その滑稽な光景を見て、おもむろに携帯を取り出し、男に向けて写真を撮り始める群衆。

「あーあ、もつたいねー」

げらげら笑うチンピラ風の男は侮蔑の笑みを浮かべながらそのまま女の肩を抱いて店へと入つていった。

「なーんだ、喧嘩じやねーのか。つまんねえな」

群衆から声があがる。なんならお望み通りしてやろうか、と男の無気力な心に殺意めいた憎悪が一瞬沸き起こると、わなわなと震える手で側にあつた工事用のコーンを掴もうとする。しかしそれは瞬時にあきらめへと変わってしまった。それで自覚する。自分は非力で、自分の尊厳を守る勇氣すら持ち合わせていいない。

そしてそんな自分がすごく惨めで、とてもなく虚しかった。

一人残された男は群衆を一睨みすると、そのまま立ちあがって紙袋をそのままにネオン街の暗い路地裏へと逃げるよう走つていった。

ネオン街の裏は戦後からの古い工場地帯で、錆着いた倉庫がそちら中に立ち並び工業廃水を流すためのコンクリートで固められた河川が縦横無尽に一帯を流れている。街灯は少なく民家もないため、ほとんど人気はない。夜ともなれば、誰も買わない自動販売機だけが煌々とひびいった道路を照らすだけで、辺りは真っ暗闇である。ふと、暗雲に隠れて朧になつた月光が廃工場の屋根の上に佇む二人の人影を浮かび上がらせた。

「あの男はどうだ」

低い声の男が言つ。

「……」

「よもや、約束を忘れたわけではあるまいな」

男は、やや高圧めいた口調でもう一人のほうを見る。

「きょうけいを見せれば墮ちると思います。でも……」

「なんだ」

月光が姿態をほのかに照らす。片方は子供であった。

「あの男の人は酷く心を喪失しています。あれではお望みの**儚獸**になるとは思えません」

少年のほうは何やら不安そうな面持ちをしている。低い声の男は、少年の小さな顎を掴んで言つ。

「やつてみなければわからぬ。そもそも助けを求めてきたのはお主

ではないのか

「……」

少年は目を伏せた。

「それとも……彰国がどうなつてもよこと申すのか。我々は一向に構わんが」

「いや……そんな

「ならばやれ。大王陛下も待つておられる」

少年は静かに目を閉じ、頷いた。

理想はあつた。

自分の理想像は確かにあつた。解れてしまいそうなほどに脆かつたが、存在していた。

しかし、今の自分にそれを照らし合わそうとしても、どうしても重なり合わない。こんな自分を過去の自分は想像していただろうか。いや、むしろ蔑んでいただろう。理想の自分の一片でも手に入れることが叶わない現実。今まで見てきた将来像とのあまりの格差。その格差の尺度のぶんだけ募る嫉妬。

男の心にはやつさまで情熱で煮えたぎっていたが、今ぽっかりと喪失してしまったその場所には憎悪という感情がだんだんと埋め合わされていた。それは女に対する嫉妬と、女を手に入れるだけのものを持つものに対する嫉妬。そいつは自分にはないものを持っている。何故だ。どうして自分じゃないんだ。なぜ、あいつがもって自分がもっていないんだ。

どうしようもない現実は男を酷く無力感に苛ませる。そして次第に、現実と向き合うことに消極的になり始めた。向き合つたところで、格差を見せられる。それは男を失望させる。向き合うことは男の自尊心を傷つける。

ならば、男は甘美で都合のよい空想を見始めるしかない。  
理想の、なんの柵もない、きれいな、傷つかない……。

男は足取りも覚束ないようにふらふらと倉庫街を宛てもなく彷徨い、そして摩耗で明りが点滅する自動販売機の脇にある、社名の入ったベンチに崩れるように腰掛けた。  
ぐつたりと頃垂れ、ほくそ笑み、空を見上げる。街の明るさで星す

ら見えない。月だけが煌々と円下を照らす。田が熱くなり、頬を一筋の涙が伝つた。

「いつたい……なんなんだろ？　俺……」

そして、『じじ』と田拭い目を下に戻すと、ほの暗い電燈の下に人影があるのに気が付いた。男は音もなく現れた物体に驚き、あつと声をあげた。それは、ぺたぺたとこちらへ近づいてくる。小柄の少年のようだが、こんな時間にこんな場所で子供がいるはずがない。男は背筋が急に寒くなり、恐怖のあまり言葉を失つた。すると少年は、あと数歩というところでぴたりと止まり、拳の甲の辺りを額につけた。山吹の衣を纏い、髪はきちんと束ねられ後ろでに金細工で結われているようだ。男は仰天し、ただただこの不思議な少年を凝視する。

「『』めんなさい」

と、男の耳の中に声が響いた。少年の口は開かれていない。

「な、なんだ、お前は？」

問うが応答はない。少年は見るからに辛そうな表情をしている。そして、少年は何かの呪文を唱えた。一つの音楽のような呪文。すると、少年の額の辺りから青白い光が噴出し一気に周辺を呑むと、男の視界から少年が消え、次いで辺りの風景が光に消えた。青を含んだ風が吹き荒れる。でも、肌に当たるような感触を覚えるだけで服はゆらめなかつた。皮膚にだけ風が当たつてゐるような。

「あ……ああ……」

風が止み、周囲の靄が開けると、なんと男は地平線まで延々と広がる花畠の真ん中にはつんと立つていた。甘く切ない香りが辺りに立ち込めてゐる。そして理由のわからない充足が憎悪と嫉妬に支配

されていた心を満たしてゆくのを感じた。

そして、男は見た。いや体感した。全てを。考えうる全てを。

男は、身体が蕩けていくような感触を覚える。精神が昂り、感情が高揚する。男が望むものがそこにはあった。理想の全てがそこにはあつた。

そこで、男の中の何かがガクンと外れた。生への執着か、はたまた壮絶な虚無か。

精神から理性が溶け出し、別の所有物になつたかのような身体が歯止めの効かない変化をし始めていた。

やがて、青白い光が周囲から消失すると、男はいつの間にか走り始めた。点滅する電燈が猛然と駆けるそれを閃きのように照らす。黄色い体に赤い尾を持ち四つの脚で駆けるそれは、すでに人の形をしていかつた。

「あれはなんだ」

肩を落とし、荒い呼吸をする少年の脇で、深衣を纏いやや目のつりあがつた男が言つ。

「……合? です」

「ほお、やはり畜生に堕ちたか。だが命? の血では不老不死は得られない。しかし、何故奴を支配せぬ。方へ行つてしまつたではないか」

男は細い目を更に細めて問うた。

「僕は瀛州の民には知られていません。彼等の心に僕ら、龍はいなからです。それでは墮としても支配することはできません」

少年は肩を落として深い溜息をついた。

「そうか、まあよい。しかし……」

男は天を振り仰いだ。未だ星は見えず、天は淀んで明るい。

「星も見ずしてこここの者はいかに吉凶を天に請うのである? な」

少年は黙つたまま俯いていた。男はそれを気にせず、黒い笑みを含みながら歩を進ませる。

「戦もせずに理想だけ一人前とは、瀛州の民はよ<sup>じゆうかく</sup>い獸畜<sup>じゆく</sup>となむ」と  
である。お 子琳よ」

「ねえ、さつきのはやりすぎだつたんじやないの？..」

「はあ？むしろ殴りなかつただけ俺は優しかつたぜ」

「きやはは、言えてる」

「あんな気持ち悪いの見ると腹立つてくんだよ。なーんか負の才一<sup>ハリ</sup>てこうの、まわりに迷惑だから排除してやつたんだよ、俺い  
いことしきちやつた」

「さつすが正義の味方。……待つて、なにあれ？」

「ん、犬か？いや……違つ、豚か？」

「ひつちぐる！逃げよう、ねえ、逃げようよー。」

「つわづ、顔だ！顔がつ……ぎやああああ  
「きゅああああああああ、あつあつ……」

一羽の蝶がひらひらと朝堂の柱を縫つて舞う。

朱色の柱の間からは穏やかな光が差し込み美しい装飾が施された堂の中を仄かに照らす。その淡い光の中に何人もの正装をした人が玉座に座する人を仰いでいました。

「華胥という国を知つておるか」

王様が左右の臣に尋ねました。

「はい、存じております。西瀛の更に西にあるという国でございましょう。華胥の国民は慾に囚われず、全てが自然であり、とても満ち足りていると聞いております」

王様の一 番近くに並ぶ臣が拱手して答えました。

王様は玉座の下に居並ぶ臣下を一通り見渡すと、満足げに言います。

「今日、私は黄帝のように華胥にある夢を見た。素晴らしいところであった」

臣下は一同に顔を見合わせ、やがて装を正し一人が言います。

「それは大変ようございました。華胥の夢は吉夢であるといいますから、きっとよいことがございましょう」

王様はそうかそうかと黙って蓄えた立派な髭を扱きました。

「戴四邦を統べ早や五年、私は戴の民が充足に満ち足りて毎日が安らかに過ごせるような国を作りたいとかねがね思っていた。仙帝も私にそのような素晴らしい國になるよう華胥の夢を見せたのだろう」

座していた臣下の何人かは顔を曇らせた。それに気付いた王様がどうかしたのかと尋ねます。そして老齢の臣が言いました。

「恐れながら、近年の度重なる公共事業で国の金庫は底を尽きかけております。そしてその徵発で人民は我ら彰に対し怨嗟の声を上げて居ると、この宮中まで聞き届いております。まだ諸邦を平定し

てわずかです。地方では滅ぼした国の王族が機がないかと虎視眈眈と窺っています。ですから国の礎を固める為にも事業を一回中止し、時をおいて時勢を考慮して行うのが賢明かと」

王様は見るからに不機嫌な顔をした。その臣下は拱手したまま王様の反応を恐々としながら待つていると、王様は怒りを露わにして言いました。

「全ては民の為の事業である。治水も灌漑も城壁の補修も新田の開発も、全て民の為だ。それに不公平を言つのであらば我が國の民にない資格などはない。我が意思はちゃんと下々に伝えておるはずだ。それに国庫の金など、慾に塗れた貴族共が溜めこんでおつた宝物を強制的に徴収すればいいことだ。元はと言えば民に重圧をかけて得たものだろう。それを民に還元すればよい」

「それでは王族、貴族達を決起させる口実となつてしまします！ 地方で反乱が起こりましよう」

他の臣下が横から上申すると、さらに王様は激昂します。

「そのようなものは一人残らず捕えて処刑すればよい。私は臣下に恵まれておる。戴四邦を平定した我が軍に挑むといつになら相手になつてやる」

「昂龍様、ですがそれでは……！」

老齢の臣下が声を上げて諫めようとしています。しかし、王様は言います。

「私が目指す理想の国は民にとつても理想の国である。民もそれに気付くであろうし、後の史書にも私の功績が称賛されるであろう。華胥のような素晴らしい國にする為には多少のことともやむを得ないのだ、よいな。これ以上言つのであるならば、我が國の臣下と認めぬ。この場で斬る」

臣下は一同に黙りました。参列する臣下の中には袖を濡らすものもありました。王様は言い終わるとまた立派な髭を扱き始め、司農に貴族から宝物を徴収するよう命を出します。

その老齢の臣は嘆息して空くうを仰ぎました。

「戦乱が終わってもまだ民は墮ちてしまふのか……」

蝶はひらひらと宙を舞つていましたが、やがて四阿しゃを抜け、国内隨一の庭師によつて丹精に施された庭院にわを穏やかな風に吹かれて優雅に泳ぎ、そして忽然と消えました。

章初元年、彰王昂龍の治世でありました。

## 華胥之夢（後書き）

西瀛・中国のこと

黄帝・中国の太古の聖王。

視界に広がるは濃霧、取り巻くは香り混じりし風。

千里は、どこかに立っていた。この甘い香りは嗅いだ事がある。やがて眼前から濃霧が晴れ、風景が鮮明になつた。聞いたことのある甲高い野鳥の囁り、瓊草繁る蒼莽が広がる場所。もちろん千里には見た覚えがある。

夢で見た場所。芳園の周りには朱色の甍がふかれた堀<sup>へい</sup>が、先がかすれて見えないほどに遙か向こうへと続き、その中央には綺麗に澄んだ溜池と金銀細工が施された亭<sup>あずまや</sup>が庭の風景を損なわない適切な位置に建てられている。

千里はじつと田を凝らした。亭にはやはり誰かがいる。赤黒い手摺にか細い手を置き、どこか遠くをおぼろげな表情で見つめる少女。

また同じだ。

千里は少女が一番よく見える池の畔まで<sup>ほとり</sup>いき、今度こそはと大きく声をあげて呼ぼうとする。だが、声は言葉ではなかつた。

唸るような重苦しい声が喉から発せられる。どうしたことか、言葉が出ない。意識では言葉はわかるのに発した途端言葉ではないものに変わるのである。そして気付いてしまう。自分が四足で地面に立っていることに。千里は驚いて、急いで水面に映る自分を見た。

「これはー!?

紅い毛並みの狼のような獣が水面をじつと睨んでいる。そんなばかり、と面をあげ亭を見た。少女はこちらを見て愛おしそうな微笑を浮かべている。そこで初めて少女の顔を見た。肩まで伸びた黒髪は陽の光を浴びて光沢を発し、穏やかな微風に靡<sup>なび</sup>いている。懐かしいような、嬉しいようないろんな感情が心に沸き躍る。やがて、少

女はまた曇つた顔をして別の方向を向いてしまつた。すると、水面が急激に靄に覆われ辺りは真つ白になる。千里は声をあげて少女を呼ぶが、その声はただの遠吠えにしかならなかつた。

長い夢を見たかのような徒労感を抱えながら千里は目を覚ました。体中の所々が動かして伸縮する度に痛む。眠くてしばしばする目を重々しく開けると、まず自分が寝ているベッドが知っているものではないことに気付いた。そして、部屋の内装が知っているものと違う事にも気づく。白いカーテンがベッドの周りを取り囲み、独特な薬品の臭いが鼻をついた。すぐに病院のベッドだとわかつた。

「目が覚めたようですよ

若い女人の声がすぐ側で聞こえ、次いで、そうですかと言う男の声がした。すぐに父親の声だと理解する。カーテンが開くと、やや疲れたような顔の父と白衣を着た若い看護師の顔が見えた。父はスリーブを脱いで脇に持ちこちらをちらちら見ながら看護師さんの話を聞いている。やがて、父が頭を下げて看護師を見送ると、顔色を変えてベッドの脇の丸椅子に腰かけた。そして、部屋に響き渡るような声で、

「何をしていたんだ、心配したんだぞ！」

と、まだ意識がぼんやりしている千里を叱りつけた。しかし何と弁解すればいいのかわからず、とりあえずしゅんとして父の次の言葉を待つた。

「今朝街の裏山で倒れていたと聞いて驚いたぞ。そこで何をやつてたんだ、言つてみなさい。悪いことをしていたのか？」

果たして、何があつたかを言つてこの父は信じるだろうか。そもそも千里自身もあれが本当にあつたのか怪しいぐらいの気持ちである。しかし、悪いことをしていたのかという言葉が千里の心を締め付け

る。一体誰のせいでこんなことになつてゐるかと思つてゐるのだからつか。

「……父さんのしてこなうとは懸い事じやないの」

「なに？」

咄嗟にもやもやしていたものと一緒にずっと蟠つていった感情を父にぶつけた。

「母さんや沙希や僕のことを無視して勝手に女を連れてきて、子供も作るのが悪い事じやないの？」

同じ部屋にいる人がこちらを訝しそうに覗いてゐる。父は啞然として千里を凝視していたが、やがて肩を落とし言ひ。

「千里、前にも言つたが母さんも沙希もむづの世にはいらないんだぞ。いない人の気持ちをいつまでも引きずつてゐるわけにもいかないだろ？」

小さな怒り混じりに千里を諭した。

「……僕はどうなるんだよ」

「だから、お前は父さんの列記とした息子だ。お前はちゃんとした家族の一員なんだ、これからも。何も心配する事じはない」

「……どこにそんな保障があるんだ！」

今度は千里の声が部屋を越え、廊下にまで響いた。これに対し父の顔は次第に紅潮するが、やがて深い溜息を吐くと、上着を持って席を立つた。

「父さんはこれから仕事だ。午後から検査をして大丈夫だったら退院してもいいそうだ。着替えはそこにある」

そう言つと、千里に一瞥もせず部屋を出て行つてしまつた。

千里も溜息を吐くと、あの夢の続きを見ようと布団に潜り込む。でも結局寝付くことができなかつた。

千里は目を瞑りながらずつと夢のことと、あの不思議な世界のことを考えていた。果たして、あの世界は本当に現実のものだったのだろうかと頬を白くて硬い枕に擦りながら思つ。何年も前に行方不明になつた友達が、当時の姿そのままで魔法のようなものを使い、朽ち果てた城で、馬に跨り鎧を着込んだ人達と人面の化け物に会つたなどと他の人は信じてくれるのだろうか。おそらく真剣に取り合つてはくれないだろう。

そして、懐かしいようなおかしな興奮が身体をやんわりと包み込んでいる。そういうえばこんな気持ちは何年も前から感じていなかつた。新しいものを見て好奇心と冒險心に溢れるような、そんな。

だが、そんな中でも瞼まぶたの裏には翔の苦しそうな表情が見える。血を流し、必死にこちらに叫んでいた。夢でないとしたら、翔は何者かに襲われ死にそうになっているのか。助けなくちゃ、でも。夢であつてほしいうな、夢であつてほしくないようなそんな複雑な気持ちが心を淀ませる。そこではつと思い出して、手の辺りを弄ねぐつた。

「……指輪が」

翔が落とした指輪。あれが、夢かどうかの証明になる。しかし、探してもどこにもなかつた。はねるよう起きてベッドの側にある小さな棚も見たが、なかつた。だとしたら、あの山に転がっているのかもしれない。

千里は何かを確かめるかのように窓の外を眺めた。三階の窓のすぐ前には青々とした葉を繁らす櫻けやきの梢が陽の光を調節するかのように立ちふさがり、病院特有の真つ白な部屋の中を優しく照らす。今日は快晴だ。

結局貧血で突然気を失つたということで一通りの検査は終了し、看護師さんから待合室で少し待つように言われた。こじやれた洋風テラスのように壁一面がガラス張りの待合室では、病院の敷地内にある手入れされた小坪の庭の景色が一望でき、午後の陽光が室内全体に差し込んでいる。五列ほどに並べられた長椅子にはちらほらと患者であつたり見舞いに来ているような人が座つて、壁に掛けられた大きな薄型テレビを見たり、紙コップのコーヒーを片手に文庫本を熱心に読んでいた。千里も他の人と距離を置いて長椅子に腰かけ、テレビを眺めた。ほんとうはこんなにゆっくりしたい気分ではないのだが、ほんの数分だろうと逸る気持ちを押さえて仕方なく正午のニュースを見た。

どうやら、何か大きな事件があつたらしく、へりで空から中継している。その街並みを見て、千里の顔が一瞬強張つた。なんと、自分の住んでいる街ではないか。

「事件の状況を説明してください」

女性のアナウンサーがレポーターに事件の詳細を尋ねる。レポーターが立っているのは、見知っている街の商店街の前だ。千里が周りを見ると待合室の人はみんな顔をあげ、廊下にいる人も足を止めてテレビを訝しそうに見ていた。画面右上のテロップには「<sup>しんかいし</sup>真海市で男女四人が正体不明の動物に襲われ死傷」とある。

「はい、今日の午前一時頃、真海市中心部の繁華街で男女四人が謎の動物に襲われ三人が死亡、一人が意識不明の重体です。現在、保健所と県警が合同でこの動物の行方を捜索中ですが、まだ見つかっておりません。また保健所からはなるべく外出は控えるよう市民に呼び掛けています」

レポーターの後ろにはブルーシートで塞がれた路地が見え、辺りの壁には血の跡がある。何やら背筋が寒々とするようなものを感じた。そして、一瞬あのときの凄惨な光景が脳裏に鮮明に蘇る。男が獣に食い殺されるあの光景を。

「どのような動物か判明しているのでしょうか」

「いえ、生存している被害者が意識不明でその正体はまだわかつていませんが、ある目撃者によると人面の豚といつ証言もあり、その真偽については現在も調査中です」

人面の……豚？

千里の頭にもつと嫌なものが現れた。あの不気味な笑みを浮かべた化け物の顔だ。まさか、そんなはずはない、焦る気持ちをなんとかなだめようとするも、どうにもある表情を焼き消すことができない。その中にふと、そこに翔の顔が浮かぶ。

千ちゃんの街、いやそれだけじゃないいろんな場所で、もしかしたら大変なことが起こるかもしれない。

翔が言っていたこと、もしかしたら……いや、どちらにしろ、までは現実か幻かを確かめなければならない。そのためにも。

「番号札、108番の方、108番の方、検査が終わりましたので受付までお越しください」

千里は急いで札を見返すと、すっくと立ち上がりてテレビを後目に待合室を出た。とりあえず、確かめるのが先決だ。

だが、受付の数歩前で千里の急ぎ足は止まった。何が起きたのか一瞬千里にもわからなかつた。千里の立つ場所から見える病院のガラス張りになつた正面玄関から、足早に出ていく女の子に目がかちりと固定されてしまったのだ。

「あ……あれ？」

休日で混んだ病院内は人の往来が激しく、すぐに女の子は雑踏の中に紛れた。一人時間が止まつたかのように停止した千里の眼には

しっかりとその女の子の陰影が焼きつけられた。白い薄手のワンピースを着て、片手に小さな鞄を持ったその女の子の顔、忘れるはない、夢で見たあの儂のような表情を浮かべた女の子だ。寸分違わぬその顔、だが髪は肩までではなく、前髪をピンで止め夢よりも少し短かつた。千里の心臓は急激に鼓動を加速させた。気持ち悪くなるほどに、全身に血液が巡り始める。数十秒間固まつたままの千里に看護師さんが声をかけた。

「瀧本千里君ね、異常がなかつたからもう退院してもいいわよ。部屋で着替えたらもう一度ここに来てね」

千里は心こころにあらざな顔で頷いた。

千里は父が持つてきてくれた上下が合わない服に渋々着替え、近くの神社にあつたのを拾つてくれたといふ学校指定の茶色い鞄を肩にかけてそそくさと病院を出た。すでに父が諸治療費を払つてくれたようで、そこは父に僅かながらの感謝をしておいた。

外に出ると、病院の門の前には報道関係者と思われる人々が熱心にカメラを撮つているのが見えた。その黙に襲われたという人はこの病院に入院している、ときの待合室で誰かが言つているのを思いだす。警察車両も病院の前に何台か止まつていてるのがその証拠だろう。小高い丘の上にある病院からは、街に高いビルがそれほどないため街の全貌が一望できる。空は先ほど窓からみた快晴からは若干移ろい、細々とした綿雲が西の蒼天に幾重もの白波をつくりだしていた。家屋が立ち並ぶ街の向こうには大型船が停泊している港、そして広大な海、地平線を挟んだその先は青々とした空。

千里は向かつて右手のほうをまじまじと見た。眼の前に立ち塞がる灰色の病院の向こうには自分が倒れていた 翔と出会った山があるはずだ。でも、そんなことよりも、今の千里には別のことで心と頭がいっぱいだった。さつきから頭から焼きついで離れない、あの後ろ姿。果たして偶然なのか、錯覚なのか、今は確かめる術はない。あの子の後を追えばよかつたと今更ながらに深く後悔する。やがて、そんなもやもやした蟻りを残しながらも、千里は丘の下の街へと続くなだらかな坂道を何かを振り切るかのように足早に下つていった。

神社のある場所はすぐに分かるだろうと勇み足で古民家通りを歩いていたが、思ったよりも複雑な街路と根っからの方向音痴でなか

なか見つからず、ぼうぼうの体で田当ての神社の前に辿り着いた時には、すでに日は山の稜線の上にまで落ちていた。やはりこの辺りは黄昏時ともなると人の往来が全くなくなる。まだ完全に日は落ちていないにも関わらず、うすすらとした闇が辺りを支配していた。千里は空を仰ぐ。社叢は以前訪れた昼間の時は打つて変わつて、来るものを拒むかのように石段から広い参道までをどんよりと覆っていた。一応確かめるが翔の血の跡はどこにもない。意を決して鳥居をぐぐり、翔が入つていった林道を田指した。他にもあそこ自分が倒れていた場所　までに至る道があるとは心のどこかで思つてはいたが、このときはただこの道を通ることしか考えられなかつた。

翔を追いかけた道なき道をなんとか思い出しつつ、山の雑木林の中へと分け入つてゆく。お墓、沼、畠、と田印となるような目標を辿りながら山を登つてゆく千里の心境はどこか複雑だつた。やがて水が弾ける音がし、やつと開けた場所に着いた。今改めて見ると、この場所も誰かの所有物のようで、一段降りた場所には畝と粗末な農具小屋があり、人の来る場所ではあるらしい。見つけてくれた人に感謝しつつ、辺りに目を凝らした。確かにその場所の小さな滝壺の周りには鮮やかな色を帯びた桃の花が咲いていたはずだが、ただ夕焼け色に染まる深緑の木々が立ち並ぶだけで、辺りには桃色などはどこにも見当たらなかつた。しかも、前にあつたはずのあちらへ繋がる穴も一切合切跡形もなく消えてしまつており、ますます千里の心は複雑混迷してゆく。

日の円底は街を挟んだ向こうの山の稜線に接し、朱色の空を背景にカラスの群が忙しない鳴き声をあげながらどこかへと飛んでゆく。眼下に広がる家屋の灯がぽつぽつとつき始め、帰宅を促す赤とんぼの曲が千里の耳も入つた。ちらりと時計を見るとすでに六時を回つていた。

「暗くなる前に見つけないと。でも……」

跡形もない穴を見て、千里の心は再び不安に苛まれた。あれは夢、あれは幻。別の自分がそう囁く。でも、翔の声が頭にこびり付いて離れない。

「これは千ちやんの来るよつな世界じゃないんだ。

いや、行つてみなければわからない。どんな世界だろうと構わない。この世界<sup>げせつ</sup>じゃないのであるならば。

そう、もし「ここ」であきらめたら、また同じ苦い日々が続くのかもしれないのだ。

それだけは嫌だと、心を奮い立たせ、千里は弱まる口の光を頼りに草叢<sup>くさむら</sup>を掻き分けあの指輪を探した。見つけなければ何も始まらないような気がした。見つけなければ何かが終わってしまうような気がした。

「あつた！！」

泥だらけの手をあげ千里が腰をあげたとき、すでに辺りは闇に包まれつづあつた。

だが、指輪かと思われていたそれは、別の形をしていた。前に握つた指輪よりちょっとばかしでかいぐらいの大きさでまぎれもなくあの紅い珠をつけているが、元の形とは程遠い。言うなれば偉い人が使う判子のような四角い形をし、持ち手には薄暗くてよく見えないが何かの象形が形作られている。その象形が天に向かつて珠を咥えている。宵<sup>よ</sup>の中におぼろげに浮かぶ満月にそれを翳すと、よく真紅を発した。

不思議に思いながらも、これで間違いないと感じた。直感的というより既知からくる確信に近い。あつたのだ、間違いない。自分はあの世界に行っていたのだ。この世界とは異なる世界に。嬉しさに表情を綻ばせながら、泥のついた手で汗に塗れた顔を拭い、目の

前に広がる見知った街の夜景をぼんやりと見た。夕と闇が混じり合った紫の空を描き出すその月下、様々な光の点が天空の星のように眩く輝く。赤であつたり、白であつたり青であつたり様々だ。一つ一つに人が生活を営んでいる。当たり前だと思っていたこの光景、千里はとても感動を覚えた。興奮からか、目に映る全てが美しく、輝いているように見えた。

「綺麗……」

そして、千里はものをしつかりと握りしめ、山後にした。

山を降りる最中もパトカーのサイレンが街のそこら中から聞こえた。まだ、あの謎の動物とやらは捕まつていないのでだろうか。身を守るものを持たない千里は、恐々とほの暗く細い道をひたすら歩んでいた。やがて神社の本殿の屋根が見える位置まできて一安心し、参道を通つて早く帰ろうと足早に坂道を駆け下りる。しかし、千里の足はある物を見てピタリと止まった。

何かが、参道の石畳の上で横たわっている。木々の隙間から差す月光が僅かに照らすその物体を背筋が凍る思いで見た。渴いた喉が大きく鳴る。どうやら大きな犬か豚のようであるが、どこかがおかしい。そして、そのことに気付くのに時間はかからなかつた。

その動物の頭は人の顔をしていた。

神社の周りからはパトカーのサイレンが鳴り響き、静寂の社に喧騒を齎<sup>もたら</sup>している中、千里の荒かつた呼吸が一瞬にして止まった。

薄暗い参道の中にぽつりと横たわる物体。淡い月の光がその姿態を照らした。豚のような黄色い体に赤い尾を生やし、顔は赤黒く人間の男性に極めて近い輪郭をしており、腹から血を流して苦しそうに横たわっていた。呼吸はしているようで身体が小刻みに震えている。

「だれか……そこに、いるのか」

千里は咄嗟に辺りを見回した。だが、声を発するようなものは目の前のものしかない。恐る恐る近づき、そのおぞましい姿をした生き物を間近で見た。見ると、痛々しい弾痕のようなものが腹に二つあり、誰かに撃たれたようである。そして内臓を撃たれたらしく酷い臭いが辺りにたちこめており、千里は思わず鼻を押さえた。あの人を食い殺した獣かもしれない、直感的に思った。こんな人の顔をした動物がいるはずがないのだ、おそらく間違いないだろう。ならば撃たれて血を流しながらここまできたのだろうか。

「いるんだな……そこに」

人のような血だらけの口が動いている。この豚に似た生き物が言葉を発しているので間違いはなかつた。

「俺は……何に見える」

擦れてしまいそうな青年の声が立ち尽くす千里に問いかける。千里は言葉を探した。見たことがない生き物だ、あえて言うなれば豚だが、豚が言葉を発するはずがない。この一体何かわからない生き物が自らが何に見えるかと問うていて、これほど奇妙なことはなかった。千里は言葉に詰まつたが、震える声で言った。

「人の顔をした……豚……」

一瞬食い殺されるかと思ったが、この獸はそつと、と一齧噛みついで何かをあきらめるかのように首を落とした。そしてすすり泣く様に呴く。

「俺はこんなものを望んじやいなかつた……、俺はもつと、もつといいものを望んでいた……。憧れていた、無性に。これはきっと、夢なんだ……そうだ……そうに違いないんだ。俺が豚だなんて、そんなことありつこない、俺はもつと、もつと、そう……見えたはずなのに……、手に入れたと思ったのに……。望んじやいけなかつたのかよ……」

この生き物は酷く錯乱しながら、どこかに向かつて話していた。その話しぶりを見て千里の頭にあの馬腹ばぶくのことが蘇つた。人が墮ちて獣になる、確か翔がそう話していた。

「お前……もしかかして人間だったのか？」

千里が問うと、豚のような獸は横たえた顔そのままに静かに目だけを動かし、千里を流し目で睨んだ。

「多分そうだつた……気がついたときにはこんな姿をしていた……はずだ。変な格好をしたこどもが現れたとこまでは覚えてるんだが、もつ……よく思い出せない」

「こども？」

千里は少し引っかかるものを覚えた。

「……ははっ、でもなんだか自分がもとから化け物だつたような気もしてきたんだ……。なんの柵しゃがりまも……苦しみもない……自尊心も傷つかない……俺は、最初からそつだつたのかもしれない……。俺をバカにしたやつを食い殺したときは……とても、とても爽快だつた。狂氣と憎悪と本能のままに、やつらを食い殺した。酔つていた、なんの責任もない快樂に……本能のままに生きることに」

そう言つと、口から大量の血を吐いた。そして、目を細めて言つ。

「……罰……かな。でも見てしまつたんだ。あんな綺麗な場所……」

望むものが全部あつたんだ。お前も氣をつける、あれを見れば生きるのがばからしくなつてしまつ」

「……綺麗な場所？」

人語を喋る獸は、問い合わせに答える前に豚の鳴き声のような咳き声を二度して再び血を吐いた。もう長くは持たないだろうと素人目にもわかる。

すると光を失いかけていた目を突然カツと見開き力強く千里に向かつて言った。

「……きたぞ……逃げろ……！」

何が？と、聞く前に入口から参道へと続く石段にゆらゆらとこちらへ向かってくる人影があるのがすぐに目に入った。

「……わかるんだ……臭いがするんだ」

千里はその獸の言う事に何か嫌な予感がして、慌てて虫の息の獸をそのままに手水舎の裏に隠れて様子を窺つた。

すると月光が及ばない闇の中から一人の人間が現れた。やがて、横たわる獸の側まで来るとほのかな月光に照らされその姿が露わになつた。一人は長身の立派な髪を蓄えた男性で、髪を結い纏め何枚かの衣服を重ね着し、腰を締める帯には剣が携えられている。対して、もう一人は翔とよく似た山吹色の衣を着ており、同じぐらいの年若の少年であった。明らかに日本人ではない風貌をしているし、だが現代の中国人でもなさそうだ。そう、あの世界の人間のような……。

一気に噴き出した汗で衣服が絡みつくように身体を包み、鼓動が段々と早くなる。そして恐る恐る苔生した水盤と柄杓の間から見つからないようにことの次第を見守つた。

長身の男は片膝をつくと、この死にそうな獸を助けるわけでも憐れむわけではなく侮蔑を込めた眼で見下ろしていた。一方脇では少年が顔を背けて、袖で鼻を覆つている。

何かを話しているようだが日本語ではないので千里には全く聞き取

れず、しばらくやきもきしていると、突然ぎゅうといふ悲鳴が境内に響き渡つた。男が脇から剣を抜きあの獸の喉を搔つ切つたのだつた。鮮血が飛び散る間も少年はずつと鼻を押さえ目を背けたままであつた。それが対照的であり、違和感を覚える。

千里はその光景を見て狼狽し、汗腺が全開になつたかのように身体中から汗水が垂れた。

見てはいけない何かを見てしまつた。そう思わずにはいられない一部始終が目の前で繰り広げられたのである。

「誰かいるのか！？」

いきなり本殿の裏から声がし、そこから懐中電灯を持つ警官一人が出てきて千里の背後を訝しそうに照らした。千里は声をあげて驚いたが、すぐに知つている制服を着た警官だとわかつたので胸を撫で下ろし、警官に獸がいた場所をわなわなと震える手で指差した。

「あそこに、人を襲つた動物が倒れて……！」

警官はそれを聞いて驚きながらも、わかつたと頷き、警棒片手に参道の辺りを懐中電灯で照らした。

「どこだ、何もないぞ」

「……そ、そんな」

確かに、目を離した一瞬の隙にさつきまでいた人や獸はすでに影も形もなく消え失せていた。

残つていたのは、ふわりと降り注ぐ月光の照明と赤黒い血の跡だけであった。

千里が境内にいた警官一人に付き添われて石段を降りると、鳥居の前の道路には3台ほどのパトカーと白いワンボックスカーが電灯の少なく薄暗い道を封鎖していた。赤いランプの点滅が辺りを煌々と照らし、近所の人人が怪訝そうに窓や軒先から顔を覗かせている。恐る恐る警官の一人に何事が聞くと、獵友会と警察が深手を負ったあの猛獸をこの辺りまで追い詰めたのだという。それで神社の境内を探していたところ隠れている千里を見つけたのだと。境内に残る血の跡を見た警官は、すぐに肩の無線でどこかへ連絡し千里を保護した。

「本当にいたのかね、一体やつは何だつたんだ？ 犬か、虎か？」  
獵銃を背負つた初老の人達が経緯の話を聞くなり千里に詰め寄つて尋ねた。みなどこか青ざめたような表情をしている。

それは。千里は言葉に詰まる。本当のことを言つても果たして信じるだろうか。いや、というより、この人達の表情はそうであつて欲しくないというような顔だ。知つている、何だつたのかを。

「暗くて…よく見えなかつたんです。でも、あれは多分…犬でした、おつきな」

あえて嘘をついた。それを聞いて獵友会の人達は安堵したように顔を綻ばせた。

「そうだよなあ。おらあてつきり神様を撃つちまつたんじやないかつてひやひやしてんたんだ」

「…神様？」

「そうよ。こいつ、どてつ腹に弾撃ち込んだときに人の声あげたつて言うもんですよ。しかも人のつらだつたつてさ。おれも…なんとなくそんな気がしてびびつてたが、どうやら違うらしいな。ま、あの

怪我じや長くはねえだろ。すぐにこの騒動も静まるさ」

「死体はどうします？ いちおう上に報告せにゃならんのですが」

後ろから背広を着た警官が無線機片手に尋ねた。

「この神社の真裏は全部山だで。山の所有者も何人かあるしな。もう暗いし死体探しは明日にしよや。それになあ…」

「…何かあるんですか？」

会の長と思われるその人は、帽子をあげて白髪混じりの頭を撫でた。

「何人も消えとるんじゃ、この山は」

断つたのだが警察車両で家まで送つてもらつことになり、事情聴取をうけ家に着いたときにはすでに11時をまわっていた。閑静な住宅街の一角に立つ家の門前には朝に見たシャツを着たままの父が待つていた。そして、へこへこ頭を下げて送つてくれた警察の人を遠くまで見送ると、父はがっくり肩を落とし、何も言わず家の中へ入つてゆく。千里もあえて何も言わず家の中へと入つていった。しかしながら、そのときは怒りの対象である父の自分に対する失望が怖かった。無言の父がひどく恐ろしいものに見えた。その恐怖を必死に怒りで搔き消すのにそのときは必死だった。罪悪感を消そうとしていたのだろう。

急いで部屋へともどつた千里は、ドアの前でぐつたりとへたり込んだ。そして何分かじつとしていると今までの事が一枚絵のようになつて眼前に写しだされた。眼を瞑つて深呼吸をし興奮する心を落ち着かせると、握りっぱなしで汗ばんだ拳を開いて中を見た。

確かに、ある。

決してまやかしではなかつた。非現実の端緒がこの手の中に実在する。それだけで千里の胸は躍つた。それと同時に、翔の安否がとてもなく心配になつた。

まじまじとこの小さな金の印を見つめる。持ち手の象形は小さな龍であった。精巧に形作られた金の龍がどぐろを巻き天に向かって紅い珠を咥え、印判の面には何かの文字が彫られている。印の側面には何かの紋様が刻まれ、龍の体の隙間の穴には紫の組紐くみひもが通されており、いかにも值打ちがしそうな一品である。

だが、これがなぜあの指輪から印になつたのか全くわからないし、使い方もよくわからなかつた。そうして印を手で弄りながら時が過ぎる。すると、階下から玄関のドアが空く音が聞こえ、聞き知らぬ女性の声が漏れ聞こえた。すでに時計は12時を指している。

「……」

千里は起き上がると、何かを遮断するかのように部屋の鍵を閉め、そのまま耳を塞ぐようにベッドに飛び込んだ。手にはひつしと印を握りながら。

人は夢を見る。夢は人を魅せる。現実と非現実のおぼろげな狭間の一瞬。無意識に記憶から掘り起こされた深層の願望。それが睡眠という生命活動の中で光を当てられ、その閃光のような瞬きで願望というものの影を落とし夢として映し出す。だが、夢は知らないもの時として映す。古来より人は、それで吉凶を占つたり、はたまた未来、もしくは別の世界を見せてているなど様々に夢を現実の指針とした。それは、夢が苦痛に満ちた現実とは違い儂くとも美しいものであるから、なのかもしね。人は夢と書いて願望とした。人は夢に憧れた。

匂いがする。甘く切ない香り。微風が肌に当たる。強くなく包み込むように。霧が晴れる。白い幕が左右に開けるかのように。

気がつくと花畠の中に顔を埋めつつ伏せになつて横たわっていた。

「……また」

ざわざわと木々が空でざわめく。葉の隙間からの日が丁度頬に当た  
りじんわり温かい。体躯を起こし、霞んだ目をこじこじと擦る。や  
はり同じ庭園 でもどこか様子が違う。

いつも花々の上で優雅に舞っていた蝶がおらず、響く鳥の囀りもない。遠目にいつもあつた東屋を見ると、やはり彼女はそこにいた。しかし東屋の向こうには、以前にはなかつた立派な堂が建ち、その朱色の柱の隙間からはその堂の庭院がぼんやりと見えた。そしてそこには幾人かの子供が毬で楽しそうに遊んでいる。

千里はふらふらと起き上がり、導かれるよつに東屋へ向かつた。彼女は千里が近づくのをチラリと見ると、僅かに微笑し、東屋に渡された別の橋から堂の方へ歩いて行つた。何がなんだかわからず、導かれるままに朱の橋を渡り彼女についてゆくと、彼女は堂の真下で膝を軽く折つて子供たちとなにやら話している。それを聞いてこくこくと頷く子供の姿はみな、翔の着ていたような山吹の深衣を纏つて髪を一つに結つっていた。

彼女はふいにこちらを向くと、純白の袍と艶やかな黒髪を？風にひらめかせながら千里のほうにゆらゆらと微笑を浮かべながら歩いてくる。その後ろで子供たちはまた堂の中へ入つて毬で遊びだした。千里は緊張と驚きでその場を動けなくなつてしまつ。鼓動がどんどんと早くなり、田が泳ぐ。彼女は千里の前で足を止めると子供たちに接した時のように膝を軽く曲げて 千里の頭を優しく撫でた。一瞬何が起こつたかわからなかつたが、すぐに悟る。千里の姿態は獸のものであつた。だが、撫でられたことが千里の緊張を一気にとき解し彼女の眼を直視することができた。そして、彼女はその丹唇を開き千里に言つ。

「 もうすぐ、お会いできます」

そこで千里の視界は白い靄に覆われ意識はまた遠のいた。 意識が遠のいたあと頭には優しい手の感触が残っていた。

「残念ですが、もうお子さんは自分の足で歩けないかもしれません」

そう医者に宣告されて2カ月が過ぎた。その時隣にいた母は泣き崩れたが、自分はあまりに突然な現実に直面したためか、ただ呆然と泣き崩れる母を不思議そうに眺めていた。

今日も慣れつつある車椅子に乗つて施設内を移動する。そんな自らの意思で動けない自分がひどく惨め。そう、毎日が苦痛だ。リハビリによる回復という希望にすがりついて、一ヶ月血反吐を吐くような思いで訓練したが、どうしようもないじれったさに気が狂いそうなほど嫌になつて結局あきらめた。それからは全ての未来が真っ暗になつた。慾を満たすにもこの不自由な脚が邪魔をする。他のみんなが楽しそうに日常生活を謳歌するのを見て尋常ならざる嫉妬を抱いた。劣等感でおかしくなりそうだ。そして心のほとんどが深淵な闇に溶けていった。

二か月前、僕は理不尽な交通事故に遭つた。相手が飲酒していたことによる飲酒運転の事故。轢いた相手は僕を轢いたあとにそのまま電柱にぶつかって、死んだ。僕は背骨を損傷し、昏睡状態から気付いた時には足に感覺がなかつた。しばらくして怒りが込みあがつても、責める相手はもうこの世にはいない。怒りの矛先がすでにないときほど苦しいものはない。怒りは内向きになり、やがてどうどろとした憎悪の坩堝に溶解してゆく。やがてそれは嫉妬という刃に鍛錬され、無関係な他人へと向けられる。みな哀れな目で見てくる、とても不快だ。高校の同級生も一ヶ月ほどは同情してか病室に見舞いにきたがそれ以降は音沙汰もない。僕は無気力になつた。全てに、現実に絶望した。まさかこんなことが自らに起こるなどと、考えることもなかつたのに。そして、いつしか空想の世界へと精神をもつ

ていくことが多くなった。こんな苦痛に満ちた世界など、滅びてしまえばいいと何度も呪いの言とく願つた。

そんなある日、病室の窓を開けて月夜を眺めて軽く現実逃避をしていた。涼しい風が室内に入り込み、薄い水色のカーテンが揺らめき頬に掠る。そしていつも考えるのだ。今一度、この自らの脚で歩けるならば…と。思う存分。

その時、半開きの窓がカラカラと開いた。カーテンの影から一人の子供が顔を覗かせる。ここは五階である、人が簡単に登つてこれる場所ではない。あまりのことに驚いて、声を出そうとするが、闇に沈んだ精神はそんなことではすでに微動だにしないほど浮世めいていたためか、すぐに冷静さを取り戻した。そして、これはチャンスだと思った。

少年は、見たことのない衣装を纏い、髪を綺麗な簪かんざしで結っていた。腕輪をし指輪を墳めていた。少年がベッドの側に寄ると、頭の中に声が響いた。

「あなたから強い憧れを感じました」

「なつ…！」

この子供が言つているのか。だが、口は疎べんだままである。テレパシーだろうか。すると少年は申し訳なさそうに軽く頭かぶを垂れた。

「じめんなさい…僕にはこうするしかないんです」

と、声がし、少年が頭をあげると手の甲を額に当てるような動作をした。その瞬間、目の前が蒼い光に覆われ、何か温かいものに包まれるような感触が体中を覆つた。

しばらくして、ゆっくり目を開けた。少年はすでにいなかつた。

そして月光に照らされる自分の腕を見て驚愕する。白と黒が入り混じた毛が腕にびっしり生え揃っているではないか。しかも、今まで感覚がなかつた脚に感覚が戻っている。そこで歓喜する。心躍り、

急いで自らの脚で地面に立つた。だが、微妙な体の不均衡に違和感を覚えた。

そうか、前脚で支えればいいのか。

四つの脚で体を支えると、なるほど、とても安定する。そこでさうに全身の毛が喜びに逆立つ。こんなに自分の脚で歩けることが気持ちのいいことだなんて、思いもしなかった。

やがて、とてつもない空腹と慾が空っぽの頭を支配する。そのあと記憶はない。

ただ　久しぶりに楽しかったような気はする。

## 空谷足音（後書き）

クワコタのソクオン  
空谷足音

人気のない谷に響く足音。転じて非常に珍しいこと。また予期しない喜び

「莊子 徐無鬼編より」

人の絶叫が深夜の暗闇でまるで洞穴の中のように閑寂の街にこだましている。その中で子琳は一人打ち震えていた。  
一方で傍らの人物は不満そうな笑みを浮かべている。  
そして、子琳の心はかつてないほどに動搖していた。

「あの怪物は何ぞ」

今、僕は何をしているのだろう。

「と、櫻？<sup>とうじつ</sup>と申します」

どうじてこうなったのだろう。

「奴の血は不老不死か」

「いえ…」

今晚だけで無関係な東瀛の人間を4人も墮とした。

「ふん、またただの蛮獣か」

どうじてこうなってしまったんだろう。

「人の性とは獰猛よの…。かくも醜くなつてしまつ。人はどこにでも変わらぬ」

彰<sup>しょう</sup>を助けたい。そのために、今こうして人を墮としている。

「子琳よ、早く不老不死の血をもつ獣を献上せねばならん。 しづな  
ればあれをやるしかなかろづ。 早う彰国に出兵してほよいのだろづ  
?」

どうして僕はこんなことをしているのだろう。

「…」

子琳は天を仰いだ。 戴邦では綺麗に見晴らせた星空は、ここでは、  
淀んで見えない。

思えば、全ての始まりはあの瀑はく?との出会いであった。  
静かに目を閉じ、子琳はあの頃に思いを馳せた。 本当にあれをやる  
べきなのか自分に確かめるために。

三年前 。

頭の鈍痛で目が覚めた。

まず最初に感じたのは藁の匂いと頭に当たる堅い枕

ゆっくりと、長い間閉じられてべたりとくつついた瞼を開き、凝り

固まつた首をギュッと捻つて辺りを見回した。

霞んだ眼を擦りながら、まず最初に粗末な木の卓子つくえの上に置かれた  
自分の装束が目に入った。

数秒間それを見て、自分の服が木綿の薄汚れた衣服に変わっている

事に気づくと

慌てて上体を起こし自分の指を見た。

そこに填められているはずのものがない。

敷かれた藁を脇にどけ、まだ痺れが残る身体を氣にも止めず木板を重ねただけの寝床の回りをぐるぐると探し回つてみたが結局見つからなかつた。

あれがないと帰れないのに……

途方に暮れると大きく溜め息をつき、朽ちた木窓の前の一戸高くなつてている床に腰をかけて冷静に自分の置かれている状況を飲み込もうとした。

所々ひび割れた土塊の壁に囲まれた部屋は湿っぽく、薄暗い。六畳ほどの部屋にはこの藁の寝床と、卓子と、書簡が詰まれた棚に、簡素な背のない丸椅子、茶褐色の瓶だけでありとても質素な様子だつた。子琳にとつては全く身にも頭にも覚えのない場所である。栓で固定されわずかに開いた木窓からは、ほのかに明るい外からの光が差し込み、ぽたぽたと地面を叩く雨音が聞こえる。

頭を軽く搔いて、どうして自分がこんなところにいるのか、目を覚ます前のおぼろげた記憶を拳を頬に当てながら辿つてみた。

あの場所に降り立つたあと、街が燃えていて……知らない男達に捕らえられて……青い光が森に落ちて……その後の記憶がない。  
そうか、あの微恍よがいを見て気を失ったのか。

今思い出しても心が震える。なんと美しい光景であったことだろう。龍も起こせると言われるが、あの規模となると自然の偶然に頼るしかない。つらうらと記憶を掘り起こして、かの美景に浸つていると、突然目の前の立て付けの悪そうな木戸が軋む音をたてて開いた。ひょつと驚いて子琳は少し構える。

「あ、気がついたのか」

入ってきたのは赤黒い皮甲よねぎを纏つた盛壯な青年。子琳を認めると、

すかずかと部屋に入り、瓶に入った水を柄杓を用いて皿そつに飲みだして、それを子琳にも勧めた。

「飲むか？」

子琳は俯いたまま首を横に振る。喉は渴いていたが、知らない男にいきなり水を勧められて、そんなに易々と飲むわけにはいかない。男は、そうか、と言うと水を欠けた椀に汲み机に置いた。

「毒なんて入つてないさ。うまいぞ、今朝麓の湧き水から汲んできただんだ」

それでも拒む子琳を見て男は訝しそうに首を傾げた。

「大丈夫、何にもしやしない。その証拠にちゃんと床に寝かしてもらつてたどろ、寝心地はあまりよくないけどな」

男はグラグラと揺れる丸椅子にどつしりと座ると、椀に入った水をガブガブと飲んで、脇に携えた剣を卓子に置いた。

すると、青年は急に顔を暗くして目を据えた。

「建恭の件は残念だつたな。だがな安心しろ、仇は必ず俺達が討つ

「……建恭？」

子琳は思わず聞き直してしまった。

不思議そうな顔をする少年を見て、男もまた不思議そうな顔をした。

「お前、建恭の民だろう。道端に倒れてた所を瀑吾様に助けられたつて聞いたぞ。助けられたのは……えーっと、お前と、あと女の子だつたかな」

瀑吾という名前を聞いてあの恐ろしい目が頭にちらついた。あの美しい光景が搔き消されてしまいそうな眼光、蛇に睨まれた蛙の気持ちがわかりそうだつた。

しかしながら何か誤解されているらしい。建恭という名前はどこかで聞いた事があるような気がするが、状況を考慮すると、おそらくあの燃えていた街の名の事言つているのだろう。

「いや、僕は」

と、言おうとしたら、男はその大きな手を子琳の頭に置いて宥める  
よひよひ

「言ひな、建恭であつたことは聞かん。惨い話を子供に言わせるわけにはいけないからな」

完全に青年は自分をその建恭の人間と思つてゐるようだ。

しかし、この男が瀑吾から聞いたといふ事は、瀑吾がわざと自分の事を伏せているのだろうか。

自分を龍だと言つのも憚られるので、この偽りの設定に合わせた方がよさそうだ、と子琳は判断し、コクリと頷く。男は頭をぶつきらぼうに撫でながら卓子にきちんと置まれて置かれた子琳の服をチラリと見た。

山吹色の絹の装束。あれだけ吹き付けられた血はすでにどこにも見あたらなかつた。

「お前、商人の伴せがれか？それとも、偷兒ヒツジか？」

青年が疑うのも無理はない。

絹の衣服など普通に暮らしている庶民が簡単に手に入るものではなく、極限られた層の人間しか纏う事は許されない。金持ちでなければ、盗むくらいしか手に入らないだろう。当時は絹一反で家族が一年食い扶持に困らないぐらいの価値があつた。

「父は……建恭で塩商と蚕績を営んでいました」

とつさに思いついた嘘の設定を言つた。と言つてもどこかで聞いた誰かの肩書をそのまま受け売つただけであるが。塩商とは、塩を作り売るることを生業とする商人のことだ、国によつては政治に口出しできるほどの権力と財力をもつ。蚕績とはそのまま、蚕を飼い、その繭から絹糸を紡ぐ職だ。

「へえ凄いな。ところで名乗つてなかつたな。俺は瀑？様の下で衛え士いしをやつてる趙駿ちょうしゅん、字は廉毅れんぎっていうんだ。廉毅って呼んでくれ。

それで、お前は……子琳だつけ

名は伏せていなかつたようだ。確かに、龍かどうかはこの名前から  
は分からぬ。龍には一つ名があり、それならば龍とわかるかもし  
れないが。子琳はとりあえず頷いておいた。

「実はな、少しの間だがお前を世話するよつ瀑？様から仰せつかつ  
たんだ」

「世話？」

「わうだ。と言つてもこからどにもいかないよつ見張つていろつ  
てことなんだがな」

要するに、逃がさないよつに見張りをつけたとこつことだらう。な  
らば指輪がないのも、逃げないために取り上げたと、想像がつく。

「こひは、どこなんですか」

「高鮮の山城だ。……まあ、教えても差支えないだらう。建恭が成  
軍によつて陥落してな、瀑？様は当面の対成軍の最前線拠点として  
この高鮮を選んで、今は近隣の城からの援軍を待つてゐるんだ」

子琳に嫌なものが過る。

「ここも……建恭みたいに」

だが廉毅は軽く笑つてこれを否定した。

「安心しろ。この前、成のやつらに俺達が大打撃を与えてやつたか  
ら、そんな簡単にここは落ちないや。しかも守将はあるの瀑？様だ。  
知つてるだろ？瀑？様が籠つて落ちた城なんて一個もねえ。まあ…  
…今日はしうがなかつたんだがな」

子琳は、熱く語る廉毅の瀑？に対する信頼を感じ取つた。そこで、  
少しでも情報を聞き出せようと建恭の臣になりきつた気持ちで少し熱  
っぽく、

「しうがなかつたつてどういふことですかー？」

と、演技の怒りをぶつけてみた。廉毅は少したじろぎ、

「……うん、まあここだけの話なんだが、実はな……  
と、辺りを見回して小声で話そつとしたところ、

「駿しゅん！喋しゃべりすぎだぞ」

快活な声が土間の入り口から響いた。その瞬間廉毅は顔をぴしゃりと歪めて、急いで立ちあがると入口に向かつて恭しく拱手する。廉毅に隠れて見えないが、子琳には声を聞いてすぐにわかった。

「ばくあ？」  
暴ばくあ？だ。

子琳の体は一瞬にして硬直した。

飛龍乗雲 『?』（後書き）

櫛？：虎に似た体に人の頭を持っており、猪のような長い牙と、長い尻尾を持っている。尊大かつ頑固な性格で、荒野の中を好き勝手に暴れ回り、戦う時は退却することを知らずに死ぬまで戦う。

偷児：こそどる、すり

瀑？は幾人かの従者を戸口に控えてこの狭い部屋の中に入ってきた。片手に剣を持ち、いつでも危急に対応できるような武装をしている。廉毅はと言えば、緊張した面持ちで慌てて戸棚からできるだけ綺麗な碗を選び、水を汲んで瀑？の前の卓子にそっと置いた。

廉毅は裏返つた声で平謝りし、瀑？の視線を遮つてるとわかるとそそくさと脇に避けた。一方、瀑？は立つたまま、床に座つて俯く子琳を見据え、一呼吸置くと不似合いな微笑を浮かべた。そして子琳に向かつて言つ。

「無事で何よりだ。日が落ちたら私の幕営に來い、話がある」  
そう言つと、さつわと羽織つた朱の褐衣を翻し部屋から出て行つて  
しまつた。

子琳はぽかんと口を開けて瀑？の背を見送り、そのまま視線を廉毅に向けた。廉毅はふうと溜息をついて汗を拭っている。よほど恐縮していたようだ。

「あの威圧感には毎度肝を冷やされるよ」  
そう言いながら碗の水をぐびっと飲み干した。

頃合いを見計らつて廉毅に皆の中を見せてもらひことになつた。先ほどまで降つていった雨は止み、雲の隙間からは陽の白光が差し込んで緑と褐色の大地を温かく照らしている。地面は水で濡れ、建物の軒先からは溜まつた雨水が滴つていた。子琳は雨後のひんやりした空氣と景色が好きだつた。

外に出て初めて土間の外観がわかつた。さつきまでいた廉毅の部

屋は兵舎の一 部分で、外から見ると兵舎は土造の長屋が湾曲したような形をしており、それと同じものがもう一つ正面に立ち並んで間に広場を形成していた。広場には井戸と薄汚れた白い天幕が張つてあつて、その中で幾人かの人人が盤を囲み真剣な顔をして碁をしている。

廉毅曰く自分の部屋を持てるのは一定以上の位をもつ人間か、将を守る衛士くらいだと言う。確かに、普通ならば何人も的人が狭い宿舎、悪ければ天幕に鮓詰め状態で雑魚寝だろう。自分だけのものが与えられるというのはかなり贅沢なことなのだ。子琳もそれはなんとなくわかつていた。

砦内を順繰りして見回つていると、やけに子琳達に視線が突き刺さる。童じどもが宿营地にいるのは珍しいことではない。子琳ぐらいの年格好の者でも戦地に赴く輩もいる。ほとんどは後方など本戦に関わらない場所に回されるか、士官の雑事の世話。もしくは周辺の村から物売りに来たりして當内を徘徊している童もいる。

だが、兵士達は子琳と廉毅を見るなりひそひそと囁いていた。兵舎に溜まっていた中の一人がこちらに向かつて嘲笑めいた声をあげた。

「おーい、廉毅。お前瀑?<sup>がき</sup>様に童子のお守を任せられたんだって? 大変だな、はつは」

「嫁さんもまだだってのに氣の毒なこつた」

廉毅はこれらの冷やかしに対して苦虫を噛み潰したような渋面で、軽く手で払つた。すると違う方からも、

「あの瀑?<sup>がき</sup>様がまさか童子じどもを連れてくるなんてなあ、なんかの前触れじやねえのか」

「いやいや、あの餓鬼は瀑?<sup>がき</sup>様の遠戚らしいぜ」

「違うな、娼婦との間にできた隠ひれし子じやねえのか」

「ほんとかよ」

勝手な噂が着々と出来上がっているらしい。廉毅は渋面ながらも

子琳に教えるように言つ。

「氣にするな。みんな戦まで誰かの噂でもしてなきや暇で仕方ないんだ。いずれ俺からみんなに言つとくからさ」

子琳は複雑な気分で廉毅の後をついていった。

子琳は初めて砦というものの内部を見た。人が命を懸けてこの砦に籠り、外部からの敵に抗う、壁。だが子琳はあまり美しいものだとは思わなかつた。見回つてみてわかつたのだが、「冗談を言うほどの余裕のあるものは全体の極一部なのだ。ほとんどの者は建恭陥落の報を受け、修羅のような形相、または怯え緊張している様子だつた。

砦は堅牢と呼ぶに相応しい。牢<sup>らう</sup>斎<sup>さい</sup>山<sup>さん</sup>から連なる山々の谷間の斜面に築かれた高鮮砦は、彰の平原へと繋がる谷間の道路のほとんどを塞いでいた。背後に絶壁の断崖を構え、前方は川が横断する台地を望む。地の利によつて川を越え斜面を登つてきた敵に対して有利に戦えるのである。砦は建恭までとはいかないが大体3丈（この時代では約5メートル40センチ）ほどの高さの城牆に囲まれ、何重にも木の柵がその周りを囲む。そして砦の櫓からは成の広大な領土を眺めることができた。そして山の麓には味方と思われる軍団が彰旗を掲げ陣を張つてゐる。

子琳はとりあえず、瀑？の意に従う事にした。目を盗んで逃げ出そうとしたところで今の子琳の足で逃げられる距離などたかが知れているし、指輪を返して貰わなければ人を墮とすことも臘術も使えない。不服ではあるがどちらにしろ従うしかないのだ。そのうち隙を見て指輪を奪うか、他の龍が助けてくれるだろうとかをくくつており、子琳の中では徐々に樂観的な部分が多数を占めてきていた。

廉毅は見せられないという場所を除いてお願いすれば大抵の場所は見せてくれた。その一つ、練兵場に差し掛かるとしたところ、そこから喝采が起こつた。何事かと廉毅と顔を見合わせ覗いてみたところ、人の群がりの中に大弓だいきゅうより少し小さい小型の弓ゆみを引き絞る少女の姿があつた。子琳よりも少し年上といつくらいか。少女が見つめる先は遠く離れた射侯まど。

ぴりりとした緊張が辺りに張り詰め、少女が弦を離した瞬間、矢はふわりと宙で弧を描き射侯にぶすりと刺さつた。そしてまた喝采が起きる。

「嬢ちゃん、すごいな」

少女は無邪気に喜ぶ表情など見せず、まるで当たり前かのような顔をして結った髪をかき上げた。

「私、もっと練習して成のやつらをみんなやつつけやるの」

「その意気だ、感心だねえ」

兵士達は少女を煽ててやまない。三つ並んだ射侯には全部矢が刺さつている。

少女は呆然と立っている子琳の方をちらりと見ると、弓を置いて子琳の方へ近づいてきた。まだ幼さの残る顔には小さな傷が幾つかあるが、子琳から見ても比較的可愛らしい出で立ちをしている。

廉毅はそつと子琳に耳打ちした。

「あの子がさつき言ってた、子琳と一緒に瀑？様がここに来る道中で助けた女の子だ。えつと……」

「瓊凜よ、よろしくね」

瓊凜は透き通るような瞳で子琳を観察するように見下げる。子琳は少しだじりいで、廉毅の衣服の裾を掴む。子琳は少し人見知りの気があり、どうにもずいづい迫られるのに慣れてはいない。すると、瓊凜は目立つような声で子琳に言った。

「あなたのお父様も建恭で塩商と蚕績を営んでいたらしいわね。奇遇ね私もなの」

子琳はもつとたじろいだ。

**飛龍乗雲** 『?』(後書き)

褐衣・衣服などのかおり、肩にかけて首で結ぶマントのよつなもの。

子琳の体はいつのまにか廉毅の脚の裏に半分隠れていた。

もし、瓊凜に塩商の詳しいことを聞かれても答えられるわけないし、そもそも相手が建恭内でそんな商売敵を知らないはずがない。問い合わせられれば、言い逃れる自信はなかった。

それを察したのかどうなのか、廉毅が顎を撫でながら瓊凜に尋ねる。「もしかして君たちはお互いを知ってるのか？」

子琳はもちろん知るわけがない。一方、瓊凜はどこかシンとしながらこれに答えた。

「いいえ、知らないわ。ただ、もう一人助けられたって聞いてね、気になつて少し話を聞かせてもらつただけよ」

ビタやうせつべきいた部屋のどこかから聞かれていたらしい。

「それで、あなた 子琳だけ。私、建恭で他に塩商を営んでいた商人がいるなんて聞いたことがないんだけど、それって本当のかしら？」

ここで嘘がばれたらおそらく面倒くさいことになるだらう、と子琳は直感した。嘘を真実として取り繕うのにまた嘘を塗り固めていくのはあまり賢いことではないことぐらいわかっているのだが、その時の子琳はぐらりと嘘を塗り固めていくほうに搖らいでしまう。

「僕は……えつと、そう。最近建恭に移ってきたばかりで、その……多分あんまり知られてはない……みたい」

ふつんと、瓊凜は疑うように子琳を見つめる。その見つめる目は泣きはらしたのか少し赤い。

「まあいいわ。そうね……」人間が多いから少し歩きましょ

瓊凜はそう言つと竦んでいる子琳の小さな手を引いて、砦の高台に向かつて歩き出した。強く握りしめる手は、弓弦を引いたばかり

で少し熱っぽい。子琳は戸惑いながらも引かれるままに、この少女の後についてゆく。一瞬困ったような顔をした廉毅も少し距離を置いてこの一人についていった。

「……あなたも両親を亡くしたの？」

高台にある廐うまやへ至る坂を登りながら、瓊凜は尋ねた。それは、同情しているようであり、そうなのだろうという風な口ぶりであった。子琳は迷いつつ静かに頷く。罪悪感が心をふつとすり抜けた。

すると瓊凜は麓に広がる大地を見やる。ここからは遙か遠くにある成の城と思われる褐色の城壁まで視認できた。

「そう……残念ね。私もなの。城から逃げてる途中でね、運悪く成軍の奴らに捕まって財産を洗いざらい奪われて、拳句に殺されちゃつたの。」

瓊凜は空に呟くように言つた。子琳は静かに相槌を打つた。

「私は運よく物陰に隠れてたんだけど……目の前でね。お父様はとても厳格な人だったの。それはもう立派な人物ひとだった。でも、その時のお父様は莫迦みたいに命乞いしてたの。あんな姿見たことなかつたし、見たくなかった。側に兄妹とお母様いたし、必死だつたんだろうけど」

子琳は首で相槌をしたまま目を伏せた。

「でも、あれだけ命乞いをしたのに、成軍やつじはその場で家族と下人みんな斬り殺したの。家畜でも殺すように、笑いながら。何かしたわけでもないのに、何もしていらないのに。……絶対に許せない。それで誓つたの、絶対に復讐するって」

はきはきと喋りながら、瓊凜の顔はいつのまにか紅潮していた。子琳からは瓊凜の顔は見えない。でも、その心情は察することができた。龍は人の心に感じやすい。直接触れていれば尚更だ。その感情が龍の心情にも影響するのである。

「……いきなりこんな話で、『ごめんな』でも、どうしても誰かに言いたかつたの。こんなところで話せるような人もいないし……」

子琳の首は次第に落ちてゆく。瓊凜は寂しかったのだろう。同郷にいる人間で助かったのは今のところ自分と、この瓊凜だけあり他人には誰もいない。そう、一緒に痛みを分かち合える同じ境遇の人間がいるということがどれだけ励みになるか、それは計り知れない。それが偽りであるなら、自分はこの少女に残酷な嘘をついているといふことになりはしないだろうか。嘘をついたことで、この少女に虚構の希望を与えてしまったのではないだろうか。後悔と罪悪感が子琳の心に圧し掛かる。

元をただせば、どうしてこんな嘘をつかなければならなかつたのだろう。何をかばつっているのだろう。子琳はだんだん自分のしていることがわからなくなってきた。

「……あなたも憎いでしょ？ 成軍が」

「……」

子琳は黙つた。確かにそんなことをする奴らなんて憎まれて当然であるが、子琳には元々関係のないことだし、もちろんそんな憎しみはない。だが、彼女は　　そうだ、憎いといつ返答を欲しているのが痛いほどわかつた。

「うん……憎い」

それを聞いて瓊凜の顔に少し明るさが戻つた。対照的に子琳の表情は曇つてゆく。

「やつぱりそうよね。だから今、少しでも戦えるよう』の練習をしている。陸将軍（瀑？の名）に助けてもらつたのは天の加護だわ、これは戦えつてことよ、さつとやつ」

喜々として話す瓊凜はやはり女の子、まだあどけない可愛げがあった。だがそしてゆく内に、子琳の心の奥底にもふつふつと伝達

した怒りが湧き上がつてくるような気がした。

子琳の心の尖端

を少し焦がすような。

「子琳も、男なんだから戦わなきや」

瓊凜は子琳の手をより強く握った。

「でも……僕は」

「戦わないの？」

と言われても、子琳にとつては誰の為に、何の為に戦うのか理由がないのだ。ただ巻き込まれただけ。それでは戦うといっても、簡単に折れる刃で敵に向かうようなもの。

「……」

「そう、子琳はまだ子供だからわからないのね」

そう言う瓊凜も傍から見れば立派な子供ではないか。と、思つたと  
ころで廉毅が慌てて一人を呼びとめた。

「そこから先は行かんほうがいい。実はな……妖獸がいるんだ」

「妖獸……！」

妖獸とは？獸とほとんど意味的には同じである。違いは、元が人  
か人でないか。妖獸は主に人語を解する獸のことであり、？獸は人  
が墮ちた姿のことである。だが、妖獸と同じ姿になることもあるた  
め、判別がし難い。なので、同じ意味として使われることが多いの  
である。

「俺もあんまり詳しくは知らないんだが、瀑？様が手なずけている  
妖獸があの辺りに繋がれているんだよ。下手したら子供なんて簡単  
に喰われてしまうからな、そこにや近づかないことだ」

少し渋つてから、あと少しで廐の屋根が見えるといつとこりで二人  
は踵<sup>きびす</sup>を返した。その後も瓊凜に弓を習つた方がいいとか、なよな  
よしていて男らしくないとか散々言われ、ついには兵舎前に来ると  
手伝いがあると言つてどこかへ行つてしまつた。

それを見送ると、子琳と廉毅がほぼ同時にふうと大きな溜息をつく。

「気の強い嬢ちゃんだな。こりゃ子琳もつかつかしてらんないぞ。

剣なら俺が見てやれるから練習するか？」

子琳は丁重に断る。

すでに、西口は淡い朱を帯び始めていた。

瀑？の幕喰は皆の一一番見晴らしのいい高台にある。昏い夕闇の中、瀑？は従者を解散させ、木門をくぐつて簡素な石段を登つた。その先には皆の中でひと際目立つ、朱の甍が葺かれた一層の楼閣があり、その一階は灯燭の明りが煌々と室内を照らして、ほの暗い。楼閣の周りには彰の国色である朱に染まつた幡、旗幟が幾つも立ち並び、重厚な威儀を放っていた。その中では、膝丈ほどどの陣卓子を六人の甲冑を着込んだ男達が囮んで布帛に描かれた陣図をじいと睨み、唸りながら談議している。

「状況は」  
上座に座るなり、瀑？が左の者に問う。  
「事態の好転はありません。ですが、斥候からの報告では成軍は建恭一帯から退却したようです」  
「やはりな」

瀑？は手を組んで顎を乗せた。  
「激恍が落ち、あの周辺には当分？獸が蔓延っていますから、行軍するには危険と判断したのでしょうか。……不幸中の幸いですな。そのまま侵攻されていたらと思つと」

瀑？は陣図に目を落とした。成から彰へ入るには凡そ五つの街道がある。もし彰の領土に侵寇するならば、王都へ至る最短の道である。

り戦略的要である建恭一帯を押さえることが最善の策といえる。しかしこれが不可能になつたならば次の最短の道はこの高鮮を通る道である。残りは険しい牢斎山の谷間を通る棧道か、難攻不落と言われる南方の鬼蓮関を通りしかない。それでは多大な損害を被ることは避けられない。東璃の平定を旗印に掲げ大軍を興した成が、そうやすやすと侵攻を取りやめるわけもない。ならば、順次的に考えるところの高鮮が次の標的になることは明白である。暴？が微恍それを見して高鮮に退却したわけではないが、結果的に主戦場が建恭から高鮮に移ることにはなつた。しかし、要衝高鮮といえども状況は依然劣勢である。

「韓泰、寿桑付近に伏せておいた私の兵を高鮮に呼び戻せ。補強に当てる」

「御意」

寿桑は建恭から西方へ進んだ先にある城邑である。成軍がそのまま進軍した時の時間稼ぎの為に伏せておいたのだ。現在、寿桑は邑民の小規模な反乱が起き守軍の備えが万全ではない、そのため急遽暴？が行つたものである。この件が今回の成軍の興軍に繋がつたかは不明であるが、それを臭わす情報は暴？の耳には幾つか入つていった。しかし軍隊ですらない邑民の反乱が国軍の機能を妨げているというのは、彰の国力の衰微を露わにしていると言つて差し支えない。常備軍が役に立たないと判断し、暴？自らの兵を割いて投じたのは仕方のないことであった。だが國からしてみれば瑣末なこととしか思えないこの小規模な反乱がのちに新たな火種になることは誰も予想はしていなかつたであろう。

「不騎、成軍の新たな情報は」

今度は右手に座し、左目に藍色の眼帯を巻き珍しい茶の眉をした細身の男に問う。不騎は暴？陣営の帷帳の臣として、情報収集や敵方工作を主な仕事としている。竹馬の友として長年共に戦場を駆け回

つた瀑？の信頼は篤い。

「敵軍は凡そ五万五千、それを率いるのは昨年將軍職に就いたばかりの魏素というものと判明しました。建恭を陥落させたのもこの魏素です。しかし、この人物に関しての情報は今のところほとんどありますん」

それを見て、燭台の明りの陰影に髭面の男の歯が浮かんだ。

「瀑？様が不在だったとはいって、建恭は莫迦でも一月は守れる城だ。魏素という奴、なかなか才があるのかもしだんな」

「その莫迦が大莫迦だったのかしれんぞ」

「はつはつは、そうかもしだんな」

ひときわでかい団体の匡鉄が豪快な笑い声をあげ、匡鉄の隣に座るものも口を揃えてその通りだと笑った。だが瀑？の眉間に皺が寄っている。

「建恭の民はみなその莫迦と心中した。部下も大勢犬死した。笑えんぞ、匡鉄」

「……すまん」

瀑？の悔恨こもった言葉に場の空気を感じ取った匡鉄はしゅんとしてその大口を閉じた。

元々、建恭の守備を任せられたのは瀑？であった。だが、途中何らかの作為あつてか王命により王都に呼び戻され、その間代理守備を任せられたのが瀑？陣嘗と異なる吳乾という中央から派遣された貴族の人物であつた。吳乾の傘下に組み込まれた部下達はこそつて、「敵の情報が掴めていない、援軍を待つてここは敵の出方を窺う為に籠城すべき」と宣べたが、貴族出の為か功を焦つてか吳乾は「成軍は軟弱だと聞いている。先の戦でも成を散々打ち破つたではないか。何を恐れる必要がある」と城を出ての交戦を決断。しかし結果は建恭陥落、瀑？の部下も死に物狂いに戦つた末討ちとられ、吳乾本人は逃走しようとしたところ捕縛され拷問の拳句に縊殺、そのま

ま城門に吊るされた。

「年は」

「風貌から三十ほどかと」

「私と年端は同じか。しかし、経歴が不明なのは妙だな。兵卒からの抜擢か」

成は実力主義として諸国に知られている。武功をあげれば、それだけ出世できるし、能力があれば抜擢されることもある。それを考えれば、戦歴について情報がなくとも納得はできる。だが、いきなりこの規模の大軍を率いるのは合点がいかない。城ごと焼いて皆殺しにするということはよほど彰に對して憎しみでもあるのだろうか。どこか今回の成軍は今までと違つ妙な違和感がある。と成軍と幾度も対峙してきている瀑？と不騎ら列席の軍長達はどこか感じていた。

「やつかいだな……」

そして一瞬場に沈黙が流れた。

「瀑？様……」

と、声を発したのは、末席にいる衛夏えいかという中部隊の長。衛夏は、瀑？に能力を見いだされてその麾下まいかに就くことになった元農民の所謂兵卒上がりであった。まだ若いが瀑？陣営の中核を担う部将である。

「黄起殿と孔淵殿の姿が見えませんが」

衛夏は辺りをちらりと見て言つ。

「……一人は死んだ」

「そんなん……誰に！？」

瀑？と韓泰、匡鉄は目を閉じ俯いて重苦しい息を吐いた。黄起も孔淵も瀑？陣営の中核を担う部将である。本来ならばこの談議に参列しているはずだった。

「成との戦闘で」

不騎が気を利かせて言いかけたところで瀑？が、もういいと遮った。

「……龍を擒える途中、反撃に合つて死んだ。黄起が墮ち、？獣になつて孔淵を喰い殺した。それを私が斬つた」

衛夏は驚いたのか、椅子から立ち上がり血相を変えて叫ぶ。

「龍を擒える！？何故です！？ただでさえ、味方が死んだというのに……まさか、皆知つていたのですか？」

この中で、事を知らないのは衛夏だけであつた。他の者はいたつて冷静である。

「残念だが、大業には犠牲がつきものだ。彼等は彰の為に死んだ」「瀑？は冷めた目で卓上のただ一点だけを見つめている。

「將軍、あなたは何をしようとしているのですか！？」

衛夏の瀑？を見つめる田には厳しさと共に焦燥も含まれていた。

その時、頃合いを見計らつたのよう戸の向こうから、参りました」という見張りの甲高い声が上がる。

通せ、と瀑？が言うと、戸が開き外から同伴者と共に小さな少年が怯えた様子で中に入ってきた。衛夏は何事かとその幼気な少年をそのままの厳しい目で見つめる。

「つ、連れて参りました……」

廉毅が拱手し汗を滲のように垂らしながら恐々と言つ。

「駿、お前は兵舎に戻つていい。それと、人払いを頼む」

「か、かしこまりました」

廉毅は恭しく了解すると、些細に不思議がる仕草をしながら外へ出て行つた。戸を閉め、少しすると辺りの物音が聞こえなくなつた。暗澹たる静寂の中に流れる圧迫された間、子琳の渴いた喉がなる。すると、突然瀑？並びに衛夏以外の部将は地に片膝を付け、手を組んで敬仰の礼をとつた。立つたまま睡然とする衛夏も悟つたのか慌てて地に片膝をついて、この少年に首を垂れた。

そして、瀑？があの快活な声量をもつて怯える子琳に告げる。

「先ずは、非礼を謹んでお詫び申し上げる」

子琳はこれにどう対応してよいのかわからず、うつむいた。敬礼してなお逼迫し、威圧めたこの集団に若干の恐れを抱いた。龍は人よりも生き物である。龍と人には決定的な境界があり、超えてはならぬ神聖さがあった。それはいつ流布したのか遙か古来からの決まり事であり、滅多に市井の人間と交わるものではないというのが常識である。だが、離龍であるはずの子琳にはそういう扱われ方にはどうにも抵抗感があった。恥ずかしいというか、自分にそこまで価値があるとは思っていないようである。

「頭をあげてください……」

そこで彼らはやっと首をあげた。

「龍よ、我らに助力していただきたい。彰国を常道に正し、ひいては戴邦の安寧の為に」

薄ら闇の中、瀑？の鋭い眼は鈍い朱光を帯びていた。

飛龍乗雲 『?』（後書き）

> . 1 1 3 5 0 0 — 1 8 9 0 <

帷幄の臣・参謀

縊殺：首を吊つて殺すこと

麾下：大将に直接命令される部下

戴邦の安寧は無論、離龍は勿論のこと誰もが心のどこかで望むことであつたのである。だが、理想の先の先にその平和はあつた。この混迷した時代に、泰平という概念は絵空事のようなものでしかなかつた。瀑はくあ?もそれをわかつて言つていた。

少し、離龍について述べる。

離龍とは字の通り、龍の雛のことである。

天に近いところに龍があり、離龍がいる。それはこの戴邦では誰もが知るところであつた。離龍はこちらで想像されている大蛇のような猛々しいものとは違ひ、この寰宇せかいでは手足があり、顔や肢体もその辺りで駆け回って遊ぶ童とほとんど変わりはない。ただ、離龍は共通して人目に止まるほどの整つた顔立ちをしているようであり、幼さ特有の愛らしさも生来持つている。それを目的に愛寵の為に欲した権力者もいたといふことだから、人心を惹く魅力を有していることは確かのようだ。しかも、年をとらないのである。

龍は、戴邦のほぼ中央から少しそれた場所ふそうに位置する險峻の神山じやさん姑射山じやさんの頂にある扶桑ふそうと呼ばれる神木にやどるようにして建てられた宮に住まうと言われている。そこでは瓊樹けいじゆという極彩色の玉じへきさいじょくぎょくを枝実に結ぶ木々が繁茂はんもし、人々が俗世よのきよをすっかり忘れるような金殿玉樓きんでんぎょくろうが立ち並んで、この世の美術と技巧を極めたような煌びやかな宝飾・絵画と言葉をなくすような情景で溢れている、と半ば想像が混じつた噂諺として巷で語り継がれているのだ。そこを人々は畿禁城ききんじょう、または龍陽宮りゆうようぐうと呼ぶ。憧苑しょうえんがあるとするならばまさに畿禁の龍陽宮である、一生に一度は訪れてみたい、と世の識者や権力者、思想家、果ては平民まで願つてやまないのである。

そして、龍の出生については謎が多い。

ある者は、龍陽宮にある人丈ほどの大玉から生まれると云う。そしてある者は、戴邦に龍が降邦し、よさそうな童を見つけて攫い、その童を雛龍にするのだと云う。伝説については数多ありどれも信憑性に欠けるのだが、しかし地域によつてはそれが真であると信じられているところもある。要するに、誰も本当の龍の出生についてはわからないのである。そのあやふやな想像の余地が更に龍の神秘性に拍車をかけた。

「……でも、僕はあなた方のお役に立てるようなことは何もできません」

子琳の薄紅の唇は小刻みに震え、それに伴つて口をつく言葉も震えた。

実際、この言葉は逃げ口上だつたし、この恐ろしい集団の役に自分が立てるとも思つていなかつた。そして、このような扱いを受けたのは龍として久しぶりだつた。

薄汚れた木綿の衣服を纏つた少年に頭を垂れる屈強な武人、そのおかしな光景がいかにあり得ないことが、この室内の一時は重々わかつていたことだろう。瀑？は拝礼を解いてすつと立ちあがると断言する。

「いや、できる。我が下にいるだけでいい」

先に子琳は龍を人間同士の揉め事に使うのをあまり聞いた事がない、と述べた。だが実際は、彼等が知らない　書面にも残らないところで行われていることもあつた。少なくとも龍は自分達を中道だと考えている。ほとんどの龍は戦があつても干渉する気もないし、政にも大して興味はない　一つの物事として興味をもつならば別だが。戦が好きでも嫌いでもなく、戦をする人間を軽蔑することもない。それが当たり前であるからだ。

龍は子琳のようどこか人の俗世に客観的であり、たまに物見遊さんで覗きに来る傍観者という風な気持ちがあった。つまり、雛龍とは好奇心の赴くままに大地を遨遊する童じよぶつであるのだ。ならば、なぜ龍は争いに使われることがあるのか。

古代より九軍（王軍）が龍？を御旗に掲げていることからもわかるように、龍とは正統の象徴であるといつ慣習が昔からあった。つまり、龍を擁するものが正義・正統であるといつ半ば暗黙と化した慣例が存在しているのである。暴？が主君に対し反旗を翻すつもりであるならば、少々反則ではあるが龍を擁しているという大義名分が何より必要であった。無論、龍は故意で誰かにつくといつ真似はしない。大抵が捕えられたり、弱みを握られたりすることによる。龍を捕えたのがばれれば、捕えたものの威信を失墜するのは勿論のこと、それは即ち死を意味した。

「将軍！…」

声をあげたのは成り行きを黙つて見ていた衛夏。

「やはり謀反を起こすつもりだったのですか！？」

衛夏は昂つた呼吸をして問いつける。暴？の目は微動だにせず衛夏へと向いていた。

「そうだ。彰がこのまま滅ぶのをただ見ていろといふのか」

そして横から宥めるように不騎が言う。

「衛夏、落ちつけ。お前に話していなかつたのは悪かつた。まだこれを話す段階ではなかつたのだ」

と、諭す不騎の面持ちは真摯の中にも和やかさがあり、言葉の聴きざわりがやわらかく滑らかであった。それだけで、この男のこの集団における役割を子琳は感じた。

「いや、私が信用ならなかつたのでしょうか」

衛夏は腰にさげた剣に手を添える素振りをした。

「信用していないわけではない。見ろ、お前は熱しやすい。事が熟していない段階でお前に打ち明けては、大魚が眼前の虫を狙いあまつて自ら水面に波紋を立て、釣人に存在を気付かれてしまつうこと。それを危惧したのだ」

「衛夏の向かいにいる蘇甲<sup>そじゆう</sup>が、言葉に毒を含ませて言う。蘇甲は姓を董<sup>とう</sup>とする名門士族の出自で、瀑?<sup>の</sup>の遠戚にあたる男である。先の成との戦において個人で首級二十をあげ、大いに名をあげた部将である。

「私が皆の足を引っ張ると言つのか!? いつ私が足を引っ張つた。

蘇甲殿、聞き捨てならん」

そして、衛夏が剣に手をかけようとした瞬間、瀑?<sup>の</sup>のあの透くような快声が飛ぶ。

「静まれ!! お前に信が置けぬなら最初からこの場には呼ばなかつた。衛夏、わかつてくれ。お前はまだ若い、国と矛を交えるのは確かに謀反と思うかもしれない。だが、彰の領土が穢され、奸臣の横暴で民がこのまま餓えてゆくのが果たして彰の民の為なのか。否、今こそ我ら忠臣が決起して奸臣を取り除きこの国難を救う事こそが國家の為であると私は思う、どうだ」

衛夏は剣を掴んだまま、蘇甲と瀑?<sup>の</sup>の両方を比べるように見た。

「今は仲間内で争っている場合ではない。勿論、衛夏も我々の密約を知ったのだから一心同体。共に大事の為に働いてもらつ。もし、異議があるならば……この場で斬るまでだ」

瀑?<sup>の</sup>の目がきつと締まつた。元から瀑?<sup>の</sup>を慕っていた衛夏も何か含みを持ちながらも、拱手しこれに同意した。だが、衛夏の脳裏には瑣末な疑心という闇が残ることになった。

そして、奥の廟に羊の肉と酒などの供物を備えると、皆は廟に向かって拝礼し、彰の為に結束することを改めて誓つた。子琳は廟の

側に座らされて、一緒に挙げてお祈りを受けた。戴邦での廟とは、祖先を祭るものと、土地の神々を祭るもの、そして龍を祭るものがある。大抵は一緒くたになつていて、彰という国は特に龍廟を重んじたことで有名である。時の王が領内各地に龍廟を建て、その住人に守をさせ毎年祭らせていた。

しかし同じ室内にいるのに、だんだん子琳はこの共同体化している集団から蚊帳の外のような疎外感を感じた。子供が遊びの輪に入れなくてうずうずしているような、ほんの些細な。

しかし 、と挙げてお祈りは言ひ。

「まず我々は眼前の國難を取り除かねばならない」

「瀑？」が卓子を叩いて皆に言い聞かせる。諸将はこれに深く頷いた。

「この高鮮を突破されれば、成は彰領内になだれ込み、建恭での凄惨な悲劇が国内中に広がる恐れがある。国力が疲弊している彰軍ではこれを止めるは不可能。さらにはそれに乘じて周辺諸国が禿鷹の如く彰の領地を巻き取つてゆく」とは明白。「これはこの国の興亡の戦である」

だが子琳は「瀑？」の言葉に漠然とした疑問を抱いた。真っ当な矛盾点である。元から疑問を持つことにいじりしさを感じる質の子琳は、思わず口を開いた。

「あの……」

一段高くなつた廟の横に座り、勇氣を振り絞つて「瀑？」の背に向かつてよわよわしい声をあげた。

「そうだ、龍公（龍に対してもう敬称）を忘れていた。何か聞きたいことがあればここで述べるがいい」

これに皆が笑う。

「子琳、でいいです。あ……の、とてもどうでもいいことなのですが、謀反を起こして軍を興せば内乱状態になつて、今の話を聞いているとそれで、国が滅ぶんじゃないでしょうか」

といふにいひの噛みながらもやつと言えた。といふが、場が一気に静まってしまう。

「確かに」

と、衛夏は頷く。

「今は内乱を起こしている余裕もないはず。揉め事を起しそばそれだけで他国に呑みこまれるのでは」

「……だから、龍がいる」

「暴？は子琳を一警する。

「子琳に顯龍王を廻され、新王を擁立する」

聞かなければよかつたと子琳は酷く後悔した。

この男は、一体どんな了見があつて、龍にそんな危険な事を犯させようとするのだろう。龍に取つて大事な戒指（指輪）と臂環（腕輪）を取り上げて脅したとしても、離龍がそんななんの益もない命懸けの謀に頷くと本当に思つてゐるのか。そんな義理が何処にある。この男に対し、恐怖以外に落胆と憤りが心に沸々と浮かびだした。

「そんなことが本当に可能なのでしょうか……！？」

韓泰かんたいだけでなく、他の者までもが不安を表情に滲ませている。不騎だけが割と涼しい顔をしているところを見ると、この男だけがこの謀を知つていたようだ。

「例え王を潰せたとしても代わりの王なんてどこにいるんだ。有能そうな嫡流はみんなあの糞野郎のせいで他国へ逃げたか、殺されちまっているぞ」

匡鉄が喋るときはいつも口から飛沫が飛ぶ。

「そうだ。殿は王を挿げ替えれば、宮中の奸臣共を一掃できると考えていらっしゃるようだが、国内にいる王族は皆あの者の息がかかっているか、怯えて何もできないだろう」

「やるならばここは一旦息のかかっていない者を代王に立てて

「いや、ここには殿に一旦王位に就いていただくのが」

「それは難しい。国民の期待がそこまで高まつてはいない」

議論が再熱した。どうやら、察するに彰の内部では匡鉄の云う“糞野郎”が專制を敷いていよいよ聞こえた。しかし新参（無理やりだが）の子琳には、所々彰の状況がよくわからない。それどころか、自分が何をさせられるのかもよくわからない。そして子琳ありきの計画のはずなのに、頭ごなしに物事が議論されていては、何を

強要されるかわかつたものではない。そんなことがあっていいものかと、出来る限り自分に有利に運ぶため議論にできるだけ割り込もうと身を前に乗り出した。

「ちょっと……」

もちろん、この蚊の鳴くような声は皆の耳には入らない。だが、瀑音がすっと右手を上げて議論を止めた。

「龍が弔される」

また一気に場が静まった。子琳の白い頬が熱氣と緊張で熟れた桃のように赤く染まる。一応、そんな大したことではないのですが、と小さい声で前置きをしておいた。

「え……、その、僕は何をさせられ、いや　何をするんでしょうが」

瀑？に皆の視線が集まる。何を言つかによつては、子琳はきっとぱり断ろうと心に決めた。一国の王を墮とすなど、前代未聞である。別に誰かに咎められるところわけではないのだが、褒められる」とではないし、むしろ世間の龍に対する見方が変わることを恐れた。謀略の道具として龍が存在すると思われてはたまつたものではない。さらに、王を墮とした龍として名が残るのも嫌だつた。

しかし、瀑？の口から出た言葉は完全に子琳の予想外のことであつた。少し溜めるような間をおき、緊張して白く細い手足が杖棒のようく硬直する子琳をゆっくりとなぞる様に一瞥した。

「あらゆる手を考えたが、この策しか思いつかなかつた

「……」

「王の寵愛を受けてくれないだろ？か

「……！？」

「寵愛！？」

驚愕の為か動搖の為か、それを聞いて子琳の口が、顎が外れたかのようにぱっかりと開けたままになってしまい、断る言葉を忘れた。そして、次第にこの男の考えている事がうつすらと読めてきた。一方で卓を囲むものは瀑？の策案に、頷いたり首を傾げたりしている。

中国においては、古代より王や帝が女色だけでなく男色を嗜むといつ習慣 男寵が当然のことのようにあった。無論、戴邦もその習慣を色濃く受けている。現在でも断袖や龍陽君などの様々な代名詞があり、昔から中国では美少年や美青年を好む男寵は女を愛するのと同じく当たり前のものとなっていたのである。日本にもその文化は唐などに留学していた僧侶などによつてもたらされて広く伝播し、男寵は先進的なものとされていた。しかし、年を経て容貌が衰えた愛寵の末路は悲惨なものが多い。なので、年を取らない離寵を寵愛しようつという輩が出るのである。

「王の住まう後宮は我々部外者が易々と侵入することは不可能だ」

王は基本的に宮廷の中にある後宮に住まい、后や女官などとともに家庭的な生活をそこで送る。政治は主に後宮とは別の施設である朝堂などで行い、そこで諸官と面して國の方針を議論をした上で、軍を興したり政令などを布告するのである。勿論、國家の最高権力者が住まう施設である為警備は厳重であり、信頼されている者しか出入りはできない。だが、王の田掛けを受けたものや寵されるものは別である。

「子琳。王がそなたを寵愛すれば、隙をついて王を陥とすことができるやもしれん」

「なるほど。こいつの面なら王も気に入りそうだ」

匡鉄はからかうよつた田で子琳を見てくる。しかし、子琳にはたまつたものではない。

「ま、ま、待ってください。どうして僕がそんなことを！？」

思わず身を乗り出して問うた。瀑？の田は真剣そのものである。

「理由は三つある。まず一つ、王は前年、目掛けっていた少年を病で亡くしている」

「……」

「二つ、王は暗殺されたのではなく、墮ちたという状況がこちらにとつて望ましい」

「どうですか」

「突然の王の崩御は国の混乱を招くんだ。しかも暗殺だとわかれれば犯人探しで一層それは酷くなる。しかし、王が墮ちたとなればあの慣例が効いてくる」

不騎が子琳の問い合わせに対して優しい口調で補足する。

「そうだ。王が墮ちると、一旦国<sup>てんわい</sup>が所有する剣璽<sup>けんじ</sup>を龍に預けるという典例<sup>てんれい</sup>が昔からある」

子琳も聞いたことがある。龍は中道とされているためか、王が儂<sup>きみ</sup>に墮ちた際に限り、国の権力象徴とも言える剣と璽を預かり、新たな相応しい相続者が現れるまでこれを預かるという。その間、国の政治機能は停止し、相や官のみで最低限の政治を行うことになつていて。しかも、不思議な事に新たな王が玉座に坐る前に、その国を他の国が攻めると、必ず攻めた国に天変地異が起こり大きな被害を出した。それがわかっている為か、どこの国もその間だけは領土を一寸も掠めないのである。つまりこの現象を逆手に取れば、困窮する彰はその間に攻められず、さらに国を建てなおす猶予<sup>ゆよ</sup>も発生するのである。ちなみにこれを、国預<sup>こくよ</sup>といふ。

「その典例に従い、王が墮ちた際、子琳に一旦国を預かってもらいたい。その間に我々が司馬氏に繋がりのない新たな王を玉座につける」

「そして子琳殿が我々の推す王に剣璽を譲渡すれば、司馬鋼<sup>しばこう</sup>殿もただ指を咥えているだけで手出しきはできないでしょう」

「司馬……鋼？」

「ああ、司馬鋼といつのは、彰国の丞相じゅうこう。我らが顯童王が寵愛する奸臣のことや。司馬氏一派のせいに政治はまともに機能していない」「富廷に巢食う害虫だ。あいつらは今の王をどうから担ぎあげて権力を握り、我がもの顔で專制を敷いてやがる糞野郎だ」厚く膨らんだ唇から唾を飛ばしながら匡鉄は、口元とばかりにその“糞野郎”を罵る言葉を並べた。

しかし、なんとも強引な話である。確かに、龍は国を預かることがあるが、その慣例を謀略に、まして自分を使うところのは。だが、なんとなく彰の情勢が読めてきた。要するに、王の寵臣である司馬鋼という人物が宮中で権勢を振つて彰を衰退させており、それを取り除くために、現王を“無関係な”雛龍を使って墮とし、新たに王を据えようと瀑？達は今思案していることであろう。

「三つ、これは最も大事な理由だ」

「……」

「そなたならやつてくれると信じていることだ

瀑？がまた、作ったような似合わない微笑を子琳に向けた。しかし、この笑みに不自然さを子琳は感じなかつた。

「そんな、僕は……！」

こんな事を言われてどんな表情をしていいのかわからない。まだ会つて日も浅いものを信じるなどと、この男は本気で言つているのか。期待を掛けるという婉曲な脅しだと最初は思つた。だが、子琳は微かに感じ取る。この男は本気で言つていると。しかし、と瀑？が遮つた。

「最初から無理な請いだといつのは承知している。決断は日を待つてからでいい。それまではこの間に過ぐられるがよからず

「でも……！」

そして子琳が、とにかく戒指ねいじを返して欲しい、と言つか言づまいかに悩んで音のこもつた口を開けようとしたとき、幕営の外から甲冑

を激しく揺らす音が聞こえた。

「報！報！」

階段を駆け上ってきた兵は肩を揺らして呼吸をしながら、の前に片膝をついて、申し上げます、と乾燥してへばりついたのど奥を無理矢理に震わすよう叫んだ。

「どうした！？」

戸を開めたまま瀑？は兵に問う。

「成軍が丘に布陣していた高策将軍に夜襲を仕掛けました！…」

「して、高将軍は！？」

「乱戦の中で討ち取られ、兵は散り散りに離散したこと！…そして成軍は川を越え、丘を占拠。籠は成の旗と松明で埋め尽くされています！」

瀑？はそれを聞くと、ゆっくりと首を伏せ、大きく溜息を吐いた。

「あの場所が取られただと……！」

そう言うと、何かに引っ張られるようにすりくと立ち上がり、戸を殴る様に開け放つて、籠が見渡せる望櫓に向かっていった。不騎らも動搖した様子で、慌てて瀑？の後を追う。

上座に取り残された子琳も、しばらくどうじよつか悩んだあと、なんだか様子を見てみたくなり、層楼の一階へと伸びる小さな梯子を慌てて登つた。そして、わずかに届く手摺に顎を乗せて眼下に広がる薄暗い平野を俯瞰した。

見渡す限りの地平線に枠取られた空一面には、綺羅星きらほしが光彩陸離さかいろりと輝き、地では廟の芳かくわしい焼香の香りが山風に乗つて広がる。秋の冷たい風が音を出して空を切り、子琳の白紅の頬に当たつた。層楼の真下には望楼から平野を呆然と眺める瀑？が見える。その下には、先ほどいた兵舎が見える。さらにその下には一條の路が平野へ伸び、そのもつと下には川を背にし土肌が露わになつた小高い丘がある。

そこには、幾つもの松明の火が整然と並び、闇に浮かぶ旗をくつきりと際立させていた。

あの丘で……。

あの小高い丘で、戦鬪があつた。そんなに遠くない、あの丘で。そう思うと、恐怖で背筋がゾクゾクした。あの時、あの山から見ていた建恭という城は対岸の火事でいられた。傍観者でいられた。だが、今は違う。目の前に敵が来ている。同じただ眺めているだけなのに、こうも違うのものかと思った。と同時に、建恭に籠つていた人々の心境が痛いほどわかつた。

やがて、子琳は火照った頬を冷ますように小さく溜めた息を吐いた。

飛龍乗雲 『?』（後書き）

剣璽：剣と玉璽。いずれも国の宝物。玉璽は勅命を出す際に使用される。

丞相：官の最高位。今で言う総理大臣に当たるが、国によって役職名や職務、権限が異なる。

登場人物（）内は字

子琳	陸炎（瀑？）
瓊凜	趙駿（廉毅）
韓泰（麗其）	公孫良（不騎）
匡鉄（公嘉）	羊華（衙夏）
董堅（蘇甲）	司馬鋼（周戰）

司馬鋼（周戰）

大王！。

「大王、なぜわたくしめを建恭の任から解かれたのか、お聞かせ願いたい！！」

「控えよ！！王の御前であるぞ。陸將軍、そなたが他国と通じておると胸中で噂となつているのを存じて居るか」

玉座にちんと坐る顯龍王の側には丞相である司馬鋼が常にまとわりついている。腐臭のする権力に群がる蠅、瀑？はいつもそう捉えていた。腹と首元に纏つた脂肉を搖らし、窪んだ目をいつもぎょろぎょろ動かして上から瀑？を盼む。瀑？には非常にそれが不快で仕方なかつた。

「存ぜぬ。我が陸氏は昂龍王（彰の始祖）の時代から代々彰に仕え、その社稷を支えてきた。國に忠を夙くし、武門の士として國難に殉ずる覚悟は生まれた時からとうにもつてている。それは武功として大王も知つておられる筈。それを他国と内通しているだのという噂を信ずるなど、王の近くに法螺吹きがいるとしか思えませぬ」

瀑？殿 。

司馬鋼は少し丁寧に名を呼び、弛んだ腹を少し持ち上げた。

「功と忠は別だ。他国には一將軍の身分でりながら王を篡弑する為にと功を立て続け、ついには玉座を篡奪し王位に就いた者もいるというではないか。功で忠を示すのは、逆に言えば功で忠を見せかけられるという事だ。今の陸將軍とてそうでないとは言い切れないだろう、違うか」

「それでは功を立てれば疑われるということではないか。ならばどうやって国を拡げ、衛るというのでしょうか」

そういうことを言つておるのではない、と司馬鋼は三段も高い場所から瀑？を見下した。

「つまり陸將軍は、功を立て過ぎておるといつのだ」

「そうか、と瀑？はこの偉そうな豚を心の中で家畜の如く侮蔑した。

「抜きんでた功は、王の威を震め、周囲に疑念を持たせてしまうこともあるといつことだ。だからこんな貴君を妬むような噂が流れる。勿論、私は將軍が謀<sup>そのよくなこと</sup>反をするなど思つておらんがね」

黄ばんだ歯をみせ王と瀑？を見比べてから不気味な笑みを浮かべた。

「余も周戦（司馬鋼の字）に同意である。そなたの忠節はよくよく聞き及んでいるが、そなたへの雜言も聞く。少しの暇と思つて此度は前線から外れてくれぬか

「瀑？にとつて煌びやかな玉座に坐るこの王はすでに木像傀儡に等しかつた。奸臣司馬鋼に国内の政治をほとんど委ね、自身は後宮で遊興に耽つている。国を自身の遊樂で滅ぼそうとしているというのが酷く瀑？の怒りを呼び起こし、しかもそれに気付いていないと言うのがさらなる憎悪を抱かせることになった。この場で死を覚悟して諫言してもよいのだが、もつといい方法がある、と自分に言い聞かせることで激情を肚裏<sup>とこ</sup>に詰め込んだ。

王が言つのだ。拒否すれば反逆となる。臓腑が煮えたぎるような感情を押さえながらも、冷静さを取り戻そつと瀑？は必死に歯を食いしばった。

「……代わりは誰に」

怒りで言つのが精一杯だった。

「吳乾殿をすでに向かわせた。相手は昨年陸將軍が壊滅させた成だ。將軍が出る幕もなかろう」

吳乾？　聞いたことがない。瀑？はそれが誰かを問うた。

「吳氏の長兄で文武両道の傑物だ。なに、陸炎殿もすぐに纏<sup>くわい</sup>を並べることになるだろつて」

「莫迦な、吳氏は文官の家系だ。しかも、しかも吳氏は同馬氏と蜜月ではないか」

「黙れ！－！疑いを不問にしてやるということ、儂にありぬことを言つて泥を塗る氣か？もうよい、下がれ！－！」

瀑？は熱い息を吐くと、怯える田舎が居並ぶ朝堂を辞した。

建恭陥落寸前の急報はその三日後に王都に届き、急遽瀑？が援軍に向かうこととなつた。それは籠る城民の事を思えば不幸中の幸いとも思えなかつた。

瀑？の思考は、この眼下に広がる致命的な状況を見て、若干の停止を必要とした。

籠城とは、味方の援軍を期待して行うものである。強大な敵に囲まれ、兵力的に敵わない時に、城という物理的優位施設に籠り時間を稼ぐのだ。援軍が期待できない場合の籠城は味方の士気喪失へと繋がり、兵糧等の食糧問題も含めると、よほどの覚悟をもつていないと兵士の反乱、城民の離反が起こり、最終的には指揮者が殺され開城となるのが常である。

高鮮かんさいという砦は、山間にある為か関塞とも言える構造を有しており、人の往来もあることで城壁の内側には約3000戸の城民がそこに住んでいる。だが、砦から街へは山壁に造られた棧道のような城牆を伝つていくか、外の路を通るしか行けない特殊な構造をしていた。よつて、戦時中の城民は外敵からの攻撃を砦が盾となつて直接は受けない。この特殊な構造は、外敵に専念できるという点で瀑？の憂いからは消えた。

援軍は建恭への行路に陥落の報を受け、すでに使者を向かわせ要請してあつた。あまりにも陥落が早いことによる成軍の強勢、さらに建恭と言つ重要な場所を奪われたことによる危機的状況を即座に

察知したからである。しかし、中央は派兵を済っていた。瀑？には大方の予想がついている。保身の為に中央付近の兵を地方へ割きたくないのと、不本意ながら任じた瀑？がこれ以上力をつけるのを恐れているというのだ。外敵よりも眼前の権力にすがりつくという、愚行。だが、今の瀑？にはそんなことは頭から抜け、この状況を開することしか考えることができなかつた。

「高策殿が夜襲の警戒を怠つたとは思えません。構えも私が見た限りでは隙はなかつたはずです」

冷静な不騎が珍しく動搖している。不騎の言つ通りだと思った。高策は兵理に明るく、慎重な性格の男であり、そのような誤りをしてかす人間ではなかつた。だから、余計に今回の成軍の不自然な強さが際立ち、成軍の全貌を不明瞭なものとしていた。

取られたこの段丘の名を、桂丘けいきゅうといつ。名の通り桂の木々が生い茂る小高い丘である。桂丘は、路から離れた場所にある。戦略的に、籠城する側に余裕があれば、少し離れた争地そうち（孫子でいう先に取ると有利な地）等に陣を敷き、情報収集や敵が集中できないように兵力を分散させ、同時に威圧するという策戦がある。瀑？はそれを行い、成軍の出鼻を挫くつもりであつたが、頓挫してしまつた。

なぜこうも容易く敗れたのか。

瀑？の頭の中ではこの問い合わせ反復を繰り返し、次第に混迷していつた。原因がわからなければ手の打ちようがなく、情報戦においても不利とならざるを負えないのである。

そして、風向きが変わるような温い感触を瀑？は感じ取つた。

「拙い、兵士に動搖が広がつてゐる」

瀑？は、兵士の士氣や高揚、動搖の些細な変化を直感的に感じとる

能力があつた。能力と言つても、それは経験による後天的なものであり、子琳の他者の感情を感じる能力とは別のものである。それに経験による予想と本能的な直感が付隨し正確性が格段に向上した。それは将たるものとしては、類まれなる資質であると言えるだろう。その直感が、皆全体の雰囲気が変化したことを知らせた。

「殿！！」

望楼の真下から声がする。瀑？は何事かと問うた。

「逃げ戻ってきた高将軍の兵がこちらに参りました！――」

「桂丘で何があつた、申せ！」

兵士の背には痛々しく矢が刺さり、憔悴しきつた様子だった。

「も、申し上げます。敵軍に司<sup>じ</sup>臈<sup>じゆ</sup>がおります――臈術に翻弄され、仲間は皆殺されました」

司臯。

その源流は方士ほうしであると云われる。

方士とは古代中国において神仙の術を体得した者、方術行使する者ことを指し、道士とも云われていた。そして方士は長生きや不老不死の為に、神仙に纏まつわるものを探査したり、魂を招くための祈禱を行ったり、仙薬などを作り用いたという。思想的には老莊の思想に近いようだ。

戦国時代から漢にかけて、現在の山東省や河北省などで方士といわれる職業集団があり、王やその他権力者に自らの不老不死の仙薬や術を売り込んだりして生活を営み、果てはその信頼を得て側近になつたものもいた。権力者は不老長寿という言葉に弱かつたのである。

金も名誉も地位も手に入れた権力者が最終的に渴望、盲信したのは不死の技術であった。そういう権力者の慾望があつてか、眞偽はさておき方士という職業が成り立つてゐるのである。かの現実主義者と言っていた始皇帝も晩年になるとある方士を信じて、金銀財宝を持たせて靈薬を探しにいかせたと史記にあるほどだ。

しかし、様々な経緯を経てか戴邦ではその名を変え、実際に方士じゅうが探求していった仙術のようなものを使うようになった。司臯とは臯じゅうを司つかさどると読む。国によつては司臯は官職名であつたりし、国政軍事の重要な任に就いているところもある。また、司臯は臯士じゅうじとも呼ぶ。

戴邦という土壤は臯術を育んだ。それが何故だかはわからない。

土地のせいか、龍がいるからか。人々もそれが当たり前になつた今、その疑問の根底を浚うようなことはしなかつたし、思いつきもしなかつた。いつ生まれたのかわからない臘術は、時の中で河川のように本流から枝分かれを繰り広げ、あるいは諸子百家などの学派の思想と結びつき、また昇華され、無数の流派が生まれた。そしていろいろな分野に転用され、いつしか軍事に用いられるようになる。

龍も臘術を使う。身を守るためとも言われるがその理由は定かではない。ただ、龍はそのまま使えるが雛龍は戒指を媒介にしないと臘術は使えない。しかし、臘術を行使できる人は媒介を必要としない。その不可思議な理を調べる学者は戴邦でも数多いが、雛龍に遭遇する確率があまりに低い為、調査のしようがなく、結局は伝聞による根拠が多いので真実性は薄い。一般的に臘士になるものは、天から授かる先天的なものか、修行や覺醒するなど後天的なものにわけられるのだが、それはまた後述する。

その『臘術』というものであるが、大きく分けた分野、種類がいくつかあり、総称として臘術と言われている。例えば軍事に用いられるのは、だいたいは精神高揚など人の心理に作用するものか、敵を攪乱する類のものが多く、稀に兵士の増強などの術がある。それらすべてを臘術と呼び、戴邦ではこの臘術を司る司臘が戦の勝敗を決することがよくあるのだ。

「詳しく申せ」

瀑？は望楼を降りると、片膝を折つて兵士に向かい合つた。兵士は言つ。

「私は高將軍の身辺を警護していました。高將軍は陣の守りを固め、いつでも事に挑めるよう配下と陣中を見回っていたのですが、その時突然東の方で火の手があがり、成軍が背面の崖を越え雪崩れ込ん

できたのです

「司皇は」

「瀑？はそのことを聞きたいようだつた。

「司皇本人は見ていません……。ですが、あ、あれは司皇の術です

「あれとは何だ！？」

「敵が飛んでいたのです」

「飛ぶ？」

「はい、白い煙を帶びた敵兵士が畠を歩いているのを見ました。仙人のようにです。そのあと崖から現れた兵士と共に天から火矢を射下ろされ、上と後ろを取られた味方は総崩れとなりまして、混戦の中将軍は敵の襲撃に遭い……」

酷く動搖しているのか、この兵士は呂律が悪く、といひどい言が支離滅裂であつた。

「確かに飛んでいたのだな

「は、はい」

瀑？はそれを聞いて納得したのか、兵士に休息を取らせて宿舎に帰した。

「不騎、この話が真実だとすれば問題だな」

不騎はそうですね、と顎に手を添えた。

「これでは城壁、守備が全くの無意味ということです。そうなると上も警戒せねばなりませんので、我々にとつては不利になります。ですが、この奇策が通用するのは一度だけです。一度目はありますん」

確かに、と瀑？は頷いた。

「敵が飛んでるのなら、鳥を狩るみたいに矢で射落としてしまえばいいじゃねえか」

匡鉄には何が問題だ、と言わんばかりのことであるよつだつた。

一里ある、が……。

瀑？には何かが引っかかるつてゐようだつた。

「敵が司臈を従えているなどという情報は全くなかった。建恭の時もそのような情報は入っていない。捕虜に問いただしても、司臈といつ言葉は一つも出なかつた。何故だ」

「情報統制で隠していた……と？」

「奇襲の為に温存しておいたとは推測できるが、何故今司臈を出した？何故本陣でもない、弧墨じゆしやくの夜襲に使つた？もし、我々がこのまま知らなければここは陥落していたかもしれないのだぞ」

「そこまでして桂丘が欲しかつた、か、あるいはまだ何かある……」

「どうか」

不騎は顎を押さえたまま考え込んだ。彼は考え事をするとそのままの姿勢で無意識に没頭する癖があつた。

瀑？は松明が星のよしに無数に輝く桂丘を俯瞰ふかんする。彰の為、大志の為、領内の民の為、自分の為、様々なことがこの一戦の勝敗に掛かっていた。どうしても勝たなくてはならない、という決意と共に湧き出た情熱が秋風で冷えた体を熱くしてゆく。それは他の諸将も同じであった。息は微かに白い。鎧の冷たさが体中を身震いさせる。それは武者震いと言つていい。小さな振動が、大きな野望を震わせる。

聞け！

「直ちに城牆に『』兵を増員、弩を増配置し対空に備えよ。そして斥候を派遣し、敵陣の様子を探れ！韓泰、明日の夜は兵糧を少し多く兵士に配分してやつてくれ。城民の慰労も忘れるな」

諸将は了解すると、散る様に各々の持ち場へ戻つて行つた。

そして、瀑？は不騎だけを呼んだ。

「良（不騎の名）、もしもの時はわかっているな」

不騎は少し悲しそうな顔をしてから、こつくりと頷いた。

「離龍は、必ず」

瀑？は楼から顔を出す子琳に気付いたのか、ちらりと見やつた。子

琳は慌てて首を引っ込めて、手摺に頭をぶつけた。

「蝶蘭”も、頼む」

わかりました、ですが、と不騎は言ひつ。

「そうならない為に私がいるのです。勝ちましよう、まだ殿にはやつてもらわなければならぬことが山積しております。ここで死なれでは困ります」

そうだな、と瀑？は小さく笑んだ。

しばらくして、城内の空氣は火のような熱を帯び始めた。そして、相対する桂丘からは夜遅くまで成軍の歓呼の声が静かな闇に響いていた。

翌朝、甲冑を纏つたまま剣を携え寝所で仮眠をとっていた瀑？の耳に驚くべき情報が舞い込んだ。

「援軍が参りました！！門前で待つておられます」

門前とは、彰領内側の門である。瀑？は素早く身を起こし、久々の朗報に安堵した。

「どなたが参られた？」

「大司臯殿です」

「大司臯？」

少し頭が醒めていない瀑？は繰り返し尋ねてしまつた。瀑？が何かの間違いかと思うのも

無理はない。大司臯とは中央の官職名であり、国内の司臯を束ねる長官である。国政に参与し、司臯として軍事にも関わるなど、その仕事は多岐に渡る。もちろん中央での仕事が主なので滅多に前線へなどは出向かない。その彰の現在の大司臯の任に預かるのは、氷越ひょうえつという若い男であった。

## 東衛の火薬 西征の虎狼 〈？〉

瀑？は簡単な身支度を整え、衙門の前で大司臯 氷越が入城するのを待つた。

旭日はまだ淡い靄がかつた山の稜線に引っ掛かり完全には登り切つていない。その為、山間の城内には早朝の冷たい空気が立ち込め、そして谷間に差し込むほのかに温かい曙光が砦内の至る所で立ち昇る炊煙に色をつけ浮かび上がる。

従者と共に黄土色の門前で待つ瀑？の表情は喜びから次第に不安の色を滲ませ始めた。

大司臯は瀑？の将軍職の階級よりも無論上位である。瀑？の現在の位は国の第三軍の大将。大司臯は中央の高級官位、それを上回るのは軍事の全権を預かる大將軍ぐらいとなる。ちなみに春秋戦国時代の一軍は12500人。当時の大国となれば大体三軍まで有することができるが、三軍で動員できるのは最大でも45000ぐらいとなる。それ以上は難しかった。

この頃の軍団の巨大化ができなかつたのは、当時の諸侯が宗主である周王朝を尊重しており、また国々の人口が大軍団を編成できるほどに達しておらず、武器に使用される鉄器が量産できなかつた為と言われる。だが周が衰退し戦国時代になると、人口の増加、糧秣・輶重の生産・運搬率の向上、そして武器の量産が可能となり一戦で十万以上の軍を興すこともできるようになった。

しかし、戴邦においては少々異なる。戴邦の軍制は、三軍を基本にしている。と言つても基本に置いているだけであつて人数自体は国によつてまばらで決まりは特にない。だが、三軍をもてる国はそれだけでそれなりの軍事行動ができる国力があるとみなされるので

ある。最大は六軍であり、これを統御できるものは天子、つまり

霸者であると言われる。ちなみに、三軍とは国の上軍、中軍、下軍の三つの総称である。ちなみに彰国では、現在のところ右軍、中軍、左軍（第三軍）とそれぞれ名づけられている。

しかし、三軍というのはほとんどが職業軍人の正規兵で構成されているのが普通であるのだが、結局のところ軍人も人口もそんなにいるわけでもないため、合戦などでは農閑期などに自国の農民などを徴兵しての混雜した編成軍で戦うことが多い。しかも、戴邦は西瀛（中華）ほどの莫大な人口があるので、十万以上の興軍は稀である。

彰は衰退していると言つても現在（辛うじて）三軍を有しており、そしてその将帥が三人いる。それは璃邦（戴四邦の一つ）の人口が豊ということでもあるが、彰という国が諸国に囲まれており、三つの独立した軍でないと守り切れないのである。よつて三軍はそれぞれ各個、將軍の意思で動き柔軟な対応ができるように先々代の彰王が改めた。これは失つた彰の版図回復、拡大、防衛に功を奏したが、反面動き回る毒蛇を好き勝手に這いまわらせてていると言つてもよく、次代の王に懷疑心を持たせることに繋がつた。

門には先に数十人の薄紫の刺繡が施された旌旗<sup>せいき</sup>を持つた従者が入り、左右に分かれて主の車を待ちかまえた。瀑？は路を塞ぐよう立ち、その男の乗る屋根つきの馬車を見据える。高貴な身分の人間が乗つてているとは思えぬほど質素な外装であった。飾りも何もなく、ただ、屋根があり木枠の窓があるだけである。車夫もそこらで雇つたような出で立ちをしており、豪華なのは身の回りの従者だけであった。

瀑？が氷越に会うのは初めてではない。以前、現王の即位式の時にまたま宮中の廊下ですれ違ったことがある。その時の氷越はま

だ單なる一司臯という身分であった。軽く社交辞令で挨拶をしたが、当時の瀑？の印象では大して取るに足らない人物である、という程度であった。それが今では瀑？の上位に就き、援軍として頼りになければならないのは少々の屈辱を覚えたが、そこは割り切つてあまり考えないよう努めることにした。懸念はもつと別にあった。

「これはこれは、お久しぶりです。將軍。歓迎、痛み入ります」「援軍に参じていただき、真に感謝いたします。大司臯殿」車から降りた氷越は恭しく拱手する瀑？と挨拶を交わし、瀑？の後ろにいる部下にも労を労う言葉をかけた。氷越のまだあどけない笑顔にはなんの不快感も感じられず、時と場にあつた表情が的確に出来る人間であるようであった。

氷越は字を子堯しづかという。出自はよくはわからないが、彰国の西隣の丹國の人という。まだ25と若く、その若さで大司臯の任に就いたのは異例中の異例であった。しかし、司臯としての実力は相当なものようで、彼が出る戦には必ず大部分の影響を与え勝利をもたらした。そして着実に功を積み重ね、権力者である司馬錠にも接近してその地位を確立してゆき、昨年遂に大司臯となつた。国民は外国人間がそんな重要な職に就くのに最初不安を覚えたが、その卓越した手腕と政治力によって次第に国民の心を掌握していくた。

「武装での出迎え、戦時中ゆえお許しいただきたい」

「お気になさらず。私も建恭のことを聞いてなるべく質素にして参りました。私にできることがありましたら、何なりと。私兵を一千ほど城外に待機させておりますので、戦列の端にでも加えてやってください」

「瀑？が驚くほど子堯の口調、態度は丁寧であった。

「私兵を？」

「ええ、中央の兵士は割けないとのことでしたので、私の麾下の兵

を連れてきました。お役に立てるかはわかりませんが、国の大事を  
と思いまして急いで参つたのです」

子堯は厚手の水色の深衣を纏い、長髪を冠で結わざ耳にかけ、紫色の羽根をあしらつた羽扇のようなものを手にもつていた。瀑？の武人らしい顔つきとは異なり、永越は爽やかな美丈夫という風である。

「は、この男を警戒していた。司馬鋼の威を借りて大司臯となつたこの男は勿論、司馬氏陣営の人間であろう。そのような男がわざわざ来たということは、無論理由があると思ったからである。だが、もっと違う何かを瀑？は最初に会つた時から感じていた。それが一番瀑？を不安に駆らせていた。

「大司臯殿の御厚意、感謝いたします。ですが、勝手な兵の行使は王の許可が必要では？」

「すでに王に進上してあります。符も是に」

「ほう。立ち話もなんですから、これから一緒に食事でも。朝食の準備ができております」

「ではお言葉に甘えましょう」

「は桂丘一帯を見渡せる、小さな亭へ子堯を案内した。卓子の上には豆と穀物を煮た汁物<sup>すいぶつ</sup>と近隣で採れた栗などの果物が積んであるだけであった。

子堯は少し嫌な顔をしたが、すぐに表情を取り繕い席に座つた。

「あれが成軍の軍容ですか。中々に難いですね」  
子堯（しきょう）（氷越）はチラリと桂丘を見やつただけで言つた。桂丘には  
昨日まで見受けられなかつた柵せきが立ち並び、壯麗な成の国色である  
緑の旌旗が森のように林立している。山間の風に揺られ、旗は鮮や  
かな縁を射光に映えていた。

「居ますね。司臈が」

「不騎はわざと驚いた風に顔を見合させ、司馬が？」と言つた。  
子堯は軽く羽扇で首元を扇ぐ。

「もういい存じでしょ。あそこには**皇旗**が掲げられてますよ」  
「はつぎ

か

子葬はギッヒリを愛え、瀑?をせんわり睨んだ。

「先ほど先行をせでおりました部下に聞きました。敵軍に司馬が従軍しているのに気付かず、その虚を突かれ守備をされていた高策殿は夜襲を受け、將軍は何もできずに桂丘を奪われたと」

言葉に詰まつた。その通りである。隠すつもりはなかつたが、この男の出方を見る為にあえて伏せておいた。当然、この敗戦は瀑？の落ち度である。

「……援けではなく責めに来られたのか？」

いえ、と子堯は含み笑いを持ちながら否定する。

「誤解していただきたくないのは、將軍を揶揄してあるわけではない」といふことです。將軍は大王……いや、司馬鋼殿の帰還命令によ

つて、もとは万全の態勢で建恭の守備に就くはずだった、しかし急遽王都に召還されました。それでは敵軍にも司馬にも俊敏に対応出来かねましょ。仕方がなかつた……といふことです。高策殿も……建恭の城民には残念ですが

「……の眉が深く、溝を造り、固まつた。不騎が瀑？に冷静でいるよう目配せしたが、石造りの卓子は振り落とされた拳で音をたてる。「……ならばなぜ、止めなかつた。何故あんな小物を要衝の守備に就かせることに何も言わなかつた！！それで建恭は壊滅だ。大司馬ならば王にも諫言できる立場であるうー？」

子堯は、ふつと溜息を吐き、落ちついてください、と諭してもう一度桂丘を見る。瀑？も熱くなつたのを省み、軽く謝辞した。

「言えば、私の首が飛びます。ご存じでしょ、王宮で司馬鋼様に反論できるものなどいないのでよ。王ですら司馬鋼様に気を遣つておられる始末。その後援で今の地位に就いていられる私に何ができるでしょうか」

(……こやつ)

瀑？は落胆すると同時に、少し安堵した。だが、その表情の所々に埋伏したものが見え隠れするのを微かに感じる。あれだけの機略によつて戦勝を挙げた司馬が、司馬氏の権力にただただ怯えるのだろうか。この地位に辿り着くまでに謀略も使つただろう、政敵も排除しただろう。そうしなければこの年で他国からやつてきた後ろ盾もない流浪皇士が大司馬などにはなれない。それらのことから、瀑？は子堯という男を非常に警戒していた。その程度、と思つていてもその警戒は解かない。

それに、と子堯は雪のよつた白紅の頬を摩る。

「はつきり申しますれば、將軍が守備に就いておられて勝てたかどうか」というと、若干の疑問が残ります」

「……ほつ、私よりも適任がいると申されるか」

「將軍の守備戦における指揮能力に関しては天下でも比類なき才であることは私もお認めしております。実際、建恭陥落の報を受けてから対成戦における総大将に強く瀑？殿を推したのもこの私です。私個人としましても、將軍には以前から並々ならぬ敬意を抱いておりますし。ですが、此度の敵軍を見ていると、瀑？殿を相当研究なされた様子」

「……私を、研究？」

彼が答えるまでの一瞬の間のさなか、白衣の侍女が両者の飲器にうす濁りの酒を注ぐ。亭の前面にこじんまりと拵えられた庭園の小池には、幾羽かの小鳥が舞い降りて水浴びを愉しみ、懷疑に細まる瀑？の視界の端を小さく騒がした。

「敵総大将は確か、魏素あいそといいましたか。字は季讓きじょう。彼は元、彰の朗令ろうれい（城の門番。戴邦では一般にこの名で呼ばれる）の職に就いていた兵士でした。列記とした彰人です。謹厳実直で朴訥ぼくのつ、全く問題もなく仕事に就いていたのですが、何かの悶着もんじやくあってか突然上司を殺害して逐電し、そのまま数年諸国を放浪したあと隣国の成に仕官したこと」

よくそんな情報を。

傍らに立つ不騎は聞こえぬよう小声で呟いたが、子堯は聞こえているふうであった。

「成に友人がいましてね。その方から手簡てがみが参りました。もちろんそれなりの報酬は払いましたよ。時に情報はこの時代において百金にも勝るもので、でじょう不騎殿」

その通りです、と不騎は苦虫を噛み潰したような顔でこれに答える。それでは情報戦でも負ける、と言いたげな言動に不騎は少々の不快を覚えた。

「とは言つたものの、魏素の軍指揮傾向は未だよく分かりません。何しろ、理由不明の急な抜擢で戦場での出陣回数も数回程度。まあ、建恭を難なく落としていますので、間違いではないようですが。あとは、先の対成戦で副将の近衛をしていました程度です」

「いたのか、あの戦いに！？」

「瀑？は戸惑いを孕んだ様子で口を挟んだ。

「ええ。生存しているところを見ると主戦場にはいなかつたようですね。……あれは死人の多い戦でしたから」

「……」

「建恭での廬殺おうせつはやはり……その戦の怨恨でしょう。子堯殿が司臈を務められた、あの」

「そのようです」

言つのも憚られるように述べる不騎とは対照的に、子堯は意にも介さぬという非常に清々とした表情をしている。

「敵もこの首が欲しくて堪らないでしょう。何せ……私の術で成軍二万が屍となりましたから」

歯を見せ微笑する子堯は、その戦で大司臈への地位を確立した。

4年前、彰は強大となりつつあった成を討伐するため、連合軍の盟主となつて兵馬三万を成国境へ進軍させた。総大將は丞相、司馬鋼の子ていば司馬肩しばげん。司臈に当時名を広めつつあった子堯が任命された。成軍は丁圃ていばという当時成の三名将と呼ばれていた老将に精銳約二万五千を預けこれに当たらせたが、子堯の臈術によって成軍は壊乱しほとんどが戦場で死亡。彰軍はそのまま進軍し城を三個奪う大勝を挙げたが、ほどなく連合軍の内部亀裂によつて連合は崩壊、さらには司馬肩と子堯も別の戦場へと移つていて駐留軍に不在であったため、その機に乗じた丁圃の反抗によつて取つた城は悉く奪われてしまい、

逆に国境を押し上げられる結果となつた。

その後、丁圃は多数の死者を出した敗戦の責を負つて自殺。そしてこの戦は成人に深い憎しみを植え付ける形となる。そして、成は数年の富國強兵策で勢力を盛り返し、今、五万以上の大軍をもつて東璃の平定に乗り出した。ちなみに暴？はこの戦には別方面の国境守備をしており参戦はしていない。

「ならば、子堯殿が研究されるはずではないのか」

「無論されといらっしゃるでしょうが、暴？殿は特に」「何故だ」

「……噂ではあります、魏素は暴？殿に何やら特別な感情……言  
うなれば“憧憬”を抱いているらしいのです」

「憧憬？」

「私も半信半疑でしたが、建恭での成軍の攻城隊形と、かの軍容を見  
て悟りました。魏素は暴？殿を知りぬいております」

先にも述べた通り、瀑？の彰国内での功績は目を見張るものがあった。主に防衛戦でその能力を發揮し、領土と領民の盾となつて幾度も外敵を防いだ。その為、国民からの人気も高く、内密に他国からの誘いも何度かあつた。

普通、繁栄した国家が衰退を始めた時は歯止めが効かないものだが、この国は政府中枢が腐敗しても稀有な事に有能な武官が存在しその外殻を辛うじて守っていたのである。歴史を見ても、自分よりも才能・人気のある臣下はその上に立つ権力を握るものにとつて、よく恐怖と嫉妬を生むことになつた。

瀑？はそのような利己的な政治を嫌つて考えないようにして、目前に対し貢物や遜るへりくだようなことを一切しなかつたため司馬氏などの勢力に疎まれることになるのだが、現在の窮乏した国内情勢は遂に國士である瀑？に壮烈な怒りと将来への焦燥を抱かせることになる。そして苦心の末導き出した答えが、王とその取り巻きを排除する為の謀反だった。

会つて一刻（約30分）も経たぬ男に不快からくる苛立ちを覚えていた。何かに見透かされたようなその言い口は、瀑？の自尊心を素手で撫でまわしているかのようである。

そして子堯は、恐縮とは言わないまでも、袖を整え身を正した。

「故に、私は無理を押してここに参つたのでござります。このままでは瀑？殿が“敗北”すると見越しましたので」

なるべく冷静に構えていた瀑？も、険しい面持ちを隠せなくなつた。確かに、援軍を持むほど困窮する状況であるのは事実であり、

自らの足りなさも自覚するものであるのだが、面と向かって敗北すると言われるほど自分が敵に及ばないなどとは思っていない。

「まだ負けると決まったわけではないのに、どうしてそのような事を言つのか」

「瀑？」の睨みは一層厳しくなる。

「先ず、將軍は政治的に不利な立場にござります。國の第一権力である司馬氏と犬猿の仲ですから、援軍の期待は望み薄です。さらに、王都周辺の守備兵もそれゆえ割かれません。そして、周辺の徵發でくる兵員もわずかで、その内わけを見ましても成人にもなつていな子供と老兵ばかりとか。そこで、成との間で兵力差が生まれています。城を盾にしているとはいえ大きな不利の要素です」

「それならば、なぜ子堯殿が國の危機と言つて進言しなかつたのだ」「先ほども申しました通り、不甲斐なくも私にそこまでの力がございません。建恭陥落を受け瀑？殿以外ではこの國は滅びると申し上げてよしやく通つたわけですから」

「ほう……敗北する者を推した、と？」

「ええ。ですがこのままでは、と申しました通り、今は違います」

「何が違う？」

子堯は破顔した。

「私があります。これは完全に敵の想定外です。敵には私の首を家族を質に入れても欲しい輩もいますが、同時に自分を質に入れても私は遭いたくないと思っている輩もいます」

確かに。と側の不騎が呟く。

「いざれ成軍にも氷大司臯の情報は届くでしょう。その時敵が思うことは圧倒的に恐怖であると思います。何せ……」

「そうですね、私は成の領内でその名を出せば子供も泣き止み、大男も妻を残して逃げ出すという噂もあるほどですから」

子堯にとつては非常に面白いことなのだろう、周囲も顧みずにそのまま高い声で笑い出し、それが止むと女性のような小さい咳払いを

した。

「さて、軍の指揮権は依然陸將軍にあります故、私は指示があればその通りに動きましょう。私兵もどうぞお使いください。頼みの援軍は恐らく半月以上かかると思います。敵も短期決着をお望みのようですので、その間に決着はついてしまうでしょうから、現在の兵力が最大とお考え下さい」

「なに……!? この場所の重要性が分かつていないのか!？」

高鮮が落ちれば、後は平野と河川が広がる広大な彰の領内へと雪崩れ込まれることは地理に少しでも精通していれば明白であった。しかも、城民と揉めている城邑も付近にあり、それと迎合されればたちまち戦火は内部に広がり国家は瓦解する。謂わば、建恭と高鮮は彰という国の最終防衛線なのである。

「分かつておいででしきうが、遠い場所での危機より目先の損得を考えるお方ばかりですから……。今の方たちが一番恐れているのは外敵よりも味方の反乱なのです。全く、愚かとしかいよいりません」

その言葉を聞いて瀑?の目の色が少し変わった。

「大司皇殿は國を憂いておられるのか

そうですね、と子堯は空を見つめる。

「憂う、とは違うかもしれません。私はこの国で生まれたわけではありませんので、かつてのこの国がどうだったかなどは伝聞や史料などでしか存じ上げません。私が来た時からこのような状況でしたから、特にそのような感情はございませんし。しかし

「しかし?」

「丞相には私をここまで地位まで推してくださいました大恩があります。ですが、この地位を得てから少々客観的に物事を見ることができるようになったと 思います」

瀑?はそれを子堯の心が揺らいでいると捉えた。

「それでは將軍の軍務に障りますので、私はこれで　ああそうでした、もう一つ。敵軍が攻めよせるのは明日の明朝でしょう。今夜の夜襲はないと想いますよ」

今回の敵軍を見るに、その行軍は神速であった。僅か四日で建恭へ押し寄せ、七日で落とし、その翌々日に高鮮へと先鋒を差し向け桂丘を占拠した。ならば、今回も相手が体勢を整える前に迅速をもつて攻めるのが普通と考える。なので、爆？はそれを見越して兵士に少しどめの飯と弩などの装備を施した。

「理由は？」

「……司臈としての、勘です。耳触りでしたら、お忘れください」

やつして、子堯は従者と共に悠々と木門から出ていった。

東衛の火焔 西征の虎狼 〈？〉

桂丘の崖岸がいがんから、緑の山間に聳える暗灰色の砦を澄んだ目で見つめる男がいた。

太い腕を組み、生やしつぱなしの髪を手に絡ませて何かに耽つてい。足元には高の字が書かれた旌旗せいきが踏みつけられて散乱し、燃え残つた人体の一部が処理されずに土に埋もれていたが、彼の視界には入つてい。背後には代わりに魏の一字が入つた旌旗が林立している。

「李讓、ここにおつたか」

杖をついた老人が男の広い背中に呼び掛けた。彫りこまれた皺の一つ一つが伸縮し表情を作つてゐるが、そこからは笑んでいるのかはわからない。

「おい、李讓」

その李讓は背中を杖で突かれてようやく後ろの人物に気付いた。  
「また奴のことを考えておつたのか」

「いや……それは」

「図星じやな」

「……」

李讓は何かを言おうとしてやめ、口元から顎を大きく摩つた。

「奴はすでに過去の人物じや。今はお前の躍進の踏み台に過ぎん」

「……そうかもしませんが、玄老げんじゆう」

この70近い割に背の張つた老人の名を玄順げんじゅんという。李讓はこの老人に敬意を込めて玄老と呼んでいた。李讓の參謀であり同輩である。

「国から國へ漂つていた無名のお前と出会つてから早五年、ようやくここまで来たのだ。儂の目に狂いはなかつた。お前は稀代の才能

を持つておる。今更何を躊躇う必要がある」

今にも飛び出しそうな目をさらに大きくして、玄順は勇壮な眉を垂らす男を叱咤した。

「このよつな私をここまで教え、補佐していただいたことは、非常に感謝しております。ですが……」

何やら引けた様子の李讓を前にし、見よ、と玄順は杖で桂の木を指した。

「彰の国姓は桂、そしてお前が奪い踏みしめておる地の名も桂（丘）じゃ。偶然か？今や彰もこの老いた桂の樹皮のように縦に割け、様々な箇所で皮が剥離しておる。これを切り倒し、新たな大木を植えるのが我々の天命じや」

指した桂の樹は初冬の為その葉を黄茶にしており、地面に落葉した葉からは独特の甘い香りがした。

「儂はお前に残りの人生を賭したのだ。初めて会つて儂に師事したいと言つたときお前は言つた。あんなみすぼらしい姿で自分に賭けてくれ、と。一笑で付するところであったが、お前の目は誰よりも澄んで野望に盛つていた。もう一度あの目を見せてくれんか。枯れそうになつていた儂にもう一度野心を灯したあの目をな」

李讓は自分を思い出すかのように深く頷いた。

玄順は、縦横家の思想に昏倒したことがあった。自らの弁舌と能力を最大限に駆使して諸国を渡り歩き、天下を大きく動かすのである。小人である自らが人物を補佐して出世させ、自らの理想の世界を実現するために巨大な天下を振り動かすことに最高の悦楽を感じ、その為なら殉じても構わないという人々である。

司臯もある玄順はかつて他国に身を置いていたが、司臯としての役目しか与えられず、作戦立案に口出しはさせてもらえなかつた。少ない俸禄で自らの才能を生かしきれない鬱々とした日々を嘆きな

がら生き、野心に満ち満ちていた若いころに買い込んだ書物を読んでは市井で私塾を開いて軍談や講義を行つて年月を過ごした。そして、老いを悟り、もう野心の火種も燃えつきかけていたところへ、見ず知らずの若い男がいきなり転がり込んできたのである。

「玄老、この大役を完遂することは我々の将来の為、推してくださいました人の為、通らねばいけない道であることは承知しております。しかし、書生として過ごし将来官吏になるつもりでいた私が、数万の兵士を従え今ここに立っているのは、朗令の頃見た勇壮な陸將軍がいてこそであり、今もあの方に憧れ畏怖し目標としてきたのです。今こうして祖先を向けあつてはいる……、それだけで私の目標の半分は達したようなものです……」

辺りには山間から吹く風に乗つて、微かに匂うるさうな炊煙の臭いが立ち込めた。

「どうしたのだ」

「ここへ来て思うのです。あの方を超えたときの自分がどうなるか、想像が付かず、たまらなく恐ろしくなります。士氣を高めるためとはいえ一時の勝利の愉悦に浸り、建恭の民を塵おう（皆殺しに）しましました。その時の自分がいざれ全てを支配して歯止めが効かなくななりとうで酷く怖いのです」

玄順は皺苦茶の顔面を強張らせた。臆病者め、と内心罵つたが、それは言わなかつた。

「阿呆！畜生に墮ちるとでもいうのか？まだ勝つてもおらんのに、勝つた後の心配をしておるなど、愚者のすることじや。儂は負けるとは思つておらんがこのままで勝てるなどとも思つておらん。現にお前に伝えねばならんことがあるから来たのだ

「……」

李譲は幾重にも折曲がった文書を血管が浮き出た老人の手から受け取りその場で広げた。

「内通者から報告があった。氷越があの階しなにある、「  
玄順は李讓がそれを聞いて驚くかと思ったが、この臣けん軀くの持ち主は  
そのまま表情も変えず首だけを上げると、ぽつりと玄順に呟いた。

「攻めるのは明日の朝にしましょ」

茫洋まつようとした人の海原をふわふわと漂つているような不思議な感覚をずっと覚えていた。相いれないものの上で、静かに漂う。いつも天から見下ろしていたその蠢く人間達の海原は、今、蒸氣を噴き出すかのような熱を帶び、渦を作つて、世外せがいの生き物である雛龍を大きな口を開け呑み込もうとしている。

子琳にとってそれは、自分の好きな綺麗なものでもなんでもない、慾望と激情に満ちた禍々しい世界であった。だが、一瞬の刹那の中に時折儂今までの美しさを、この下界の人々は演出する。その魅力にこの幼い龍は、ひどく心を惹かれた。と、同時に知りたがつた。

今こうして、ふわふわと漂つているもある意味いいかもしれない。なにか素敵なもののが見られるかもしれない。いつも、嘶の中にして覗けなかつたこの宇内せかいに……。

子琳しじんは人々の歎声でその目を覚ました。

昨日と同じで、眠つたはずなのにどこか疲れが取れない身体を、寝心地の悪い筵むしゆからいやいや起こし、寝起きでぼやけた視界を手の甲で擦つて木窓から外の様子を眺めた。龍の力の源である腕輪がない為かどうも疲労の回復が遅い。

見ると、人だかりが高台の方にできている。何事かと、寝床横にある木窓から首を出して覗こうとしたところで、入口の木戸が鈍く軋んだ音を立てて開いた。

「起きたか」

陽気な声で飯の入った碗を二つ両手に持ちながら入ってきたのは廉れん

毅だった。

「まったく、あんなところで寝てたら風邪ひいちまうぞ。瀑？様が見つけてわざわざこじまで運んで下せつたんだ。後で会つたら礼ぐらい言つておけよ」

はつと頭を搔きながら辺りを見回した。昨夜はあの景色を見ながら堂の上階で疲れて寝てしまった……ようだ。眠つたかどうかの記憶がほとんどない。あの男がわざわざこじまで運んでくれたのか、と一瞬信じようか考えた。

「で、昨日のはなんの話だつたんだ？」

素手で飯をつまみながら言う廉毅の表情は疲れているのか少し曇っている。曇っているのに声が陽気調なのは廉毅の人物を表しているよに思えた。どういえばいいのか戸惑つていると、

「やっぱり俺なんかが聞いやぢやいけない話だよなあ。わかってるわかつてゐる、言わなくともいいわ」

そういうわけじや、と小声で否定する。やはり他言はしてはいけないことなのだろう。でも、なぜ巻き込まれた自分がそんな遠慮をしなくちゃいけないのかと、内心反問した。廉毅はいい人だと思う。昨日会つたばかりではあるが、それは子琳の感性がそう言つてゐるのと、なんでも聞けば機密じやない限り気さくに答えてくれる素直さからだつた。でも、子琳の心のうちには薄い境界線が未だ引かれたままであり、なんとなく龍として踏み込んではいけない気がした。

すると、また外で歓声が沸き起つた。歓呼三声、三回ほど大きな声が上がつた。がしゃがしゃと金属音もする。

「廉毅さん、外が騒がしいんですけど何かあつたんですか？」

「ああ、援軍に大司臈が来なさつたらしい」

「大司臈？」

子琳は首を小さく傾げた。

「国の一一番偉い司臈だ。本当なら前線なんかに顔出すような人じや

ないんだが、國の大事と私兵を率いて援けにきたらしい。今その前を通つて行つてゐるんで、みんな集まつて歓迎してゐるつてわけさ。おかげで今の士氣はあちらさんと変わらんぐらいに盛り上がつてるよ

「じゃあ、勝てるんですか？」

子琳には軍事のことはよくわからない。司臯といふものは臯士と同じものだといふのは知つていたが、大司臯といふ役職があるということまでは知らなかつた。でも、今までの話を聞いているところの状況が芳しくないことはわかる。

「勝てるかつて言われると、正直微妙だな。これで五分くらいだろう」

廉毅は喋りながらばくばくと口へ飯を運ぶ。

「敵は精強、兵力もあつちが勝つてゐし、なにより要衝を落としたばかりつてのが大きい。勢いに乗つてゐる。対してこつちは負けたばかりで、<sup>きよしう</sup>徴恍に結果的に助けられたとはいへ、援軍もこれ以上は期待できないし不利な状況は変わつていしないな。まあ、俺にも知らん複雑な状況が絡み合つてゐるみたいだから、これからどうなるかは俺には想像がつかないな」

寝惚けた頭を動かす為に、子琳は瞬きを多くして、廉毅の言つてることを理解しようとした。

「難しいか？」

少し考え、細い首を左右に揺らした。

「でも、そんな不利な戦況なのに、その大司臯さんが来たら一気に五分になるつてすごいですね」

廉毅は、ああと飯の手を止めると、確かにそうだな、と飯粒のついた手を衣服にのじつて子琳と同じように首を傾げた。

「お前も彰人ならわかると思うが、の方は別格なんだよ。<sup>ひょうえつ</sup>氷越つていうんだが、出た戦のほとんどに勝つてゐる。言うなれば常勝司臯だな。対成戦なら数年前に　　、うん、まあいいか。氷越が司臯として従軍した成との戦で大勝してな、だいたい二万くらいの成兵を

討ち取つたんだ。成は未だにその戦の傷を抱えたまで、国内の奴のほとんどが氷越を恐れてるんだよ。憎んでる奴もいるがそれ以上に恐れる奴が多い。俺は瀑？様に就いてたから見てないが、そりやあ凄惨だつたらしい。だから建恭で憂さ晴らしに彰人が虐殺されたんだろう。国境近辺だから他国や自国民も混ざつてたろうに」司龍も龍も皇術行使する。もし、皇術で二万もの人間を殺められるならば、龍もそれができてしまうことだろう。一体どんな術使つたのだろうか、と子琳は無垢な好奇心を抱いた。

「その氷越つて司龍は、何をしたんですか？」

廉毅の手が再び動く。

「司龍の術つてのは戦に深く関わるから対外的に秘匿扱いを受けてな、詳細はよく知らんが術を受けた奴に話を聞いたことがある」

子琳は藁をどかして聞く姿勢をとつた。

「ま、言つても大丈夫か。どうやら、良心を打ち消す術らしい」

「良心を……打ち消す？」

「うーん、なんというか、人を冷酷にするんだそうだ。血を見ても、仲間が倒れても動じず、ただ前の敵を冷徹に殺したくなるんだつてよ。そいつ自身、我に帰つた後で心を病んで里に帰つちまつたけどな」

廉毅は柄杓を使って碗をじやぶじやぶ洗いながら、空に放り投げるようになごく。

「大抵　俺もそうだが、敵と言えどもたまに情が移ることがある。性善説を唱えてるやつがいるが、そういうものなんだろ？　まだ戦場を経験してないからわかんないだろ？　が、積極的に相手を殺そうなんて思う奴なんてほとんどいない。だいたいは消極的な殺しだ、と俺は思う。幾つかの修羅場は潜つてきたつもりだが、どうもその辺りがまだ割り切れてないんだ。でも、その術にかかるまうと、單なる野卑な虎狼になっちまつて、そこらへんの部分を考えなくなつて積極的に殺せるんだろうぜ。その話を聞いて俺はなんだか、氷

越つて奴が怖くなつた

「どうして？」

子琳の疑問はすぐ言葉に直結する。

「どうしてつて……、人を畜生同然に変えちまつて好き放題殺されるんだ。たがが外れた人間が一番強くて怖いんだよ。確かに、軍にとつてそれは非常に有用な術なんだろうが、そんなものの積み重ねの上に胡坐をかいて座れるなんて、俺には無理だ。単に俺が小心者つてだけなんだがな。ある意味尊敬するよ」

そう言う廉毅の顔は、少し自嘲を込めているのが若干にやつしている。洗い終わると、さあ、と言つて立ちあがつて子琳に、

「ちよつと喋りすぎちまつた。今日は攻撃を恐れて城内が騒がしいからここから出るなよ、いいな。邪魔になるだけだからな。飯はそこに置いとくからちゃんと食つて碗も洗つとけよ」

そう言つと、廉毅はもう一度出るなといふことを念を押して外に出ていった。

子琳は湯気の立つている飯をぼんやりとみたまま、ちこちこく俯き加減になつた。

ただここで待つてゐるわけにはいかなかつた。逃げてしまいたいが、彼等を見届けてみたくもなつてきた。気持ちの上では、下界を天上から見ているような感じなのだが、実際はその渦中におり、成り行きによつては被害を受ける。しかし、この渦の中に何か自分のものを見出せそうな気がする。情が移る、そういうものなのだろうか。

その時、窓枠をコツコツと叩く音がして振り返ると、綺麗な茶の瞳が外から覗いていた。

「ねえ、子琳。昨日の妖獣見にいつてみない？」

瓊凜の喜々とした表情がそこにあつた。

子琳と瓊凜の二人は周囲にばれない様に、ひつそりと兵舎を抜けだした。外敵への見張りに人員が多く割かれ、みな大司臈を見に行つている為か、小さい子供の一人は案外誰にも見つからずにすんなりと抜け出すことができた。

廉毅の言いつけをこんなに簡単に破つてしまつて大丈夫なのだろうかと一瞬思つたが、ふしきといつの間にかどうでもよくなつてしまつた。

「子琳も興味あるでしょ、私間近で妖獸ようじゅなんて見たことないの。いつも危ないからって近づかせてもらえないのよ」

瓊凜の目はいつにも増して眩しくきらめいていた。櫓から見えないよつ、崖の影になる道を跳ねるようにして歩く彼女についてゆくのは、疲労の取れない子琳には辛いものだが、何故かそこまで嫌だとは感じない。

実のところ、あの妖獸ようじゅについてはずつと気になつていた。人が儂獸を飼い馴らすというのはどこかでちらりと聞いた事があるが、実際に見たことはない。だが、少し市中を探せば妖獸の売買を生業にしている輩なんていうのは巷にごろうごろいる。稀有な妖獸は高値で売り買いされ、騎乗用、嗜好用となるとその値は一気に高くなる。墮ちた人間の売り買いもしているのだから、言い換えれば人身売買と言うに近い。敗戦国の人民を奴隸として売り買いしていた国など珍しくないこの時代であれば、その辺の倫理觀はあまりないと言つていいだろう。人身売買など日常茶飯事であるということだ。しかし、奴隸という制度は人の自立性を失う野蛮な習俗であると唱える一派もあり、最近は奴隸階級を設けていない国もちらほら現れている。

正直なところ、子琳にとつて妖獸・儻獸などなんの珍しさもないのだが、あの堅物そうな瀑？が獸などを手懐けているといふのは、興味の琴線に触れるに十分であった。

肩幅ほどの崖沿いの小道を抜け、なんとか妖獸が居ると言つていた高台にある厩舎の裏手に辿り着いた。崖からは砦の裏手にある高鮮の街巷を綺麗に俯瞰することができる。至る所で炊煙が立ち上り、慌ただしく人々が城の中心である街衝（街の中心街）を往来しており、戦中であるのを一瞬忘れさせた。

よくこんな裏道を知つてゐるなど感心していると、突然瓊凜が振り返つて子琳の口を小さな手で押さえた。

「あれね」

瓊凜が静かに指さす方向を見ると、厩舎の中の暗がりに何か馬ではない大きな緑色の影がいる。しかも一頭だ。

「入つて近くで見てみない」

奥の小屋に厩丁（厩の世話係）が入つて行くのを見計らつて、二人はその大きな緑色の影に近づいた。

厩舎の中には馬はいなかつた。さすがに妖獸と一緒にするとよくないのか、それか連れて行かれたのだろうか。物陰に隠れて覗くと、積まれた秣をはみ出して何かがもぞもぞ動いている。

「まあ！」

その妖獸を目の当たりにして瓊凜の眼はその輝きをさらに増した。

そこにいたのは、馬と虎を足したよつた形態をし、子琳の身長の三倍ぐらいの高さで、体中にびつしつと生え揃つ緑と黒の美しい毛並み、そして背には光の当たり具合によつてきらめく潤美な翼を持つ凜々しい獸だった。

片方は紅の鬚を、もう片方は緑の鬚をもつており、鋭い曲剣のような牙が口元から見え隠れする。

「す、すごいわ…… 一体なんて言うのかしら」

瓊凜は導かれるようにこの妖獣の前に出た。二頭の妖獣はこの突然の来客など意に介さぬような落ちついた様子で、格子の外を眺めたり、お互いの毛繕いをしている。お互い仲が良いようだ。

「確か、翼翠」

子琳の記憶のどこかにこの妖獣の名前があった。非常に美しい妖獣で、子琳も一度見たきりだった。これが元、人である儂獸ならばとても稀なことであり、地方によつては逆にめでたいとまで言われるほどである。なぜ翼翠になるのかはよくわかつていない。

「へえー翼翠っていうんだ、よく知っているわね」

「い、いや…… 画書でちょっと見たことがあるだけで……」

「へえ……」

瓊凜の興味はすでにこの妖獣にしかなかつた。翼翠の些細な動きも、まるで猿の芸でも見ているように手を叩いてはしゃいでいる。恐れなど微塵も感じていないうだ。

「私、こんな綺麗な生き物初めて見たわ。すごい、すごい、こんな生き物を手に入れるなんてやつぱり瀑？様はすごい人なのよ。廉毅つて奴は嘘つきね、こんなにおとなしいじやない、喰われるなんて言いすぎよね」

興奮で火照った頬が赤く染まる瓊凜を横目に子琳は少し浮かない表情をした。子琳には触れるよりも容易にわかつた、この翼翠は人であつたといふことが。

しかも二頭ともである。素人目の人だつたか元からの獣かなど見分けはつかない。専門的な知識さえあれば外部の差異などで判別はある程度可能であるが龍には直感的にわかるのである。一説には心を失つた痕跡が見えるからだといふ。

「瓊凜、この翼翠は…… 人だ」

瓊凜はきょとんとして、子琳の顔を見つめた。

「どうしてそんなことがわかるの」

「……それは、

また余計なことを言つてしまつたとやや後悔した。思つたことをすぐ口に出してしまう悪い癖だ。

「なんとなく……そう、なんとなく」

「ふーん、でも人がこんな美しい生き物になれるのなら、それもいかかもしれないわね。なんだか憧れちゃうわ」

そう言つて微笑む瓊凜の目は妙な寂しさを秘めていた。それを見てふつと、この醜い現実からの逃避を望んでいるのだろうか、そう心のどこかで思った子琳は、この活発な少女の身上を思つて同情を感じざるを負えなかつた。そして、瓊凜はしゃがみ込んで地面の土を指で遊び始める。

「翼翠もいいけど、私龍になりたい。雛龍に

「ど、どうして……？」

子琳は少しどきりとした。地面に龍と描いて瓊凜は溜息を吐く。

「だって、自由じゃない。美しい龍宮で何不自由なく過ごして、臯術を使って、飛んでいろんなところへ行けるし、綺麗な絹の衣を着れるし王族が身につけるような宝飾ももつてゐし、何よりすっげく楽しそう。そう思わない？」

子琳はとりあえず頷くしかなかつた。確かに、雛龍は下界の人々の大半が持つていらないものを持つてゐるし、龍宮では非常に丁重に扱われ護られている。人々が憧れて止まない生活を過ごしているわけであるが、その大半の人にあるものがない上、制約、そして責任も多い。今もこうして拘束状態にあるのだから、正直心から楽しいとは言えない。子琳にはむしろ下界の人々の生活のほうもいいと思っている節があつた。

「でも、無理……。私みたいな醜い心を持つた子供なんて仙帝から召されるはずないもの。雛龍は純粋で無垢、私は親の仇に凶悪な復讐心を燃やしてゐる。ほんつて……どうして……」

瓊凜はぼろぼろと涙を零していた。鼻水をすすつては腕で拭い嗚咽のような声をあげて泣き声を我慢している。子琳はどうしていいかわからなかつた。どうすることもできない。この哀れな少女を救う手立ては今の子琳になどなかつた。離龍である自分は純粹で無垢などとは思つたことはないから、そこまで気落ちすることもないとも言えないし、仙帝に瓊凜を召すよう奏上することもできるわけがない。またいつの間にか複雑な心境の狭間で板挟みになつていた。案外龍は無力なのである。

すると、突然一頭の翼翠<sup>ヒツキ</sup>がいきなり唸り声をあげて厩舎の外に威嚇している。みると、外に幌をつけた車馬が止まっていた。幌とは乗用車につける日よけの幕のことである。この時代、車は身分のあるものしか乗ることを許されなかつた。御者が御す一頭から四頭の馬に車体の部分曳かせ、乗る人がその車体に立つたり座つたりして乗るのである。位のある人物を乗せる御者には官位が与えられたというから、その時代の車の重要性がうかがえる。

「誰か来た」

慌てて俯く瓊凜の濡れた腕を掴んで、物陰になる株の裏へ隠れた。馬に乗る武装した男が二人降り大きく何かを呼ぶように声を上げ、次いで車に乗つていた男が下車すると厩丁が転がる様に小屋から出てきて平服した。そしてその水色の深衣を纏う高貴そうな男は厩丁に何かを告げると、二人の男を引き連れ厩舎に向かつてきた。

（大変だ……）

厩舎の入り口は一つしかない。そこから出れば見つかってしまう。廉毅を怒らせたくなかつた子琳はビックリしてこの状況を脱しようか慌てて考えた。

「見つかったら、さすがに叱られるだけじゃ済まないわね」

瓊凜もなんとか落ちついて、辺りを見回し逃げれないかと考えるが、

格子にはすべて木棒がはめられ、子供といえども抜け出せる大きさではない。

そういう思案している内に、三人組の男が廄舎の中に足を踏み入れた。中に入るなり脇の武装した男一人が声を上げて驚く。

「これは……！……翼翠」

「子堯様、この妖獸は」

（子堯様……？ 確かこの国の大司馬の名じやない。どうしてこんなところに）

瓊凜は訝しそうに隙間からこの男達を観察した。子堯は不敵な笑みを浮かべると、木簡と筆を取り出し、さらさらと何かを書いた。

「この翼翠はおそらく儻獸、元人です。私の推測が正しければの話ですけどね。ですが、正しければ瀑？殿はとんでもない隠し玉を持っているということになります……。しかし二頭とは、少々推測とずれが生じますね」

「どうこうことです……子堯様」

「あなた方の俸禄には見合わないことです。知れば身を滅ぼしますよ」

子堯の声はとても冷たい。声色なのか口調のかわからぬが、ひどく冷徹なものを感じる。子琳は廉毅の言つていたことを照らし合わせながらこの男を見た。人の激情と凶暴さの上に胡坐をかけて坐る人物、その割にはとても品のある清廉な顔をしている。だが、子琳には彼から感情とは程遠いものしか感じなかつた。温もりなどなく、ただ氷のように冷たい。それだけで子琳には彼に対し畏怖を持たざるを得なかつた。

「構いませぬ」

二人はそう言い切つた。子堯はふうと息を吐きだし一人に目も合わせず、木簡に筆を滑らせていく。

「」の翼翠は襄王（先代の王）の太子です」

厩舎きゅうしゃに一瞬の間が生まれた。従者である一人の男はこの言葉の意味の重大さに間をおいて気付いたようであった。

「殿、事が大きすぎます」

「大王と丞相じょうしょうが処刑なされた太子がなぜ暴ぬる? のもとに……?」

(太子……?)

子琳は首を傾げた。なぜか、この言葉の意味が記憶から欠落していた。そのときは、この言葉の意味よりもむしろ、なぜ自分が瞬時に思い出せないのかが強い違和感を覚えていたわけであるが。

けいりん瓊凜けいりんが察したのか、微かな声で子琳の耳元に呴く。

「王様のお世継ぎのことよ」

ああ、そういうえば。と合点がいったのと同時に、頭がずしりと少し重くなつたような感触を覚えた。このときはまだ、彼は些細な体調の変化としか捉えるにすぎなかつた。

子堯は周りを一瞥した。

「蜘蛛糸を手繰るような憶測ですが、半年ほど前、生前に太子の所持しておられた印と剣が宮中の国庫から持ち出されたという噂をまたま親しい官吏に聞きました。これが私に囁み合わせのよろしくない事実として頭に植え付けられましてね。若い現王に未だお世継ぎはなく、空席の彰國太子の印璽など今はなんの意味を持たないのです。それでは何故盗人は厳重な警備の敷かれた宮中から、わざわざなんの効力もない印と剣だけを盗んだのか。国庫には創国の頃よりの名剣や金銀玉器があつたはずですが、なぜそれらなのか。襄王

の三人の太子はみな殺されたか他国で庶民におとされているのにも  
関わらず、です」

喋りながら子堯の顔から笑みがこぼれた。

「太子がまだ存命であると……？」

「可能性は高いですね。そうなればどうなるか……」

まだ幼い子琳と瓊凜には難解な話に聞こえた。しかし、その重大さが子堯の話ぶりと側近の顔色や国という単語で多少は分かる。彰という国の明暗を分かつような規模の秘密の話。ということは、聞けば子供でも見つかれば容赦はない。そのことを本能的に察知し、縮こませた身体をさらに恐縮させた。

その時、外から砂利道の轍わだちと車輪が擦りあつ音と何頭かの蹄の音が聞こえた。

音が聞こえるや否や、子堯は簡をわざと懐こしまつと小さく舌打ちをし、側近に告げた。

「勿論、この事は他言無用です。まあ言つたといひで誰も信じはないでしようが」

そう言つと、翼翠よくすいに一瞥を向ける。これが、太子ならばもう一頭は。

そのとき、たまたま視界に厩舎の湿つた地面が映つた。何かが描かれている。それは文字だった。

雛龍

(雛龍……！？)

子堯の表情が一瞬強張つた。

「どうされました

「……いや、なんでもない」

子堯は地面の文字を足で消すと、袖を翻して外へ出でていった。

瓊凜は藁の隙間から子堯達が見えない位置に行つたこと確認すると、子琳の手を握った。不思議なことに彼は汗をかいていなかつた。

「今しかないわ。早く逃げましょう」

手を引かれながら子琳はもう一度、この美しい翼翠を見る。そして、想つた。綺麗だ、と。

「そうか、大司臯が」

瀑？は幕営で布帛の陣図を眺めがらその報告を受けた。

「……知れたか」

「殺すべきです」

韓泰 麗其の発言にその場にいた他の三人が同意した。事実を知つてているのはここにいるもののみである。

「奴は危険です。ここに来たのも我々の秘密を内偵をするために違ひありません」

「ならば、知れているということになる。私は真っ先に將軍の任を解かれているはずだ。それに」

瀑？は布帛に描かれた桂丘の文字を指でこいつこいつと叩いた。

「大司臯なしでどうこの窮地を乗り切る。これ以上の援軍も持めない、後方では火種、前面には城壁を乗り越える奴がいるときだ。司臯なくしては勝てんだろう」

「確かにそうですが、外敵よりも内敵の方が恐ろしいとよくいわれております。後顧の憂いを断つ為にも、ここは『明察を』蘇甲が声を押して意見を述べた。これに対して、瀑？は面を伏せ、少し口を曲げた。

子堯のあの冷静な顔が脳裏に浮かぶ。奴が何を考えているのかなど見当がつかない。だが、彼が完全に敵だとは思えなかつた、と同時に、同じ志を遂げられる者だとも思えなかつた。各々の異なつた疑惑がこの件に關してだけ交差した、といふよつた感じである。

「良（不騎）はどう思つ」

不騎は間をあえて作った。瀑？が望む答え、それを考えた。客觀的な天秤にかければ、それは自明である。

「今は、國を寸分でも守ることが、懸命かと」

この答えを聞き瀑？の面持ちが少しばかり明るくなつた。

「そうだな。大義の為、毒を制す為に毒を服することも致し方なし、か」

この瀑？の言葉に集まつた者達は何かを含みながらも渋々頷いた。だが瀑？に疑念は抱いていない、状況を見れば飲まねばならぬ毒であつた。

「毒は少量であれば薬ですが、量を誤れば致死。毒が体に回りきる前に処方をしなければなりますまい」

そうだな、と瀑？は頷く。

「奴を龍には近づかせぬことだな」

成という国は戴四邦のうちの璃州（東璃）の東南に位置する。

西を彰と国境を接し、東に海を有する。首都は渟都。<sup>すうぱう</sup>ここから渟<sup>てい</sup>ともいわれる。土地は戴邦のほぼ中央<sup>すうばう</sup>嵩邦<sup>すうぱう</sup>の神山から流れる五仙河のうちの一つ、芳川<sup>ほうせん</sup>の支流が平原を潤し肥沃、海運業も盛んで他国との交易も頻繁に行い、他文化の摂取も比較的よく行われた。その為か諸国と比べても、特に外国の者に寛容であった。これが、容易く他国の人間である魏素の將軍抜擢<sup>ばくたく</sup>が行えた遠因ともいえる。実力があるのならば、それを素直に認めるという風潮が根底にあつた。と言つても、戴邦では人材の流動などは日常茶飯事のことである。

五国と国境を接することから、外敵の侵入を防ぐべく軍備の増強が度々行われた。そのため、幾度もの戦闘で兵士は精強であり、史に名を残す名将がたびたび出現する所以<sup>ゆえん</sup>となつた。しかし、それも数年前を境に下降を辿ることとなる。

現成王の名を、秀<sup>しゅう</sup>といつ。王位に就いたのが弱冠15であつたが、すでに齢60近く、長年玉座を温め続けた。彰や他国との争いを可能な臣下の尽力で乗り切り、国内の政治に人生の大半を捧げ続け、ついには璃州一の国力を持つと、一時は璃州の約半分を版図におさめた。

だが、これ以上の勢力拡大を恐れた周辺国は彰を盟主に連合を結成、成の国境へと流れ込み、悉く城を奪つた。中国の戦国時代に燕の樂毅<sup>がくぎ</sup>が連合軍の盟主として当時強大であつた斉を滅亡寸前にまで陥れたのと似ていた為、一時総大将であつた司馬肩は樂毅に準えら

れたが、結局は各国軍の内部軋轢により楽毅の偉業には到底達しなかつた。結果は前述の通りである。土地は荒れ名だたる名将や数万の士卒を失つた成王秀は酷く心を病み、いつしかこの老王は国民の怨念を一手に引き受けたかのように璃邦の征服に執着する。

そして、ここ数年で成の官兵の結束もあつてか、付け焼刃ながら軍備を再び整え璃邦の平定に乗り出した。国の運命を賭したといつていい総力戦である。

「疵きずはどこか」

魏素は「ふらふら」と川辺に出て、ひび割れた珪石の丸石を手に取った。  
「いくら完璧な玉たまと謂えども、疵があればそこから割れる。ならば、金城湯池の砦も同じであり、鉄のような結束の集団も然り」

玄順は魏素を見上げつゝこっくりと頷いた。

「玉の細かな疵は凝らして見ねばわからぬぞ」「確かに、と魏素は丸石を掲げ片目でこの丸石を覗きこんだ。白いが表面がざらついている。陽に透け、所々淡い光を帯びている。  
疵はどこか　　魏素は団子のような鼻を摩ると、また独り言のようになに言う。

「嫌な予感がします」

独り言は玄順の朽木の節のような大きな耳に届いた。

「氷越か？」

「あ……いや、それもあるかもしれません。ですが、もっと気がかりなのは……」

「……天、微恍きよひうか」

玄順の皮張った喉が唸つた。

「はい。少し、この戦で不可解なことが起きすぎているような気がします。情報では幾人かの将が微恍のさなか、高鮮への逃走路とは

逆の場所で目撃されている。彼等が何をしていたのかが非常に気になります」

魏素は掌で石をぎゅっと握るとその長い腕を振り被つて川の反対側へ思い切り投げた。石は、砦の周りに張り巡らされた柵に当たるそのまま砕け散った。

「それはこの戦の勝敗を左右するものか、李譲。確かに徽恍は我々の進軍を阻んだ。おかげで予定よりも行軍が多少遅くなつたが、いずれは奪らねばならぬ場所。あれは天意かもしけんが偶然かもしけん。もしくは毘民が呼び寄せたのかもしけん。少なくともやつらが天の力をどうこうすることはできん。龍でも味方におらん限りな。そこまで心配するほどのことでもなかろう」

龍でもいれば、魏素はもう一つ小石を握もうとした手を一瞬止めた。そして、何かに気付いたかのように振り返つて側に居た部下に叫んだ。

「間者からの報告で瀑？殿が建恭から逃げた子供を助けたらしいという情報があつたな」

魏素は入りこんでくるどんな情報でも聞き、そして目を通した。城内の兵士の流行りごとから、将の性癖までありとあらゆることを頭に入れている。側近のものはそれを確かめると、魏素に告げた。

「しかし、噂でしかなく不明確であるとのことです」

それを聞くと首を軽く捻つてから、最優先で調べると言つて、すぐに側近を遣わせた。

「ちと早急すぎはせんかね」

玄順は所々白く縮れた髪をじごいてたしなめた。

「例え子供を助けたとして、それが龍である証拠がどこにある。奴等は人の形をしてあるそつではないか。本当にただ子供を助けたのかもしけん」

「やうでしょうか」

魏素は歯が見えるような笑みを含めながら兜を外し、近くの幕営へとずんずんと歩を進めた。そして諸将に参考せよと呼び掛けた、奥の座で腰を下ろした。

「敗北し、命からがら敵中から逃げる将が、どうして活路とは違う全く別の方向へ行ったのか。ずっと引っかかっていました。それは、どうしてもそこへ行かねばならぬ理由があつたから。しかも、軍を担う将らが自ら動いたとなると、よほど秘したいとみえる。そこまでして助けねばならぬ子供。そんなものは王の太子か家の嫡男か、そうでないとすると 離龍か」

「莫迦な」

玄順は杖を振り落とした。

「どうかしてしまったか、李譲（魏素）よ。そんな都合よく、龍が降邦しているなど……！一ほとんどが推論を重ねただけの憶測ではないのか！？」

「ならばなぜ、瀑？ 殿はあえて死中へ入ったのでしょうか。慎重なあの方がそんな危険を冒すなど、説明ができない」

玄順は皺が伸びるような呆れた顔で言った。魏素は何かと何かが多少歪な填まり方をしていても気にしない性であった。要は、少しごらい見栄えが悪くとも填まればいいのである。この件であれば、瀑？ という男と離龍という組み合わせは、歪ながらこのうえなく合致の感触がよい。これはこの実直な男の欠点でもあり、才能でもあつた。それが的外れであれば、単なる凡庸な将であるが、図らずも的に当てていることが、この男をここまで伸し上げてきた所以なのだろう。玄順はそこを承知してはいるが、あらゆる可能性を考慮せねばならない参謀として、理を詰めねばならない。

「よいか、龍が誰かに与するなど、滅多にない」とじや。だいたい龍が陸炎（瀑？）に与してなんの利がある

だが魏素の耳には届いていない。

「そうか、そういうことか……！？」

魏素は童が珍しい虫でも見つけたかのように嬉しそう。

「田畠を貫く、といつわけか」

玄順は思った。

「いやつは瀑？の心が透けてみえておるのやもしれん、と。

魏素の陸炎（瀑？）に対する憧憬は並大抵のものではない。成にいるときも、大枚を叩いて間者を放ち、陸炎の戦況を逐一事細かに報せた。行軍速度、兵の統御方法、部将の器量、輜重管理、政治的立場、あらゆることを仕入れた。そして取り込もうとした、と同時に瀑？という人間を自身に会得しようとしたのだった。やがて部屋の中で収集した瀑？の戦場での思考を反復するうちに自分に瀑？が宿る気がした。

それが自らの憧れの完成であり、体現であると思つた。だが、憧憬に抱かれている心地よさは、母の腕の中でうたた寝するかの如く安らかであった。それを乗り越えられない魏素は、建恭で瀑？不在を聞いて安堵したことだろう。臆病というのとは違つた引けがあった。

魏素も内心驚いただろう。確たる根拠もないのに、彼の考えていることがわかるのである。戦争といいわば極限的な状況が魏素にある種の能力をもたらしたというのなら、それはあまりに瀑？にとって不運ということになるであろう。だが、玄順にとつては必ずしも芳しいことではなかつた。

「主君を討つといふのか」

その言葉には、翳りが含まれていた。魏素は濡れた布で顔を拭い

しと拭いてから、田を一点において言った。

「近年の彰の政治は日に余るものと聞いてあります。丞相が実権を握り王は傀儡、しかもその王はその専横を見て見ぬふりをし、毎晩酒色に更けていると。あの剛直な陸將軍がそれを許しておられるはずがない。建恭の任を急に解かれたのも王や近臣と確執があるからと考えるのが自然。だが、彰の功臣の家系である陸將軍が彰そのものの大奪など考えづらい。そもそも、あの方に限つてあり得ない。ならば龍を旗頭に」

「根拠はあるのか?」

突然言葉を遮つた。

「お前は、陸炎を知りすぎて、勝手に奴と自分を重ね合わせているのではないのか」

玄順の問いに魏素は口を開けたまま次の言葉が出ず黙り込んだ。「仮に。仮に奴がその企てを口論んでいたとして、この戦にどう結び付く。結局奴はこの戦いに勝たねば謀反すら出来ずに斃れるだろう。ならば、その前に我々が勝てばいいだけのこと。離龍など関係ない。今、こうやっているときも、如何に我が軍の損害を少なくしてあの砦を落とすかを考えねばならぬのではないか」

「だからこそです」

魏素の瞳に何か熱いものが宿る。

「あの方の守備に疵などほとんどありません。編みこまれた鎧帷子に指を差し込むが如きです。私の概算ではあの砦を落とすのに千から一千の死傷者を出し、千ほどの武器を損失するでしょう。しかし、もし離龍がいたとしたら、もっと容易くかの城は落とせる」

玄順は、なおも信用していなかつた。いや、信じたくはなかつた。それには理由があつた。

魏素は最初であり最後の弟子である。その人間性は会つた時からと

ても気に入っていた。必ずやこの芽生えたばかりの才能の塊を世に知らしめ、優秀な帷幄の臣として天下に埋没しかけた我が名を轟かせようと、この老人は決意していた。しかし、玄順に残された時間は少ない。

魏素の陸炎への昏倒ぶりは最近過剰になっていた。自らが陸炎にでもなったかのように振舞い始めた。崇拜と憧憬の狭間、模倣と言つていい。だが、陸炎の跡をなぞりうるというのは、出世への道を閉ざすだらう。あの國士は、自らが王になり変わらうなど考えようともしない。永遠に王佐で満足するだらう。魏素にそうなつてもうつては困るのである。

玄順が欲しいのは躍進、榮達、権力、を導いた賢臣の地位。あの老いた成王が死んだとき、必ず内紛が起きる。いや起こす。その為に策謀を巡らしてきた。その政争に参戦する地位、政治的発言力を得る為にこの戦いに勝つ必要がある。國の為の謀反などではなく、私欲の為の謀反、篡奪。しかし、このままでは下らない義憤に駆られ魏素はそれを渋る可能性があり、機を逃しかねない。残された時間は僅かである。

「ではどうする、その可能性に賭ける価値あつか」

魏素は卓上の駒を一つぱつと掘んで握った。

「その子供を捕らえ、質子ちしにします。例え離龍でないにしても、将二人を犠牲にして守つた子供、交渉の種ぐらいにはなりましょ」  
「それで相手から何を引き出す?」

「そうですね……」  
そつと空を見た。

「大司臈を殺してもらいましょうか」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0241/>

---

戴邦物語

2011年11月17日19時01分発行